



金澤詩人20号

2023金澤詩人賞

目次

2023金澤詩人賞 7

授賞理由 9

作品

名前 年齢(応募時の) 住所 頁

◆三郎 丸(36) Lyon, France 10

◆篠塚彩良(13) 大阪府 16

◆室 十四彦(67) 静岡県 18

◆未来の味蕾(47) 京都府 21

◆藤 秀一(23) 北海道 26

◆徳丸魁人(26) 愛知県 28

◆サカイ遠雷(35) 東京都 34

◆朝詩久楽(19) 神奈川県 41

◆藤千馬(21) Singapore 44

◆梶本堂夏(31) 沖縄県 46

◆吉田華奈 Vancouver, Canada 50

◆佐藤良紀(37) 東京都 51

◆西園寺リル(48) 徳島県 55

◆杉平敦(40) 東京都 63

◆Eli in church(28) 東京都 64

◆緒方水花里(25) 福岡県 66

◆荒木隆之介(20) 栃木県 67

◆エリー、ファー(31) 東京都 69

◆斬波なおみ(21) 埼玉県 70

◆桜田弥生(25) 千葉県 72

◆小崎 青(38) 東京都 74

◆早坂泰子(88) 宮城県 77

◆荒れ野(16) 岐阜県 78

◆狩野愛依(12) 埼玉県 84

◆あべりさ(19) 神奈川県 85

◆和田愛実(22) 神奈川県 92

◆アスフェリカル(59) 兵庫県 96

◆平久保好一(39) 東京都 97


◆平田稔一郎(67) 群馬県 98

◆芦野夕狩(35) 愛知県 99

◆綿瀬菜穂子(23) 愛知県 101

◆清水悠正(22) 東京都 102

◆林淳(25) 大阪府 103

- ◆小林枕(27) 東京都 1 1 0
- ◆ (35) 東京都 1 1 2
- ◆村雨巧夢(67) 大阪府 1 1 3
- ◆入間しゆか(32) 1 1 4
- ◆琴森 戀(51) 沖繩県 1 1 5
- ◆漣(68) 福井県 1 1 7
- ◆二藤(22) 沖繩県 1 1 9
- ◆畠山拓干(80) 栃木県 1 2 3
- ◆丁(17) 東京都 1 2 6
- ◆E(23) 静岡県 1 3 0
- ◆有原悠二(37) 奈良県 1 3 2
- ◆No.6(28) 福岡県 1 3 7
- ◆桜咲(23) 愛知県 1 3 9
- ◆北村千絵(58) Singapore 1 4 4
- ◆るりなつよ(46) 茨城県 1 4 6
- ◆齋藤礼(22) 東京都 1 5 3
- ◆伊藤Q.i則(35) 1 5 5
- ◆麦家(28) 東京都 1 5 6
- ◆秋月平也(45) 東京都 1 5 8
- ◆手向ける(18) 東京都 1 5 8

- ◆あんのくるみ(37) 埼玉県 1 6 0
- ◆吉田愛香(16) 東京都 1 6 0
- ◆田村悠一郎(24) 京都府 1 6 1
- ◆石川小傘(56) 千葉県 1 6 2
- ◆水蓮花(13) 東京都 1 6 4
- ◆一色冬陽(25) 滋賀県 1 6 5
- ◆堀 茉夕(27) 東京都 1 6 7
- ◆桑島明大(30) 東京都 1 6 9
- ◆小谷松かや(65) 東京都 1 7 0
- ◆榛あお(19) 岡山県 1 7 1
- ◆ナチ(23) 東京都 1 7 2
- ◆幸地チカソ(36) 沖繩県 1 7 2
- ◆たんぽぽ(13) 群馬県 1 7 3
- ◆ナツメナギ(38) 北海道 1 7 4
- ◆回避(17) 東京都 1 7 5
- ◆河原ほか 鹿児島県 1 7 6
- ◆月辺達矢 千葉県 1 7 7
- ◆清水らくは(43) 熊本県 1 7 8
- ◆月野シトルネ(38) 広島県 1 7 9
- ◆紗奈さより(31) 神奈川県 1 8 2

- ◆ ころぶね (42) 神奈川県 184
- ◆ 横道逸太郎 (31) 東京都 185
- ◆ 早水たき (25) 東京都 185
- ◆ 松田佐登美 (80) 埼玉県 186
- ◆ 佐伯凜 (21) 千葉県 187
- ◆ 相馬 実 (27) 大分県 188
- ◆ あさとよしや (41) 沖縄県 189
- ◆ 長澤雪 (30) 大分県 192
- ◆ くろ (41) 北海道 193
- ◆ 沼田きえ (59) 神奈川県 194
- ◆ 藍羽由宇 (21) 千葉県 195
- ◆ 戸賀崎恵太 (19) 埼玉県 198
- ◆ 岩渕新 (18) 東京都題 198
- ◆ 渡辺真麻 (18) 東京都 200
- ◆ 邇邇玉 (56) 宮城県 200
- ◆ 渡辺八畳 (28) 東京都 201
- ◆ 遠野しま (33) 埼玉県 202
- ◆ 谷 凜乃 (19) 神奈川県 204
- ◆ 翔麗 (52) 宮城県 205
- ◆ 大江 豊 (63) 愛知県 206

- ◆ 土肥和子 (58) 北海道 210
- ◆ 麻樹子 (43) 福岡県 211
- ◆ 橘 美花 (42) 福井県 213
- ◆ 鈴木夏子 (50) 兵庫県 214
- ◆ 湊 (16) 長崎県 216
- ◆ ウワヤユキ (28) 神奈川県 216
- ◆ 雨宮信夫 (72) 神奈川県 219
- ◆ 響きよう (27) 宮城県 219
- ◆ 宵闇ことね (25) 香川県 222
- ◆ 緑羊渚 (28) 東京都 223
- ◆ 大西陽子 (52) 岡山県 226
- ◆ ユエ (21) 東京都 227
- ◆ 中村真理子 (31) 兵庫県 228
- ◆ 菅原疏来 (18) 埼玉県 230
- ◆ 星野芳太郎 (75) 神奈川県 231
- ◆ 竹口久美子 (39) 京都府 232
- ◆ 昆布いおり (20) 神奈川県 234
- ◆ 詩桜 (49) 北海道 235
- ◆ 依田畷 (19) 東京都 237
- ◆ 近藤善揮 (55) 東京都 238

- ◆ 栄 茉莉 (22) 東京都 2 4 0
- ◆ 八海夢現 (39) 北海道 2 4 1
- ◆ 白石香織 (48) 茨城県 2 4 2
- ◆ 空々菜 (65) 東京都 2 4 2
- ◆ 水木 (16) 茨城県 2 4 4
- ◆ 堀場竜哉 (44) 静岡県 2 4 5
- ◆ 橘いずみ (42) 島根県 2 4 6
- ◆ 末永 逸 (61) 鹿児島県 2 4 7
- ◆ 中原ゆうり (16) 高知県 2 4 9
- ◆ 鱒 (22) 東京都 2 5 0
- ◆ 伊藤一男 (76) 埼玉県 2 5 1
- ◆ 小川 流 (54) 神奈川県 2 5 3
- ◆ 早希子 (45) 沖縄県 2 5 4
- ◆ 鈴木みゆう (17) 東京都 2 5 5
- ◆ 黒澤悠剛 (22) 東京都 2 5 5
- ◆ 五十嵐安里 (19) 東京都 2 5 6
- ◆ 重ひろし (56) 岐阜県 2 5 7
- ◆ シラサカタカノリ (59) 埼玉県 2 5 8
- ◆ ブルックスキラニーアリーヤ (14) 沖縄県 2 5 8
- ◆ 少雨 (43) 東京都 2 5 9

- ◆ 水口怜美 (15) 東京都 2 6 1
- ◆ 瀧口優菜 (14) 広島県 2 6 2
- ◆ 武重路子 (74) 神奈川県 2 6 3
- ◆ 今村瞳子 神奈川県 2 6 4
- ◆ 岸本佳奈 (16) 愛知県 2 6 5
- ◆ 仁後林太郎 (57) 石川県 2 6 6
- ◆ 佐原龍誌 (73) 東京都 2 7 2
- ◆ 芦田晋作 (49) 東京都 2 7 6
- ◆ 依田敦実 (25) 東京都 2 7 7
- ◆ 梅本 葵 (17) 広島県 2 7 7
- ◆ 西ヶ開公一 (51) 京都府 2 7 8
- ◆ 疾風向 (20) 兵庫県 2 7 9
- ◆ 岩尾宏紀 (47) 大分県 2 8 1
- ◆ 伊藤寛納 (21) 大阪府 2 8 2
- ◆ 世良イオリ (31) 茨城県 2 8 2
- ◆ 辰己尚平 (44) 大阪府 2 8 3
- ◆ 魚群探知機 (20) 東京都 2 8 6
- ◆ 空見タイガ (29) 大阪府 2 8 8
- ◆ 荒井一衣 (38) 茨城県 2 8 8
- ◆ 田崎亜弥 (45) 大阪府 2 8 9

- ◆和泉次郎(47) 新潟県 290
- ◆ミキコトホ(51) 広島県 291
- ◆さと(18) 埼玉県 292
- ◆佐藤花美(31) 石川県 293
- ◆松村玲子(83) 東京都 293
- ◆畷久 密(19) 福島県 294
- ◆広瀬求(41) 秋田県 295
- ◆甘夏これ(27) 埼玉県 295
- ◆デイジー(87) 福岡県 296
- ◆深澤 健(61) 埼玉県 297
- ◆樹(17) 兵庫県 297
- ◆屋敷旺甫(51) 京都府 298
- ◆柳生たまみ(48) 神奈川県 299
- ◆南久子 大阪府 300
- ◆れい(12) 大阪府 301

ニューヨーク便り

- ◆阿部静雄 New York 302

編集後記 315

2023年金澤詩人賞

三郎 丸 氏

プロフィール

1987年、千葉県生まれ

早稲田大学第一文学部卒業

2021年より仏リヨン在住

幼少の頃から会社勤めの今に至るまで詩作や短文の創作を趣味の範囲で続けており時折 blogs 等に投稿。

公募や賞への参加は今回が初めて。

受賞のコメント

私にはいつからか、書くことが自分の一部として常に存在していました。

日々の暮らしの中で自分の足元が揺らぐようなことがあったりしても。また今後もし生活がままならなくなるようなことに陥っても。まあ自分には書くことがあるしな、書くことがいつも残っているから、と思って生きてきました。

2023年は生活の中で色々なことがあり、泣いたり笑ったり

立ったり座ったりしていた一年が過ぎて、それらの感情を通してしながら書いて書いて書き綴ってきたものが、こういう形で結晶するのは不思議な気持ちで、また勇気づけられる想いがします。

仕事帰りのごった返した都内のバスで、長い夏の日の差し込むフランスの小さなアパートで、長距離フライトの機内の暗がりの中で、はたまたリヨンの小汚い路地を歩きながら書いてきた言葉がこうして評価されることに言葉の力を感じます。何より、創作すること、書くことの冒しがたい力強さを。

応募した作品の中で、『わわわわたしは』について少しだけ。心と、言葉と、身体とは、近いけれど、近いからこそ相反している。言葉は網目のついた型枠のようなもので、それでは掬いきれないもの、象れきれないものがたくさんあります。語彙の限られた外国語を話す時、その指の間からこぼれ落ちていく言葉に落としきれない何か。それは自由に扱っているように思える母国語ですら、網目の目が細かいだけできつと同じなのだと思えます。

この詩はだから、普段のように身体が言葉に従うのではなく、言葉が身体感覚に寄り添うような形で、言葉ですらない音を落

とすつもりで書いていました。それこそ、踊るような気持ちで。お酒の入った頭で東横バスに揺られながらこの詩を書いたあの東京の蛍光灯の暗がり、今もよく覚えています。

私たちは同じ言葉など喋れなくとも、わかりあえなくとも、卑小で非力でどうしようもないと思っても、どうしようもなく私たちがしかいられない。書く、もしくは別の形で、表現し存在せずにはいられない私たち。

私たちの預かり知らない遙か昔から書いてきた先人たちと同じように、私はこれからも書いていき、私が死んでもからも知らない誰かがずっと書いていく。

そのことに、とても暖かい頼もしさを覚えます。

このような形で受賞の誉に預かったことを大変光栄に思います。この知らせは、外国でポツンと生きる私の足元を照らし、色々な人と私を今までにない形で繋げてくれました。本当にありがとうございます。

授賞理由

大江健三郎は小説『新しい人よ眼ざめよ』で、ブレイクの詩を通して低音のように響かせ、難解な修辞の裏にある意味を追究することによって、登場人物に深い彫琢を加えることに成功しました。

今回の応募作品にも、修辞に優れたものが多く、隠喩、換喩、直喩、提喩など様々な手法が用いられています。

その中から三郎丸氏の詩編を、次のように評価しました。

「わわわわたしは」の一編は、以下の三編を凝縮したものと理解できます。

四編の詩は、心と肉体の相克を表したもので、そこからの脱出を志しながら果しえない、心に対する肉体の逆襲に苛まれている、自分にとっては過酷な状況を、言葉巧みに表現しています。

例えば指先に針が一刺しただけで、肉体の反逆を受け、心は委縮し、言葉化できない自己が露見します。そのような実存を受け入れて、詩は作られています。

その中で注目した表現を抜粋します。

「生そのものの見苦しさと息苦しき」

「幸せになることを許せない自分」

「自分であることを諦めようとしている」

「自分で自分を不自由にすることがばかり得意になってしまった」

「メイはメイを疲れさせる」

「気持ち酷使しすぎた結果身体が心の持ち物になってずいぶん長いこと経つ」

「誰とも分かりあうことなく自分のために生きられること」

「ようやくと心は身体を引き留めにやってきた」

「それが何だと言うのだ、優しいあの人を無くすことに比べたら」

「身体は一瞬も止まることなく変わり続けていた」

「生きることをやめられない」

「暖かさを失うその日に怯える苦しさ」

なお2023年度は、3209編の作品が寄せられました。

(金澤詩人倶楽部代表 近岡礼)

◆三郎 丸(36) Lyon, France

わわわわたしは

指の先の針の一刺し、

ひ

ひひ

ひひひ

電気信号になつたつたつた

ぶらぶらぶらぶ。

おと、おととおととおと。

べじがいしんぬて

まらしやり。

みてむてめねしてあきぬくす。

あま、あまがえりいでてりつ。

ふし、ふふぶらふ。ふふぶらう。

べいんてべしみんせぱりうらつ。

つつつつつ、つた。

たらたたらた

うるするうるする

するうるするす、

つもりなは。

ゆく、ぼうりけとぬす。

ならにはわ

はまわらなはらわぬ

さまはりつ。

つるとるむりうつ

まりあねつ。

むり、ふりむねうりつりうりつ。

メイの死

賢く、野心的な娘とは

自由に生きているようで

ただ自由に生きることを望まれているだけの
完全に自由にはなりえない娘たちのこと。

賢く、野心的な娘とは

自らの優秀さの自覚ゆえに

世間を見下さずにはいられず

それゆえに

世間に自分のことを認めさせたいと思わずにはいられない、
不自由な娘たちのこと。

メイとはそんな娘。

生きたいように生きる姿を

いちいち説明しなければならぬことに

とてもとてもうんざりするし

かといって

こんな世間すら認めさせられないというのも

我慢なのである。

メイとはそんな娘。

自分が望むようには世間は自分を見てくれないこと、
そしてそれは大したことではないこと。

生まれてこの方しなければならぬ説明などあったことはなく、
誰とも分かりあうことなく自分のために生きられること。

そういう風に思えるようになるまでには、

この娘たちはまだ若すぎ、

また世間知らずでもあり、

そしてその高慢さと同じだけの

一種の気遣いを捨てきれないでいるがために、
自分であることを諦めようとしている、

優しい娘たち。

メイとはそんな娘。

メイはある日気付く、

自分の喜びの水面には

自分の幸せの水面には

いつの間にかケチがついて汚れていることに。
曇りのない感情をかつて映したそれは

絶え間ない漣にメイの正体を見つけることを困難にした。

メイは思った、

分別のあるあの大人たちというものは

こうしてケチが付いた喜びに

死ぬまで浮かんでいることにした子供のことなのだろうか。

ケチは計算高い

ケチは大人だ

ケチは経験がある

ケチは分別があり

ケチは後悔しないように生きる方法を

さも賢そうに告げる

そうしてメイはメイを疲れさせる

ケチな自分

怖がりの自分

打算的な自分

いつも完全には幸せになることを許せない自分

メイはそろそろ

自身の高慢さが葬ってきたものに気付いていたが

引き返すには随分長い道のりを歩いてきてしまったようだ

もはや誰もその手を引いていないが

自分で自分を不自由にすることがばかり得意になってしまった

メイとはそんな娘のこと。

熾火

火の落ちた暖炉の最下層

空気を吸ったその一瞬に燃え上がり、

またぶすぶすと、

酸欠のまま夜通し燻って、

やがて人知れず燃え尽きる、

あの熾火。

あの日燃え上がっていた炎は

今、冷たい灰の下で朝を迎えている

幾重にも幾重にも鍵をかけた鉄の箱の中

きちんと消されることもないままに

熾火は丁重に灰の下に埋められている。

気持ち酷使しすぎた結果

身体が心の持ち物になって

ずいぶん長いこと経つ。

そのように無垢だった心は

身体を自ら引き摺り回し始めたあげく、

そのまま道端で野垂れ死ぬことにした。

冷たく溝の匂いのするそこで

たまさかいい夢を微睡む夜には、

血痕のように消えない劣等感を真綿で締めるように刺激されな

がら、

同じ暖かな腕の中で殊更優しく宥められているような、

そんな相反する心地の中で口を閉ざし眠りに落ちるのだった。

さりとて。

その冷たい夜も預かり知らぬところで、

気持ちやら記憶やらを置き去りに、

身体は一瞬も止まることなく変わり続けていた。

休むことなく勤勉に、

代謝して、

変質して、

常に走り去ろうとしている。

骨ばった箇所到最后まで残るあどけない少年らしさも、

名残を惜しむ間も無く消え失せていく。

滑らかな肌に、

関節の細い肘に、

頼りない足首に、

これからまかりくる多様な変化の可能性を残した未熟な美しさ

は、

それと同じ儂さで、

あつという間に老いていく。

穏やかで断続的な壊死を意味して。

暖かく、

暖かく、

暖かくて懐かしいやり方で、

ようやくと心は身体を引き留めにやってきた。

まだ僅かな体温の残っている両腕で、

最後の力を振り絞る。

灰の下に巧妙に嚴重に仕舞われた、
熾火の蓋が、
開く。

なんて表情をしているのか。
それは、なんて表情をしている？

明朝には炭になる筈だったそれが、
いま一度息を吹き返す。

もつと、もつとと喘いで激しい呼吸を繰り返す。
熱くて、暖かくて心地良くて堪らないのに、
堪らないから。

燃え尽きないよう必死で、
空気を吸い込んでいる。
苦しい。苦しい。

脳髓が痺れて怠くて、
このまま眠ってしまいたいけれど、
眠りに落ちることのできない息苦しさで、
ぎりぎりのところで覚醒している。

苦しい、苦しい。
それでも、それなのに。

腕くことをやめられないのは。

生きることをやめられないのは。

苦しい。苦しい。

待っていたんだよ。

苦しい、苦しい、苦しい。

眠りに落ちることのないまま、待っていたんだよ。

朦朧とした私自身は知ることもないだろう。

どんなに罪深く、

痛々しく、

夕チの悪いやり方で、

寢覚の悪い熱を呼び起こしてしまったのか。

またその暖かさを失うその日に怯える苦しさをゆえに、
もう金輪際離してやれそうに無いというのに。

名もなく死ぬ私達に手向ける詩

エビデンスもリファレンスもない世界で。

孤独なドライバーのことを考える。

砂漠のど真ん中で子供を轢いてしまった。

ゴールが遠のいていく。

歓声が遠ざかっていく。

幻聴が鼓膜の奥で鳴り響く。

でもそれがなんだというのか、命を救うことに比べたら……

群青色に浮かぶ銀白の月に見張られた、そんな彼の心情を考えて、自分を鼓舞する。

幼い頃優しかった妹と疎遠になってしまった人のことを考える。

妹と連絡がつかないと両親から電話があつて、

億劫な気持ちを隠すこともなく

おびなりに応答するその胸の奥で

絞り切られるように壊死していく幼いその人。

明日も仕事があるのだ、そんな遠くまで行ってられるだろうか。

それが何だと言うのだ、優しいあの人を無くすことに比べたら

……

自分の心に凍えずにいられない彼女を思つて、自分を鼓舞する。

南半球の小さな島の断崖の上で、一人暮らす老婆のことを考える。

彼女には長く暮らした人がいたのだが、

些細な喧嘩から離れ離れになって数十年が経つ。

いつかあの顔をまた見たいと思うことも多々あれど、

その頃には片膝が曲がらず指も動かず、

毎朝毎晩窓から泥のような荒れた海を眺めるだけになっていた。

なぜこの馬鹿げた嵐の中を会いに来ないのか、

自分の求める声が聞こえなくなつて久しい

彼の人の石のような最期を思つて、自分を鼓舞する。

沈黙が溶け出したような暑い午後、

灌木の下を潜つて子育てをする猪の、

熱気と緊張に交互に頭をやられた荒い呼吸について考える。

自分も、また自分の子も、

乾燥ソーセージにはされないよう目をぎらつかせて
体を茹で上がらせる母親の
瞳の狂気は子供に映しとられて
灌木の化け物は永遠に生き続ける。

その生そのものの見苦しさと息苦しさを思って、
自分を鼓舞する。

北東の古い山をかつて跋扈した
木こりたちの冬の暮らしを思う。

二百キロある鉄と木でできた手製のソリを小山に押し上げ
たつぶり丸太を積んだあと、
命をかけて山の斜面を滑り落ちていく木こりたち。
前を支える壮年の男は

自らの両脚をブレーキに滑り降りていく。
綿雪の降る灰色の空の日は、太陽が月のようにぼやけて、
山の端を滑り降りる髭もじゃの木こりの影が
サンタクロースの起源だとかなんとかー

おとぎ話の一つもついに耳にしないまま、

ソリに轆かれて命を落としたその背の冷たさを思い、
自分を鼓舞する。

◆篠塚彩良(13) 大阪府

窓ガラス 光る雫につぶやいた どちらが幸か 流れゆくもの
(窓ガラスの雫には、流れるスピードの違いがある。流れ星の
ような雫や、まるで坂道を必死にブレーキをかけながら降り
る私のような雫。どちらも行き着く先は同じだ。ならばどち
らの方が幸せなのか。人間に例えることだってできる。いつ
かはみんな死んでしまう。ならば早く死んでしまうのと、長
生きして死ぬのとどちらが幸せだろうか。生きていれば苦
しいことも悲しいこともたくさんある。ただ明日が来てほし
くなくて、命を絶つてしまう人もいる。もちろん嬉しくて楽
しく幸せだと感じることもあるだろう。それでもどちらが幸
せだったかなんてわからない。答えなんてない。そのしみじ
みとした行く当てもない感情を雫に込めている。)

天地創造

竜巻のような鱗のようなそんな雲がまるで天井を造っているようにうだ

遙か遠くの広大な表面に囚われたスノーグロープ

渦が線を撒き散らし日と地が手を結びはじめた

夜明けだ天から風が呼び覚ます海の彫刻

刻むメツセージ貝殻拾い日にかざす少女

細く貫通した海が荒く美しく穏やかにぎゅっと天と地が手を結ぶ

揺れる鏡が映し出す色が接触して生み出す地平線

闇のすだれが包み込んでさざれ雨の蕾広がりゆく

溺れゆく日に見た照らしゆく瞳映したき天地創造

広がった銀河惑星美しく奥深く、一歩近づいてしまえば影を映

さず

何かに喰われそう花火のように光を中心に闇が広がりゆく、

罪の再生が移り変わる火鉢をスローモーションしたように、

冷々とコマが結晶となつて雲糸と住んでいる

黄色い線が入り組んだスニーカーをまわして

君がささやく風君の頬へ浮かび上がったアルファベット

まだ知らぬ文字の境目意味も間隔も形式も見えぬ景色

地に埋め込まれた文字を撫でるように

サインが光を放つように少し捻って歩いた刷り込まれたマスに色を流し形式がならんだ文道路価値のついた果実をひねる

香りをつけて羽ばたいた葉に見えぬ膜に押し寄せる物質

全てのものが相手を少しだけかじって領域を飾っている

触れては君の汁に溺れていく

君が展開した天海は着飾るわけでもなく

ただ色を成していた君が風を手遊びして指揮した無音の演奏

ふと優しい瞳を僕に写しては満面のタンポポが枠を超えて広が

っていく

その瞬間に見えぬ膜で覆われた青き雫がこぼれぬように消えた

蝶

忌み嫌われる生物の涙でありながら美しく人を魅了し

虜にさせるそれらが歩く鱗粉の風路は色を我がものにと成して

いた

三原色を膨張させ映すステンドガラス

黒く染まった枠が境を造り雫の世界を駆け抜け

少し引つかかかって土産にしてしまった現代を写す水晶玉

蜘蛛の糸のように絡まっては離れない睡蓮のかわいらしい

小人の家の戸を叩き、土産を渡してまわる

花と戯れているかのようにのらりくらりと

チラリと合間見える対価を見せびらかしては駆け引きをする

花の蜜を雫に食わせ滲む結晶泡のように

軽やかな粹覗き込む人間に目もくれず

ランウェイを歩いているかのよう

夏のむせかえるように暑い日蟬の声とぎらつく日の下

階段の隅にがむしゃらに引き抜いたように

粹が痛めつけられていた

ステンドグラスは今でも色を我が物に

どこかの世界への扉は絶つことなく

美しく刺すように彼らは私の指先に止まっては儚く

羽を広げ何が見えているのか私たちはまだ夢の中

忘れられぬ余韻のまま色に溺れている

◆室 十四彦（67） 静岡県

影

夕暮れは津波のように陽を傾けてきた

タテモノや扉は

現実の淵に立ち

垂直で在ろうとしていた

影は

両手両足をつつかい棒のようにして

踏ん張り

タテモノを

扉を

支えつづけた

時とともに

陽はさらに斜度を深めてきた

影は

車道へはみ出しながらも

己が傾きの意味に耐えた

クルマは警笛を鳴らし

車道中ほどまではみ出した影の踵を

たて続けに轆き去った

痛みが全身を駆け抜けて行った

影は

タテモノと扉の隙間に

沈みゆく夕陽を見つめた

無力とは何だろう

夕闇が影を覆っていた

意識が薄れゆくはざまに

影は

忽然と立ち尽くすタテモノと

堀の

その漆黒のシルエットへ

融け入るように瞳を閉じていった

坂

登りくる坂は

自らの険しさに幾たびか歩みを留め

坂の尽き果てるまでを

見届けようと念じた

くだる坂は

己をおき残してわれ先に駆け下る落石を

無表情のまま

見送った

互いは

すれ違いざま

目を交わし合った

こんには

登り来た坂を

男は

振り返った

そこには

人独りの姿もなかった

背負い込んだ荷の重さだけが

間際の記憶となって

ぬるま湯のように纏わりついていた

下りゆく坂を

女は

背を押す情けにアがない

踏み降ろす一歩へ

身をあずけた
澤風がいのちの枯れ木を
探して吹きあがってくる
通り越してゆくまでは
生身でいようか

朝

発芽の駅

七日目の早朝
一両の車両が
無人の駅舎で停車した
ドアが開かれると
多くの種たちがホームへ降り立った
辺りいちめんに土の匂いがたちこめる
改札口を出ると、皆
ひとシャワーを浴び
さっぱりとした面持ちで
駅を取り巻く耕作地帯へ
それぞれに

散って行つた

昼

その様子を
窓越に眺める種たちがいた
先ほどまでとは打って変わって
車内はサラサラと
乾ききったささやきだけが
発車を待つ
もの静かなつかの間を
埋めていた

午後

長い待ち時間を閉じるように
開け放たれたドアが
車輛後方から一つづつ
閉められていく
数もまばらな種たちを乗せ

車両はホームから滑り出ていった

後方はるかに駅舎が遠ざかる

無人の駅を乗り過ぎたことわりの

ひとつひとつを

種たちは

己の大地へ埋め戻していた

土へ葬るように

夜半

上下左右に

身震いを繰り返す車両は

種たちの浅い眠りを妨げ続け

沈殿してゆく彼らの意識を

攪拌し続けた

発芽せずに生きることへの

自己疑念のよどみは希釈されるのだろうか

土と枕を共にしたのちの

永遠にも似た沈黙を受け入れられただろうか

数々の問いが

車窓の暗がりへ

吹き抜ける夜風のように

吐き出されてゆく

この車両は暗く果てのないトンネルに入ったようだ

地中深く光の絶えた未来へ向かうのなら

希望はいらない

さずかりものの頑強な外皮に身を固め

光無しの長大な旅路へさすらおう

遙かな過去か未来か

発芽の駅を探しつづけて

◆未来の味齋(47) 京都府

さんざ、めく、光の胎動よ、

海、の耳、鳴り、ざわめいて、さんざ、さんざ、

光の波形、が揺れている、おおきな鯨がゆっ

くり泳いで、あおい波紋が広がってゆく、

*

(……)

水溶性の、電話がかかってくる、指先から、みずを弾いて、受話器がつかめな
い、鳴っている、鳴り続けている、身体
の芯に、響いてくる、くぐもる、呼び出し音、岸
辺の孤独が手招きしている、

独立した声が、海底から浮上して、つめ
たい空気を連れてきた、呼吸の回復で、あ
なためる、薄まってゆく声の深さ、魚の爪痕が、文
字を書く、みずとみずの振動が会話して
いるようだ、

細かいひかりの群れが押し寄せてくる、
波の影を透過して、影の心臓を突き刺す、ひ
かりが散らばって、明るい朝と暗い夜の容積
を分解してゆく、

泡、その軌跡を収集して、輪郭をなぞりなが

ら、上昇してゆく、水面下の世界で、繰り広
げられて、いのちの循環、食べて、食べら
れて、生命が観覧車のように廻ってゆく、

あおいおおきなてのひらが、ちいさなさかな
を呑みこんで、ひかりが弾けるから、リズムカ
ルに嘯みしめて、いのちが、エネルギーになっ
てゆく、

桃色に焼けた漁船たちが唸りを上げて、魚
の群れをさらってゆく、あかい光のつぼみが
卵を孕んでいる、咲き乱れるたましいの交感、
いのちを捕獲して、ひとびとの生命をつない
でゆく、

電話がまた、目覚まし時計みたいな一斉に
鳴る、細長い針が降りだす、さかなの外郭をか
すめながら、海に刺さる、時間を捕まえるに
ゆく、影のかたち、が生まれては、波の向こ
うに消える、

(……………)

*

耳、の海、鳴り、ざわめいて、さんざ、さんざ、
風の エ コーが 渦 巻く、太陽が 嘶いて、魚の
群れが 急速 に 移動する、チャ コールグレー の雲が
発達 して、耳の なかが、荒 れて いる、

片耳、を、塞いで、片耳、を、澄ます、耳の外、と、内で、

海、が、膨張しながら、収縮している、

(あかい、花、が、はらはら、と、泣く、ように、散って、沈ん
で、珊瑚、が、白化、して、ゆく、)

ことばをひらく

夕暮れに背中を押されながら
黄金の破片たちを握りしめた
飴玉を溶かして金魚を作ろう

時間がゆうら、ゆうら泳いで
家族も解けては固まり続ける
繰り返し繰り返し流れてゆく

靴箱に並んだ靴が口を揃えて
きゆう、きゆう、啼いている
全ては生き物だということを
わたしたちは忘却してしまう
忘れないで、というサイレン
季節の区切りに聴こえてくる

家族の容器としての靴たちも
みんな、みんな、叫んでいる
それは言葉にならないことば
飴玉の金魚をゆっくり溶かす
家族のしじまが波打っている
金色の髪と髪に舌を這わせる

会話する

全身の感覚を研いで会話する

耳を傾ける

全身の感覚を耳にして傾ける
豊かな沈黙に身を任せてゆく
うつくしい鱗粉が降り始めた

鱗粉に塗された自然の会話が
静かな空間でからりと揚がる
金魚の声の漣が訪問してくる
滑らかな流動体の油を縫って
動植物や静物の声が溢れ出す
人間だけの世界ではなかった

ひとびとは何度でも想起する
おかあさんのおかあさんのおかあさんを
海や山や宇宙のおおきなあおい乳房を
その恵みとして降る芳醇な spangll を
(sigh)

決してひとりではなかった

ひとりぼっちで膝を抱いていた夜も

地球のお母さんに包まれていた

ありがとう、Big blue mommy

蝉の声が鈴虫の羽音になり

鈴虫の羽音が降る雪になり

降る雪が開かれる桜になる

今日もまた飴玉の金魚を掬う

いつも波紋はささやいている

いつもことばは拓かれている

エンドロールを銃が切り裂く

(一)

燃えやすい皮膚という長襦袢を羽織って生まれてきた、光沢のある襷を集めて、何枚も繊細な着物を重ねて、帯を締めてゆく
ー(火気厳禁)ーそれなのに、ひとは明るく、あたたかい
火を手に入れてしまった、万能と狂気の炎のいろ、あおとあか、
ふかくながいよる照らしたり、美味しい料理をつくることができ
るようになった、パチパチ、火の粉が拍手する、炎はうつく
しく寧猛な獣のようだ、着物が音を立てて、崩れてゆく、萎れ
てゆく、ひとびとは木造の家を建設して、その室内の台所や居

間に火をくべた、同時に炎との闘いの歴史が始まった、響き渡る消防車のあかいサイレン、放たれた赤い龍はどんどん膨らんでいて、ひとが制御できない威力で、家を、ひとを焼き尽くす、なにもかも燃やし尽くす、黒い煙を上げながら、水柱を跳ね返す、やがて鎮火、龍が通過したあとには、全焼した黒い柱の残骸が遺される、

(くろい異臭のエンドロールが流れだして、)

(、)

『彼岸花を摘んで、家に飾ってはいけません、家に飾ったら、火事になるから』、おかあさんが子供の頃、よくそう言っていたけど、言いつけを守らずに、水を注いだ牛乳瓶に、真っ赤な彼岸花を飾っていた、家を出てから、実家が全焼した、転がった空の牛乳瓶、焦げた花の死骸、どこかで嗤っているかもしれない放火魔、ちいさな龍に魅入られたひとよ、楽園は地獄の入り口だ、もう戻れない、焦げた髪が縮れている、やがて髪は蛇になり、メデューサ、そいつに見つめられると、石になる、もう動けない、静寂の砦に閉じこめられてしまう、火打ち石でまた旦那を送り出さなければ、

(カチツカチツ、良くないことが起こりませんように)

(、、)

脱いでも、脱いでも、肌という布が仕切りとして居座る、いくつもの仕切りをこえて、玉結びや玉留めが乱立している、着物をほどいて、洗って、仕立て直す、いちど役目を終えた着物に、またあたらしい息を吹きこむ、何度でも生まれ変わるみたいに、死ぬまえにひとつの着物の道を生ききって、いのちを幾重にも燃やし尽くして、アダムとイヴですら乗りこえられなかった仕切りに触れる、わたし、とあなた、のあいだに横たわっている境界線を辿ってゆく、真夏にざわめく水面のように、一枚の肌もどかしい、石をひとつ投げて、表面が波立つ、波紋、水紋が広がってゆく、透明な炎が立ち昇る、可燃性のいのちが萌えて、萌えている、またべつつの双葉が蛹を突き破りながら、次世代の芽を出しているだろう、

(さあ、行こう、銃声。)

◆藤 秀一（23） 北海道

君に宛てた手紙

手紙とは何と毫碌した形式だろう、と考えたのはずっと後のことで、思い立ったときには、もう筆を走らせていた。俺は何を書くのか、自分でもわからないまま椅子に座ってあれこれ思索し出した。確かなのは、君に対して湧き上がった、或る感情の非常な興奮であった。何事につけてももっと思慮深くなるべきだ、と思っではいるのだが、君の知つての通り、俺はいつものようなのだ。まず先立って衝動があった。独特な感興、俺特有の精神の傾向に身を任せてきた。他人の目から見ると、こうした方法は奇怪なことであるらしい。「君は我が儘だ」ということを随分言われた。俺も、他人の目で俺を見ると、そういう感想を持つのだろうか。分からない。誰も他人の目で自分を見ることは出来ない。

「十年一昔」という古風な謂がある。もう十年が経つ。君と別れてから、それだけの歳月が流れた。君とは色々な忘れがたい思い出がある。だがどうも最後に話した言葉とか、そのときの君の様子とかを俺は覚えていない。君もそうだろうと思う。恐らく俺達は最後に会ったとき、これが最後の機会になるだろうとは互いに思つてなかつたに違いない。だがその後の俺の十

年の経験によると、別れとは、こういうものが常であるらしい。

十年前の君に宛てて。ボードレールの詩の一節に「眠りたい、生きてゐるより、眠りたい」という一節があるが、この言葉ほど当時の俺達の憂鬱な雰囲気を言い当てたものはなかつた。暗鬱な精神への、心地よい速度での傾斜！だが俺達にはそうして良き事しかできなかった。俺たちは世間を忌避し、空想の中にのみ生きていた。いつたい少年という時代は、何と大きな夢を見がちなことだろう、そして、何と傷付きやすいことだろう。大人とは、傷付かない程度の夢を持つた少年なのかもしれないのだ。「死は美しい女の横顔のようであつた」と俺は当時の日記に書いたことがある。死はすぐ隣にいた、生よりもよほど近くにあつた。君もそうではなかつたか。

十年前のある秋の日、道端に降り積もつた枯れ葉が、木漏れ日に照らされて黄金のように輝いていた時分、君は自殺した。俺は人からその知らせを聞いて呆然としたが、とにかく言われるままに、通夜と葬式に出た。君は遺書やそれらしいものを残さなかつたから、皆が探偵気取りで色々な事を言つた。口数だけは多い世間の事だ。君の死因は人の口数程あることになつた。

成程類推してみることはできる。分かったような口をきくことはできる。だが俺には分からない。未だ尚分からぬ。本当に自殺をした人が、何を以てして繩に首を括ったのか。君の自殺の最終的な理由は何か。君の自殺の意思が最終的に確定したのは、いつのことか。当日の朝起きたときか、朝食の味噌汁を飲んだときか、それとも当日から一ヶ月前か。そして、どうして、君と同じような考えを持ちながら、俺は自殺をしなかったのか。俺には君の自殺の理由が分からないから、代わりに、今日まで誰にも言わなかった君の死の印象を記しておく。あのとき、君が死んで、最大にして最良の友を失って、悲しかった。これは本当だ。しかし心の底のどこかでは、俺は君が死んで嬉しかった。嬉しかったという言葉が不味ければ、俺は納得したのだ。花がその美しさを保ったまま、刈られていくのは、良いことかもしれないのだ、生き永らえて醜い姿で枯れていくよりは。か。

今や俺も月並みな二十五歳になった。最近、つくづく自分の凡庸さが腹に入ってきた。かつて持っていた筈の、誇りにさえ思っていた筈の、傷付きやすいだけの感性はこの十年で雨風に曝され干からびてしまったようにも思える。

以前俺を楽しませたものの感動させたものを最近見返してみてもはや何も感じなくなつたことには随分驚いた。俺は以前のように感動することができない。本当に僅かな一部のものたちだけなのだ、俺の心が動揺し、息を吐くのも躊躇うほどの美を有しているのは。

芸術は精神の繊細な部分に触れることができる形式のうちの一つだが、なかでも俺は文学が好きだった。あの懐かしい時代、古く美しい追憶の中の時代、自分の言葉の全てが詩や小説に由来していた時代のことを俺は考える。行き詰まった生活の苦しみや、人生のある目標に対する燃え上がるような情熱や、愛する人との別離の悲しみなど、誰もが詩人の感情を持っている。だが誰もが詩の言葉を持っている訳ではない。そこに詩人の誕生の余地がある。そこに文学の秘密がある。俺はいつもこの部分に感動してきたのだった。

だがあるときから、俺はもう読んでいるばかりに我慢ができなくなつてきた。言葉を体内に貯め込むばかりでは満足ができなくなつてきた。散文的な言葉の夢想が脳裡に立ち現われては消え、それが習慣的に繰り返されるうち、俺はいつしか自分を詩人と錯覚するに至つた。馬鹿げた事だ、と思う。詩を書かないうちから自分を詩人であるなどと考えることは。だがこの馬

鹿げた誇大な直観を、行動によって現実に結びつけるところに、人生の一つの真理があると思つている。俺はこれから、詩を書くように思う。

「詩とは経験である」と言つたりルケは実に正しかった。俺は自分自身の過去に、幼年時代に、経験の裡に、汲んでも汲みきれないほどの豊かな感情の源泉があるのを感じる。言葉を以てして、俺は何とかこの感動を語りたいたいものだと思う。だが書けば書くほど、正確性を突き詰めようとすればするほど、この感動を言葉にすることができない。おおよそすべての詩人はこうであるに違いない。詩人がある特殊な経験や感情について語ろうとすればするほど、彼は何も書くことはできない。主題がむしろ遠ざかっていく気さえする。詩人の仕事とは、畢竟、語り得ぬ対象を何とか語ろうとする矛盾の努力であつた。だが言葉を変えて言うが、やはり俺はこの大きな仕事に取りかかる氣でいる。

ここまで書いて、ようやく俺は仕事を終えた人が感じるような、疲労と心地良い満足を覚えた。内容に一貫性の無いことは多めに見てもらいたい。これが情熱任せの仕事であつた事は既に書いたのだから。

俺はここで筆を置くこととする。ところで、手紙を書いて

るうちに、忘れていた出来事や思い出や、君に関する記憶が鮮明に蘇つてきたことは思いもよらぬ嬉しい事であつた。というのも俺はこれを書く前、君の声も忘れてしまつていたから。では、さようなら。今度帰省の折には、初めて君の墓参りでもしようと思う。

◆徳丸魁人（26） 愛知県

疾風

若者にとつて

旅先での出会いはいつても

今生の別れである

遠くオランダから来た若い男女は

音楽家であるらしい

にぎわう居酒屋の片隅で

ぼくたちは古い友人のように

グラスをかち合う

（もう、会うことはないだろうけど

このひとときを楽しもう)

そんな口上を言えるほど

明け透けなしつらえではないぼくの

なまくらの快活さを

舌の中に探している

時の流れの速さよ

空になったグラスから

ひっそりと

その時は差し迫る

くしゃくしゃの紙幣を出し合い ひんやりとした

夜風が頬を撫でてゆく

二人の黒い背中が 人混みに消えた途端

ぎゅんと

なにもかもが過去へ向かって吹き抜ける

さつき はもう記憶になり

琥珀色の時間は

夜の闇に零れていった

(そろそろ、帰ろう)

最終列車のけたたましい うなりに紛れてすでに
煤けた暮らしが

しめやかに鳴り始めている

世界公園

滑り台で生まれてきた子どもたちは

約束されていた芝生を見ることはない

「遊ぶ」という観念が消失しつつある公園には

筋力トレーニングの器具と

健康マッサージの器具が立ち並び

でつぶりと腹を出した老年たちが

準備体操の途上でたましいを脱がされる

砂場では痩せこけた少年たちが

それぞれの手のフォルムに湾曲した物差しで

伸び縮みする陰莖の長さを競い合い

虚栄の声帯をげらげら震わせる

木陰ではプラスチックが燃やされていて

弾頭が刺さったままの水飲み場は

捻れた噴水となつてしぶき

蒼天に ひかり輝く天使たちを撃墜する

あつ と声を出せば

ぐわんぐわんうねる成層圏の飛行機を

頭上のトンボが追い越すところ

思念も時を追い越すから

「時間」は

ひとりずつに宿る粘菌のようなものだ

濡れてうずくまる天使たちの翼は滲んで黒い

一方で、一閃にゆくギンヤンマの透明な羽には

生命を紐解く黒い設計図が

基板の電子回路のようにくつきりと描かれている

俺は、それを追わない

「人間」は、乾上がろうとしている水溜の中

らんらんと夜更けの色に目を輝かせ、覗き込む稚児が俺だ

生きている者が船頭であるとき

祖霊たちは夜を照らす灯台ではない

波濤から、梟の目のようにぎらりぎらりとこちらを覗く

無窮の監視者なのだ

降り注ぐ不条理の蹄に踏み抜かれて

消魂の渦で血みどろの暮らしをしようと

ヒトだけは、「人間」を手放してはいけない

遡及と展望の打ち寄せるあらゆる波に耐えて

四十六億歳の世界はまだうら若い

いずれ俺たちの涙で、ここから海をつくる

日没

うたた寝を始めた空から

ぼくの膝の上だけに

ぼつり ぼつり

雨粒が落ちてくる

顔を上げると

夕暮れの商店街

みんなが帰ったあとの

やさしい静寂

ぼつり

広場の噴水に腰掛ける ぼくは
なにかとんでもない間違いをってしまったらしい
(いったい何を間違えたのだろうか?)

うつくしいものはすべて

まぼろしだった

ぼくに死を説く父のおだやかな声も

すっ転んだぼくに吹きだす母の若い声も

抱きしめた恋人のつむじの香りも

遠く

夕焼けチャイムの空へと消えていく

繋がりのすべてが洗い流され

たったひとり

ぼくは途方に暮れている

大事な決断をするとき

人は必ずひとりになる

それは 受胎されるずっと前

閉じた貝のように

それぞれの世界だったからだ

「明日があるさ」と

歌っていた若者たちは

疲れて先に帰ってしまったて

ぼくはひとり

無言の夜を迎える

未明

万物は方舟である。明け方の、空を切る時鳥は雛にエサを運び、
風は種子を運び、背を伸ばす植物の緑が、都市の息苦しさを僅
かに和らげる。

深夜の街を歩きまわって、僕が運んだものはなんだろうか？

路上で抱き合う若者たちがこぼす、琥珀色の酒が靴にかかる。

街頭の消えた広場で未来人が歌う「You don't know me」。鞆を枕

にしたサラリーマンが燻らす煙草の煙が目染みる。

夜のせいで見えないわけではない。だれに何を運んでいるのか、
いつもわからない。

始発列車が来て、使い古した暮らしがサイレンのように迫ってくる。帰るべきところに帰ること、了解していないのに渡された。世界は僕のものではない、僕は世界のものではない。信じるもの、信じるもの、信じるものは、瞬間だけ。たとえば、朝日が空を破る一瞬の光芒。たとえば、コカ・コーラの栓を開ける一瞬の充足。いつだって、所有できるものには価値がない。列車はトンネルを抜けて、僕の肉体は、たしかに父母の血を運んでゆく。

帰り花

凍える都会の声を抜けて
いつしか暗い路地のなか

正しさという観念

ずいぶん前からシャッター街

ふり返って風に聞くやさしい歌もあれば
鈴を振り糧乞う僧、野放す

冬の街

目覚めない朝を迎えるとき
ぼくはひとりだろう

つめの中まで洗われて

黒い行進の見定めに、遭う。

葬式は、

それまで風かもしれないものたちを

いにしえの秤に乗せる

ひとまずは、人間だったということにして。

冬の街、ついに、

行き渡らなかつた太陽が沈む

蛇のはらわたのような帰路で、

ほそく、ほそく、捻れ

どんな黴びた墓碑へ帰るといふのか

ふいに、凧を搔きあためて、自転車。

過ぎ去るものの中にある、ちいさく、たしかな形見は

こんな斜陽の中でこそ、しとやかに咲くのだ。

なんども、

同じ日に帰ってゆく

夕焼けの帰り道

握りしめたあなたの

脈拍に沿うように

からだごと馴染んでゆく

この鼓動から、ぼくは生まれた。

それが、だんだん、うれしい。

死ぬことは

ひとりではできない

それでも

あなたは手繰っていてくれる

熱した油へ飛びこんだ

弾けるぼくのゆくすえを

ありがとうの代わりに、靴を磨く。

毎日、たたかいだ。

ふるさとを探しに

稲穂は揺れる

風を金色に染めて

作物は満ち足りていたが

ぼくたちは空腹だった

この町では

それを満たせないことを知っていた

青鷺は帰る

山脈を草むらのように飛び越えて

その先の街が見たくて

ぼくたちは学校を抜け出した

けれど幼い足では

岩の背さえ登れないことを知っていた

どうしてかな

ぼくの生まれた町は

ぼくの故郷ではなかった

だから いかなきゃなんない

山脈を超えた地平で待っている

ふるさとを探しに

泣きやしないんだよ

ただ吹きわたる風のなかに

泥と稲の香りをちよっぴり嗅ぐだけさ

ジェットエンジンが星のささやきを遮る

機窓から夜を見下ろすと

うっすらと藍の水田が凪いでいる

(いつてらっしゃい)

ふるさとにできなかった大地が

まっさらな胸を差し出していて

ぼくはそこに飛び込まない

◆サカイ遠雷 (35) 東京都

ユニヴァース、わたしたただ怖いだけ

ついに、肉体と言葉を、捨てたのね

然様ならば、菊の花

人間として往ぬというのは
それでしかないのだと

然様ならば、菊の花

顕在意識が

小賢しく出しゃばる地球から

潜在意識だけで

空も飛べちやうようなトコに

戻ったのかな、

なんて

なんかヤバイ奴だと思われそう

でも、でもさ

わざわざ生まれ

わざわざ死ぬまで生きる

大変すぎて たまに嬉しくって

なんか、ヤバイ話じゃない？

そんなこと

思ったら

然様ならば、菊の花

けつきよくわたしは

ロゴスやらエゴやらに吹き上げられ

それでも そんなことが好きな

そういう、いきもの。

時たま

振り回されすぎれば

心を置き去りに

然すれば

肉体が文句を言って

熱が出たり胃を痛めたり、
するのよ

はは、「なんかスピリチュアル」？

いやあ、人間なんてみんなスピリチュアルですよ

魂って言葉、日本人みんな好きじゃないですか

舶来アレルギーなの？

違うか、はは。

わたしもよう分からん

あー

よう分からん宇宙の中の

よう分からん地球ってトコを選んで

どうせ死ぬのに

わざわざ生き始める

そんなモノ好きなわたしたちは

やっぱりどうせ死んで、どうせ生きる。

また、死んだら会おうね。

光のテレパシーで共鳴しながら笑おう。

あ、でも

ああ、待って

待ってよ

またエゴに吹き上げられてしまいそう

だって

本当は

とっても怖い

たとえばわたし

道端のネズミが

ゴミのように転がっているのは嫌なの

肉体が揺れるよ

実家の猫の足が動かなくなっただって？絶望
受け入れがたいよ

ああ 家族が風邪をひくことにすら
怯え震えるんだ

だから

然様ならば、菊の花

本当はそんなの、永遠に見せないでいて

だから

実はわたしが誰より先に

さようなら、したいのかもしれないな

大概、

わたしも君も、優しくないよね

ね、地球。

炊飯器と米と梅干

炊飯器の外側 汚れが気になって

油落としシユシユツと吹いては拭いていく

ああ そういえばこれは

わたしが一人暮らしを始めた頃

「ご飯が美味しく炊けない」と愚痴ったら
わざわざ春日部から送ってくれたんだっけ

キユキユキユ

ごめんね、ばあちゃん

あの時

本当は言わなくてよかったんじゃないかって
今も後悔してる

ごめんね、ばあちゃん

「孝行」って言葉を

間違っって覚えてしまっていたみたい

色だけ見ると 鮮やかに美しくて

いざ齧れば 毒にしかならない青梅を

嬉々として 食べさせてしまった

キユキユ、キ、ユ

あの頃のわたしは

虚しくて泣いた帰り道

それでも

「ああ、きつと喜んでくれる、伝えなきゃ。」

その命の寿命を知りながら

今となっては、ばあちゃんの寿命まで知っていたかのようだね

キユ、キユ、キユ

「お前もできちゃった系かい」と笑われても

嬉しかった

お茶請けに出してくれた梅干し

その瞬間だけわたしは

適齢期に行き遅れず

健康に子を持てる

孫になれたんだ

こんな私もちゃんと家庭を持つことができそうだよ、って。だから安心してね、って。

はなから壊す予定の予定を

ひたすら笑って伝えたかった

そしたらばあちゃん 死んじゃった

ある朝突然

ひとりの和室でご飯を食べた後

ボタンと倒れて二度と起きなかった

それが結末を見ずに去る優しさならば

私はただの残酷な馬鹿

ごめん、ごめんね、ばあちゃん。

嘘だと気付かせてしまってから
死なせてしまつて

ごめん、ごめんよ、ばあちゃん。

私はホントは真っ赤な梅干しになり損ねたんだって、
ばあちゃんが毎年漬けてた美味しい壺の中に
私は入れないんだって、

青いから青い奴に青いままはじかれて

また一匹道端に転がるだけなんだって

キ、ユ、キユ、キユ、

あのね、ばあちゃん。

ただ会わせたかっただけなのかもしれない

ばあちゃんに、あの子を、じゃなく

あの子を、ばあちゃんに

「ほら、わたしの大好きなばあちゃんだよ。」

どうせはじき潰してしまうというのに

ごめん、本当に、愚かな孫で、ごめん。

あれから5年が経ったね

今日までご飯を食べて生きてきたよ

キユキユキユ

そして今日も

この炊飯器で炊いたご飯をちゃんと食べるよ

明日も食べる。

明後日も。

食べる、食べるからね、ばあちゃん。

煮ごごり

腰越の

大して綺麗でもない浜辺に腰掛け

喉が渴いていたのか 海を口に含む

私は今

グラデーシヨンの

何段目にいるのだろう

くるぶしまでしか来ない波に

肩まで浸かろうとして

変な格好をしている

胸に波打ち／目から溢れ出たよ／透明感

でも、でも

ソーダ水とか なんか そんな綺麗なものじゃないの

なんかそんな 令和のアングラ文化フリークな

若者が好むレトロなラムネ みたいな

フोटोजェニツクな水 じゃないんだ ーバカやろ

「なんだか同じ江ノ電沿いの浜辺でもさ、

腰越で降りると大した眺めじゃないんだよね。

さつきも言ったけどさ、はなから魅せようとしてないっていうかさ！」

でも、そんな風が良かった、私も。

眉毛だつてボサボサで

日焼け止めだつて塗らないで

波のように／寄せては返す／徒労感の中

クラゲに馬鹿にされたことを、覚えている。

でも私は彼の方が馬鹿だと思っていたし

彼も自分の方が馬鹿だと思ひ込んでいたろ

私たちのその網よりユルい防衛線 キツかった

ーそんなに足蹴にされて 生きてきたの？

カーキのチノパン 生成りのシャツ

寝癖を装う無造作ヘア アリミノワックス

きつとホントは

ただそこに泳いでいるだけで
最高だった

どれもこれも、 彼も、 私も。

ただ、そこに在るだけで。

∴。

そう、今ならそれもよく分かっている。でも。

煮ごりみたいに／死んだクラゲを／見つめれば

コトバの膜を張った目ん玉が

泳いで たまに跳ね返って 困ってしまった
けつきよく

薬を飲もうかな なんて仕草を

してしまう

のかもしれないな

天使の奏でる雨音について

昼寝をして

ひどく怖い夢を見た天使は

玄関に向かい

まだちゃんと下界と繋がっているかと

軽いドアを開けた

崖から見える海は

まだ陽の射す明るいコバルトブルー

足元には

5分後にこの曲を弾きなさいと

ギターとコード譜がばらまかれている

崖下では紫色のアメフラシがスタンパっている

ああ 今日はおの子が、あの子が

好きな男と初めての“でえと”ってやつを楽しみにして

新しく、羽衣のようなやわい布でできたワンピースを着て

“かふえ”とやらに出かけて行ったんだよ

でも大天使には逆らえない、ごめんね

天使がナイロンギターを鳴らすたびにポロ、ポロ、と

雨粒が落ちる

心配そうに前のめりに下界を見つめる

その先ではひとりの男がエレクトリックギターを背負って

羽衣纏ったあの子を“かふえ”の入り口で待っていた

男は手元の“すまほ”で

新譜の歌詞を書いていた

『その灯りを消してくれよ、疎ましい、俺には眩しすぎるよ』

ポロ…ポロ、ポロ…

天使はその夜 光の善悪について人間らに問おうと

渋谷のスクランブル交差点に降り立ったが

途中、数人の手首の切り傷のようなものを治そうとして

悉くこっぴどく軽蔑されて

なんだか、ぜんぶめんどくさくなって

ナイロンギターの弦を引きちぎったあと、崖から身を投げた

◆朝詩久楽（19） 神奈川県

沿面放電

若し貴方の眼前にAとB

二つの選択肢があるとして

若し前者と後者

好きな方を選んで良いとして

貴方は辛きから逃げたいか

困難ではなく容易な方へと行きたいか

若しそうならば

貴方は正しく神鳴だ

大海へと落ちし神鳴は

海の中へと流れることなく

大海の潮よりも抵抗の値の少ない海の面を

沿う様にして流れ行く

流れ辛き海中から逃げ

容易に流れることの出来る海面へと好み行く

実に貴方とそっくりだ

四色定理

広大な惑星

地球の極めて小さな一点で

あの人は情熱的な赤

此の人は冷静な青

其の人は交友的な黄

私は優々とした緑

皆違い

皆良い

此の四色の内

どれにも当てはまらない

透明無色の人は決して居ない

皆何かしらの色を内に

持っている

気付いていないだけで

持っている

一人々々が違う色に見えるかもしれないが

元は違う

一人々々を塗り分けるには

四色あれば十分なのだ

ペルチェ効果

熱意に溢れた者

冷静に考える者

此の二種類の人間から

あらゆるものは作り出される

一方は加熱し

一方は冷却する

此の二点の温度の差から

電気は作り出される

何かを作り出すにあたって

ペルチェ効果程心の内に留めておくべき

掟は無い

質量保存の法則

己の夢を叶えるには

一定以上の血の滲む努力が

必要であり

不可欠なのだ

怠惰な者の元に

決して夢は訪れてはくれない

虚空から

金銭が湧き出ぬ様に

無からは何も

生まれないのでから

感動と化学反応

感動と化学反応

美しきものにして

哀しきものなり

花火の様に

パツと未知が花咲き

夜空（既知）の闇に

スツと消えて行く

長期はあっても

永遠はない

顕微鏡

何かを知りたければ

其れに就いてよく調べ

細部迄覗き込んで見てごらん

其れでも上手く見えなければ

解像度を上げてもう一度

細部迄覗き込んで見てごらん

そうすればきつと

思いも寄らぬ誠が

貴方の元へと訪れて来てくれる筈だ

◆藤千馬 (21) Singapore

鴉雀無声

ぴーひよろろ——

静かに私を蓮の花に横た

軽やかな波の揺れに身を委ね

どうぞ私に従わないでください

ぴーひよろろ——

蓮の下、ばんしょう万象は土へと隠れる

私は泥に沈みゆく

どうか私に従わないでください

向日葵の種が蓮の葉に散り落ち
発芽しく、無理

からす烏鴉の餌食となり

群れを成す烏鴉が蓮の房に座り、笑い騒ぐ

ぴーひよろろ——

夕陽が西に沈むと

まーじやん麻雀独り微笑みを残し。

請君、救勿かかれ

請君、私を救わないで下さい、

寂寥の夜に涙が堕ちる如く、

涙が集まって鏡、悲愴の果映し出し。

請君、私を救わないで下さい、

絶え間なき哀しみを謳歌するように、

血が指の間から滲み出て、ピエタの情を綴りつつ。

請君、私を救わないで下さい、
——我を埋めんとする鏝の如く、
この足元六尺以下、殤葬の地に埋まり。

請君、私を救わないで下さい、
命にかかわる薪の如く、
尽くして燃え続け、
残り我身、我心、我息奪い。

請君、私を救わないで下さい、
満開した茶靡が静かに散ってほこりに変わる、
屍香りは腐臭の悲愁へ変わり。

ああ、お願いだ、我を救わぬでおくれ
独りで十分、共に歩むことは贅沢である。

ばたばた

砂砂ノ礫稻

月明かりと一緒に連れて行って

海はまるで酒皿のよう、空の川を照らしている。
まるでこの皓々たる月が、海の腹に住むようだ。

魚の腹は白い、海は眠って
朝の波は澄み渡っていて
涙のように、真珠のように輝いて
鴻毛のような、軽やかな悸動を残して。

そよ風がさらさらと吹き抜け
指の間陽に透きまし
手のひらに残った。

惜しい別れ、
澄み渡る月光、海に別れの吻を吹きかける。

良い夢は目を醒ませにくい。

私はまるで黄金の稲田を駆けるような気がして、
稲の穂が私の両足を刺し
血はただ、熟した果実のように、落ちる

ブラシ、ブラシ、ブラシ。

何も残さずに、

道に迷った月の光だけが足元に、落ちる。

いつか、いつか、

私たちはただ浮沫になっただけなのか？

静寂に還り、塵と消えゆく時、

ひっそりと生まれ変わり、彼方へ。

——雨粒は先か、麦粒は先か？

私はその豊かな残光を拾い上げ、

腹の中に飲み込んで、

まるで海がその皎々たる月を呑み込んだかのようだ。

接岸の船がうろうろしている、

接岸したの船夫が招待を差し出す

私は首を横に振る

稲穂をこぼす

今度は、船夫が首を横に振る。

船は岸を離れ、ただ沫を連れ去り、

浮生沫は絶えず生まれ変わり続け、

すべては儚い沫、

潮が

ほこりが静まる。

ばたばた、ばた

空に昇って空に浮かぶ幻生して。

◆梶本堂夏（31） 沖繩県

蒸留所

書き上げられた詩は缶の中に放られた

クリーム色の下地に

灯台の絵のはいった

オランダで見つけられた缶

この部屋ではその缶は〈蒸留所〉と呼ばれている

なにしろ

その竹まいは海のそばにある
アイラ島の蒸留所そっくりなのだ

詩は熟成させなければならぬ――

書き上げられた詩は

入国審査官がもっているような

日付のスタンプを押され

(08 DEC 2018 というふうな)

小ぶりなノートから切り離される

一定期間の熟成が終われば

香りを出す詩があり

香りを出さない詩がある

香りを出す詩にも雑味はあり

庭師がお気に入りの果樹を

剪定するように

雑味を取り除き、

必要な場所へ
宛てられる

白い一輪挿し

できるだけ、色気のある煙を

たてたい

そうおもう――

タバコの前からは

一輪挿しのような煙がでている

白くゆらぐ茎

ひろがった花弁は

うすらぐ自我のごとく

窒素の影へ溶ける

右手にはさまるタバコは

そうやって一輪の花を

吐き出し続ける

ぼくは

一輪挿しのうしろを

吸いこみ

口にふくむ

それから

客人を見送るように

慎重に唇をひろげた

すると――

濃い煙、それが

なめらかな舞踏となって

中空でとまどい、

佇み、

ざわめき、

舞台演劇の間をひとつだけとり、

視認性のない空漠のなかへ羽ばたいた

港の上にあるホテル

八月との和解を

思わせる日差し

客室には

ベッドが二つ

ランプが五つ

ドアノブが七つ

ヒヨドリのさえずりを

沁みこませた微風に

湾のなかみはかすかに撓んだ

黒く内出血した大理石の床、

靴の響きを高く弾ませ

艶めいた歩調らが廊下を通る

ロビーでは男が組曲を奏でていて

しなやかに曲がる

チェロのトルソは

ここに休耕地を生む神殿のよう

喫茶室の給仕は

手紙を宛てるまなざしで

サイフォンをカップへと傾けた

中庭の椅子に腰掛け
調度品のふりをしていれば
午後は勝手に通り過ぎてゆくから――

大きな雲が中庭に蓋をして
まっ白になった思念に
翳が あたると
重い眸に詩の潜像がよぎって

なにかの切れ端に
それを素描して

ソナチネと湿原

心室には湿原があるのを知った日に
滑舌のない賢者はバケツいっぱい形容詞を
ドブへ捨てた
拍手喝采のエビ群

わたしは受話器のようなドーナツに向かって
「夜が一冊の本だしたら

余白は

多ければ多いほどいい」

ひと昔まえの記憶は

日暮れに、哀れな者たちを

苛むのがすぎで

けれども

彼は静寂主義者だから

視線が織りなす網に定義づけられるのを

きらう

冬の夕暮れは淡く未熟で

疲弊した自意識は

星を筆つて 月を模しはじめる

苦勞した詩を漣すと

ポウルには何も垂れなかつたから

きばらしにゆつくりとした

ソナチネを

楽譜から解放する

すると音は飛んでいつて、

(飛ぶ音は忘我していて美しい)

湿原を訪ねる女たちは

気に入った形容詞だけを拾うと
受話器も取らずに去っていった

you were there

◆吉田華奈 Vancouver, Canada

五歳という魔法

宝石なのと言って 包んだ両手を見せた
結んだ花弁を開くように 白く小さく柔いゆびが開いて
はにかむように赤い ヘビイチゴの実

連れて行って

とつぷりと陽が落ちて テールランプ光る街
私を乗せてゆくバスは あの世とこの世のあいだを走る

遠い

悠久とは
私とあなたの間の距離のこと
人影の向こうに揺れて
あ、笑った

ミュージアムにたたずむ
木彫りのそれにそっと手を添える
古代のご先祖様と手のひらを合わせて
私はそうやって時空を旅する

兄弟へ

抱えようとすれば 抱きつきもできない
おおきな大きな大地に
生まれ落ちて 立ち 歩き
二本の足で
砂漠を踏み
雨林を踏み
雪原を踏み
さよならも言わずに
散って
我ら皆アフリカの子供

革命児

茜色のまちを行く

電車の中は灰色でした
あなたが来るまでは

車両にとどろかすような音で

扉を開けたあなたは

灰色の私たちには目をくれずに

一本の通路をはしってゆきました

あなたが私の前を行くとき

桃色のほおの産毛に汗が伝っていた

夕日を受けて陽のドロップのように輝いていた

それを通った光がシャッターのように

私の網膜に焼き付いてなぜか私は

一面のさざめく草原を行く大河を思いました

光がさして

皆顔を上げて

車窓が初めて茜色を透過した

そんなふう

私たちに爆風を与えたことも知らずに
運転席に張り付く

小さな爆弾

小さな命

◆佐藤良紀（37） 東京都

夢魔と少女

意味の在る少女に意志は無く
宇宙から降りそそぐ放射線が
彼女の中心に吸い込まれると
実体は清純な食欲に結晶する
ブリズム化した少女の触手は
時空を超えて夢魔を捕捉する
裂けて砕けて捻転する魔物の
破れた腸から吐瀉される悪夢
少女は無表情で皮を剥ぎ取り
犬のように夢魔の肉を喰らう
滴り落ちる苦痛は砂に染みて

あの城を支える石の柱になる
少女は規則的に夢魔を憐れむ

病室

そこは

昨日が産まれ

明日が殺され

透明な抜け殻が

復活を果たした場所

XとYが再会した場所

光の鯨が泳ぐ

柔らかな硝子の草原

夢魔が見つめる

黄金の柿の木の下

愛が支える揺籃の中

正夢の血から

遠心分離した

幻想の血清と

永遠より前に

完成していた

無限の砂時計

そこは

君の眠る病室

多分僕は死んだのだろう

歩欲

いつもの景色が

同心円状に拡がっている

ちかくのものも

とおくのものも

等しい距離にあり

あたたかいものも

つめたいものも

等しい熱を持っていて

かたいものも
やわらかいものも
等しい抵抗を示し

くらいものも
かがやくものも
等しい輪郭を見せている

無数の大小の光球が
視線の斜め上を飛び回っている

草原に風が波打ち
山嶺は雪を集め
見知らぬ人々も
不規則に明滅している

質量を失っても
重力は覚えていて

股から伸びる二本の脚と
鳩尾から伸びる脚
三本の脚で
真っ直ぐ歩いている

それなら僕は死んだのだろう
無性に歩きたい
どこまでも
歩きつづけたい

法廷

幹線沿いに吊された安物スーツを着て
ありふれた冴えない中年が一人
ゴム底人工皮革の靴音は気怠げに
薄暗いがらんだの古代宮殿に響く
退屈は僕を奥に導く
回廊より果てしなく永く廊下は続く
まるで無数の扉が並んでいるのに
それら扉の先には

世界の欠片さえ無いということ
僕を当然に知っている

中庭を流れる墨の川には

見えない橋が架かっていることも

僕は当然に知っている

脱いだ服を老夫婦に預けると

僕の現世は単細胞の集合になった

鉄の棘棘に残されたのは

償却を終えた細胞たちの墓だ

真紅の階段を数日間下り続けると

人工星宿海の法廷に

裸が導かれていた

真珠色のローブは僕の弁護士で

濡羽色は僕を裁く十人の王らしい

ガベルの乾いた音……

この先の記憶は無い

僕は既にスーツを着てしまった

生命活動の前景として

或夜

無聞岳の夜はどこまでも深く

星の瞬きさえ楽しげに見える

満月の下樹々の影は青く染まり

蓋を開けたスキットルに

月光が染み込んでゆく

世界を現象する意志があり

あの日化けの皮を剥がされる前から

とうに脳は捨てていた

今や溶けかけの肉

世界が結合を解除するまでの

猶予期間に過ぎない

死んだり殺されたりできるほど

最早具体的ではないのだ

ならば待つしかない

この現象の定義が完成し
虚空に収蔵された後
次の開拓者が現れるまで
ただ待つしかない

無限の拡張を嗜好する

今宵も峠は孤狼に出会い

煩悶する幸福の昇華を見届ける

樹々を燦らす北風は空気より透明で

抽出された名前たちは

月の香りに酔い痴れるだろう

純粹な観測者がいる

◆西園寺リル（48） 徳島県

乱痴気アンナの生死の歌

黴臭い ノイズ

轟音は 淫売の唯一神

俺がウオトカに誘爆させるポエトリー

人生は欠落した断片の欠陥直列四気筒に過ぎない

むしろ沈んでやる

枯渴を満たしてやるさ

この廢墟の沈静レボトミンで

雨を名づける

神の名を消す

世界の濫造が この抑鬱の証明

乱痴気アンナが俺に命じる

「生きなさい」。

唯物論的モルヒネ宗教デモクラシーの修身スノビズムのくそつ
たれ

地上は死んだ隣人は死んだ

詩が死んだ

俺だけが緩慢に死線を継続する

激甘ステロイドドリビドー

サイル

鬱積する激雨の大陸間弾道ミ

もうここではない

なぜおまえがいない

緩慢な死線の継続の俺だけが書かなければならない

よう　　ちきしよう　　ちきしよう

ちきし

誰ひとり残らないこの暗喩

乱痴気アンナが俺に囁く

「生きなさい」。

生き狂いの静脈コビー　根絶やしのアガペー

言葉を排泄しながら

混迷する生存者

「こんな腐れた母親の恥部は見たことがない」

モスクワ1919の憂鬱

ペンタゴン9101の殲滅

吐け　　乗っ取られたパスワードでチンポ商売のジゴロ

を分けてやる

使い物にならないX-video ストリーミングと気分変調症ディスク
ミア人生をフォルダごとDelete

乱痴気アンナが俺に告げる

「生きなさい」。

「あなたはどんなリルなの？」

「おまえのオメコみたいナリルさ」

「詩の思想はあるの？」

「おまえが俺のアンチ思想さ」

「何を書きたいの？」

「俺は臭い豚ウヨメガネや汚いプロ市民のパトリズムや現代詩崩れのポカ世迷言を殲滅したい」

「どんなペニスが詩的に美しい？」

「入るならなんでもいい」

「あたしのオマンコ好き？」

「オマンコなら平等に好きだ」

「嘘つき」

「嘘しか言わない」

乱痴気アンナだけが知っていた

「生きなさい」。

騒擾する爆破テロのバルセロナ。

福音派ペンテコステを化したイタリア女の膣に埋める顔。悶える声とマン臭は万国共通だった。

デパスが効いて射精できない。化粧が剥けた発情宣教師はただ

の国際痴情肉便器。

クリスチャニズムとペテン最終戦争を唾棄してやりたい死にやがれ牧師も聖書も法王もついでに天皇も焼いてやる血みどろの体言止めで包囲して捻り潰す。

女がイクがそれは詩情の欠片もない。

乱痴気アンナだけを信じた

「生きなさい」。

一三四回目のオーヴァードーズ

ただ

ただ

自分の

属性を

破壊したかった

昨夜の

電話で

死にたくなつた

あの人

裏切り

すべてに

背を向ける

どうせ

飲んで

吐く

惰性

緩慢

死の

予行

それは

どこにも

自分がないのに

乱痴気アンナだけが見ていた

「生きなさい」。

① 殺す

梅田のポロアパート
屋上

② 生肉を抉るように殴打

頸椎を絞める

③ 初めての殺人未遂経過五分一六秒

④ この売女を突き落としたり
難波で売女の膾を突く

初めての殺人一三秒前

⑤ あと四〇数センチで転落

殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す。

⑥ 正気に殺される

→ ↓↓↓↓↓↓↓↓ 殺し損ねた女を離れて国道一号線を彷徨う ←

← → ← → ← → ←

彷徨う ↑ ↑ ↑ ↑ ↑ ↑ ↑ ↑ 殺し 損ねた女を 離れて ↑ ↑ ↑ ↑ ↑ ↑

乱痴氣アンナが降りてきたのだった

「生きなさい」。

どんな信条も詐欺的なロジック何も信じなかった右も左もただか
だか買ひ被りの愛国心と敵愾ナシヨナリズムと無気力アナーキ
ズムおまえの理屈は俺がケツ拭く紙わかるか？偽善者の押し売
り英会話教室めが出て行け秩序よ裏切り者の脱構築スマホ蘊蓄
主義のウンコやろう何も聞きたくない全部意味ありげなエ
レメントを見せかけた異物の汚物の廃棄物すべて泣けてくる吐
きたくなる誰かの排泄する排他的感傷テリトリーここから救っ
てくれだれでもいい違うだれでもよくないうちのだれでもいい

ほうのだれか救ってくれおれを救ってくれここから救ってくれ
どこかへ救ってくれもう救いようがないおれを救っておれだけ
救って救っ救っ救っ救っ救っ救っ救っ救っ救っ救っ救っ救っ救っ救っ

乱痴氣アンナが手を置いた

「生きなさい」。

詩ガ カタルシスヲ喰ウ

詩ガ同 調圧量ヲ恐 喝スル

詩ガ偏 狂ヲ恋 愛ヲ替ス

詩ガ 腐肉ノ素 朴ヲ縛 ル

詩 ヲ嘔吐スル

詩 ヲ絞 メル

詩ハ世界ノ限
界

俺 ガ潰ス詩 夜ガ詩 ヲ潰

Soup

詩ハ

乱痴氣アンナが詩のなかにいた

狭小 ナ知性

「生きなさい」。

詩

キャットフードの缶詰の底に書かれたベテロの言葉を眺めてい

ヲ放棄

シタイ シタイ 死体

宿命と思つた

詩

あの人はここにいなかった

へ

“ 우리가 하나님을 사랑한 것이 아니요 하나님이 우리를 사랑하고
우리의 죄를 위해 ”

死 ヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲ

ヲ・・・・・・・・・・・・・・・・オオオオオオオオオオ
の罪のために・・・・・・・・・・)

哀しす Gill世界 詩 自決

“ ΟΘΕΟΣ ΗΜΑΣ ΑΓΑΠΑ ΚΑΙ ΥΙΟ ΤΗΣ
ΣΑΒΗΤΗΤΑ ΗΝ ”

(神が私たちを愛し、私たちの罪のために……)

“ हमारे पापों के लिए ”

(私たちの罪のために……)

“ ……にめたの罪 ”

(罪のために……)

虚ろに生きさせようとするキャッチコピー

ろに眺め

灰皿にポロニウム三一〇の魂 散った

ここで終末

望まなかった

「求める」を止めた

無に無を描いた

乱痴気アンナだけが残った

「生きなさい」。

電気コード

首に巻いて

無言のうちに

過去も

いま

この時間も

もはや

消失

ドアノブに

巻く

力

こめて

引力を

虚

下に

涙

毀れて

舌を

噛む

滲んだ

唇

も、う、こ、こ

に、は、罪

し、

か、
い 無

生に死が力尽きる

こご。

乱痴気アンナが微笑した

「生きなさい」。

いきのびるこうかんけつえき

かんごふのびしょう

しにそこなつてはじめてのばりぞうごんをつばをはきながらバ
ルーンにむけてつぶやく

せいしんいがくにどぜつぼうさせた

もういちどしをひろつた

もういちどかいた

じゅそをれつきよした

かつぼうをつらねた

にどとそこにはもうかえらなかつた

らんちきあんながぎすした

「生きなさい」。

神を創造しない

生に証を建てない

死に釈明をくれてやる

たかだかクソ詩をリボトリールの安息で払拭してから 八つ

裂きに愛する

誰かが拾う結末も

ガス欠のフォード・マスタングも

軽量級の生涯も

ナパームゼリーも

相対する世界 その恥辱の極み 生き死にの線上

もはや振り返らない

ソーシャルメディアは死にます

クソ垂れウヨも 愛国リベラルも

すべての日本語を抱きしめて

同時多発手コキで逝け
存在のトーチカに投擲する

否定を肯定して逆説で生き切るからこの文字数制限の死をぶつ
潰す

乱痴気アンナが

俺を

赦すだろうさ

彼女が俺を救った

「生きなさい」。

◆杉平敦（40） 東京都

大地の歯、歯、

紙の一枚か、髪の毛の一本ばかり、あるいはその百分の一か、千分の
一か、微かな侵食を繰り返すこと数百万年、荒々しく削り取
られた外観の割に、不思議と滑らかな球面を描く、逆さまに開

いた軟口蓋、その外輪に、垂直に聳える、大地の歯、歯、その切っ先に立てば、下界の蒸し暑さが嘘のように、ただひたすら青く乾いた風が吹き、陽射しはジリジリと直接的な痛みでもって、幼い我が身のか弱い皮膚を刺し貫く、

まさに大地は母であった、母の遺骸であった、逆さまに放置された遺骸、下顎が失われ、剥き出しになった軟口蓋、その乾き切った外輪に残された、歯、歯、であった、死してなお、剥き出しになってなお、その鋭い切っ先で、我と、我が局部とを、噛み切らんとする、大地の歯、歯、であった、

肌は粟立ち、身は震え、脈は高まり、叫びを抑えきれず、陽射しに破れた肌の傷口から、見えない血飛沫、青く逆巻く風に舞う、まだか、まだ俺は無事か、手足や頭は千切れてはおらぬか、上半身と下半身とが切断されてはおらぬか、亡き母に、太古の母に、大地の歯、歯、に、噛み切られてはおらぬか、上半身は、逆さまの軟口蓋の斜面を滑落し、その先の貪欲な消化管へ、下半身は、かつてぼつてりと存在したであろう口唇を素通りし、鼻腔を経て、赤々と狂った母の脳髓へ、引き込まれてはおらぬか、

狂った母の脳髓赤々、その印象、恐らくは失われた口唇の彼方から、かつてぼつてりと存在したであろう口唇の彼方から、あ

の恐ろしい呼び声を止めようとしないう夕映えからの幻想、西方なる浄土の一声、狂える脳髓の叫び、母の、大地の歯、歯、の上で、幻の血にまみれた我が身の上で、いま一つに重なり合う、あの恐ろしい夕映えの呼び声に、我が骸、微動だにせず、吹き出す血飛沫だけが、帰りがたっている、しかし、どっちへ!?!どっちだ!?

夕映えの呼び声は去り、月明かりもない、その暗闇に、亡き母、太古の母、狂った母は、誰にも見えない歯、歯、を、大地の歯、歯、を、突き立て続ける、暗く、冷たく、滑らかな軟口蓋の、さらにその奥、死してなお、俺を飲まんとした、失われた咽頭の、さらにその奥、暗闇に響く、全てを飲み込むばかりの狂女の巨大な唸りは、意外にも、限りなく清浄で、限りなく静寂だった。

◆Eli in church (28) 東京都

はじめまして、子どもたち。

噴水のある公園で喉が渴いて歩けないと泣き笑う子どもを連れて人に声をかけられること。私はあまり口角を上げすぎないようにひそかに一度、くつくとくちびるを噛んでから道順を伝え

る。そうして二人はせまい歩幅でゴム毬のように去っていく。どこまで行つたか振り返る必要もない、葉と葉が風で擦れる音が数分前の出来事を数十年前の一幕に変えてしまう。そうした錯覚はしばらく、そのうちこの公園で遊ぶのが人間ではなく野生獣ばかりになるころまではいつまでも繰り返されるだろう。道順を伝えるあいだ、子どもはこちらをちらとも見ないし、こちらから微笑みかけるのも居た堪れなくなるほどもつとべつの形で生きている。そのことが事実のような顔つきですこしの間、残る。けれど白昼の日差しは事象すべてに膜が張っているかのように淡く光りつづけて、そのうち形が与えられたいのうちであったことも忘れる。だからはじめまして、子どもたちよ。私は水飲み場を知っている。飲み水の湧く場所を知っている。飲み水を得るための手順と道順を心得ているこの人間を、君たちの藻掻くところから見つけて頂戴ね。

水をのむと息をおぼえる。私たちの砂漠を突き進むとかならず水がある。私たちはそれを知っているからね。私たちよりかわいた砂は血をものむからね。私たちの飢えは血を水に変えるからね。安心するといひ、私はこの白線を目印に歩いていくから君たちは君たちのかわき方を克服するだろう。手を取り合うこ

とがむずかしくとも、体の内側にため込んだ水に変えられる部分すべてが、君か私か一方が生き永らえるときにはきつと互いのために揺らぐだろう。漕がない空を仰ぎみつ雨宿りをしたときからこの身を穿ってきた水音がどちらかの体から先にまた奏ではじめるだろう。知る限りの言葉と、態度と、眼差しと、吐息で傷つけ合ってきた私たちが、その音が聞こえたなら和解して、溶け合つて、伏せ合つて、包み込めるだろう。

そうして私は君たちの知らないところでたつぷりと、君たちの髪から、毗から、額から、袂からこぼれる日差しを吸って自らの体を暖めているのだ。放つておくと凍ってしまうのではないかという危機感こそが自らを凍らせているからくりと理解したつもりではいるのだが。紙をめくっているときにできた切り傷が、不思議なことに「固まり過ぎ」たせいでその辺り一帯の皮膚に引き攀れが生じるようになった。季節の変わり目に促されて自らを内へ内へとひつくるめすぎたのでしょうか？けれど当の傷はこのまま冬だとうなづくまえに手袋の内側に潜り込むでしょうから、ええ。

ずっと昔、私の腕にも光の粒がのつていたのよ。何粒も、いろ

いろいろな形の光の粒だった、よく覚えている。いま私のつま先と反対方向に向かかっていった君も見上げるくらい、私も光をこぼしていたのよ。それは私が他人の体から水音を聞き分けるようになるまでの話。ある日電車に乗っていて、目の前に立った人の目が津波のように形を変えたかと思うと、それきりなんの音もしないままたしかにその人の体から波が寄ってくる気配がして。気づいたときには私の肌にも水が垂れるようになって、つられて光の粒も払いのけられていった。もう私の肌をすべることとはなくなつた光の粒たちを、懐かしさや慈しみなど覚えたこととはないまま、たまに公園のブランコに乗りたくなる幼心がよみがえるときに吸ってみては自らの水に溶かしている。

◆緒方水花里（25） 福岡県

壁の穴

二階の廊下の突き当たりの壁には大きな穴が開いている。そこから出て行ったものがある。

一つにはフェレットくん。マギー審司のマジックが流行っていたのは私が小学校に上がる頃、テレビに映る彼はフェレットのぬいぐるみを持っていて、母親にねだって買ってもらった。

「マギー審司のマジックセット」に付いているぬいぐるみの「フェレットくん」、を生きているかのように動かすのだ。けれどもそれはいつの間にか何処かに行ってしまった。勢い良く動かすあまり壁の穴から外に出て行ったのだと思う。

一つにはマルキヨウの大水槽。家の近くのスーパーマーケットには生きた魚が泳ぐ水槽があつて、捌かれる前の鯛や平目が悠々と泳いでいた。6つの私は母親の買い物に着いて行く度に鮮魚コーナーに立ち寄り、水槽の魚を見つめ、母親に呼ばれるまでじっとその場を動かかなかったのだけれど、いつの間にかその水槽も何処かに行ってしまった。マルキヨウには次第に行かなくなり、次に行った時には水槽は無くなってしまっていた。

私は壁の穴に水が流れ込み、魚達が一気に泳いで行く夢を見た。壁の穴は私が小学校に上がった後に開いたもので、私は父親と妹2人と4人で生活していた。父親は仕事の傍家事をこなしたが、酒に酔つたり仕事や育児のストレスを抱えたりすることも多く、壁の穴は父親の肘鉄によって空いた。

一つには72のTシャツ。中央に「72」の数字と片目をウインクさせ片手にアイスクリームを持つポップなウサギのイラストが入っていて、胸から下が青、肩から袖口と首元が黄色の七部丈のTシャツ。私が着た他の服は殆ど下の妹に引き継がれ

たのに、この服だけはそうはならなかった。七分丈が六分、五分になるまで、私が気に入ってずっと着ていたのが原因であるが、それだけ着ていたはずなのに何処かに行ってしまった。箆筒の中を整理するのが母親から父親になったのは私が7つの頃で、母親は病気になるまで入院している、と聞いた後に二階の壁の穴が空いた。

壁の穴が空いてしばらく経って、私はそこに手を突っ込んでみたことがある。二階の廊下は電気を付けても暗く、壁の穴は何故だか近付いてはいけないような気がしていた。ある夜、いつも見ないようにしていたそれに対面し、ゆっくりと手を差込み、肘から先と指先を動かす。流流とした空気が流れ、何かを掴むことは出来なかった。何故だか怖くなって手を引っっこ抜いて、寝室に戻った。ベッドにはくまちゃんというぬいぐるみがいいて、6歳の頃から今に至るまでずっと私の隣で寝てくれている。

壁の穴に消えたものは何処に行ったのだろうか。母親は私が9つの頃に帰って来て10歳の頃にまたいなくなつた。その日のお昼ご飯に母親はオムライスを作り置きしてくれていて、私はその横腹にトンネルを開けて食べるのが大好きだった。10歳の私は7つの私と違って母親が今日いなくなることも、父親の

暴力が続くこともわかっていて、母親がいなくなった後の台所で、真つ昼間に一人でオムライスを食べた。ラップを外しいつものようにスプーンでトンネルを作り始めた時、ブワっとした空気が何処からか流れた。マギー審司のフェレットくん、マルキヨウの大水槽、72のTシャツが、他にも沢山、ダイエーの屋台の今川焼きや「ミニモニ。」の辻ちゃんのキャップや壊れたたまごっちの機械やいつの間にか何処かに行ってしまったもの達が、トンネルを掘り進めて行く度に後から後から出て来て、スプーンの先っぽに当たった。星のようにピカピカと光って、トンネルの中はそれらの光でいっぱいになり、その中を温かい風が吹き抜ける。私は恐々とスプーンを動かして光を掬い集め、口に運んだ。ケチャップとバターのしよっぱさと懐かしい味に驚いて、私はあの壁の穴だけはもう何処にも行かないのだとわかった。

◆荒木隆之介（20）

栃木県

テワスラ

君の鼻や耳の形、鎖骨や胸、乳首の感触そんなものは、まるで砂のように流れていく。

君は微笑み、僕を子供を見るような目で見る。

僕の愚行が許される。

体調の悪さと反比例した心は不思議と穏やかである。

明日のことなど忘れて、テワスラに夢中になる

明日のことなど忘れて、

このまま、僕の風邪がうつる事で、君の中に僕がいることになる。

うつってくれ、看病するよ

若さ

一一〇円の快楽を握り締め、〇円の娯楽に溺れている、

早くなる心臓の音に身を任せ、絶対でシートにくるまっている。

スマホの画面から溢れ出る才能たちに殺され、僕が誰かわからなくなっていく。

明日も学校なのに。もう休めないのに。

器用に生きたい、でも、不器用な方がかっこいい、

と思う、

歌のせいだ

世の中に溢れる歌は僕の愚行を肯定するものばかり、

でも僕の周りの人々は誰も肯定してくれない。みんなこんな事、していない。

本当にこれでいいのか、わからないまま進んでる、

何万人にも向けた無感情の応援だけが僕の耳には残るんだ。

僕がこれからどうなったって、

時代

駅の改札、スマホやカードで通り抜けていく

でも、ふと目をやると、まだこんなに、切符を買う奴がいる

スマホ一つで映画やアニメが観れるのに

まだ、レンタルビデオ屋は潰れない。

だから、きっと僕を見つけてくれる人もいるだろう。

僕を愛してくれる人もいるだろう。

演じる

あの友人の前ではこんな感じ

こっちの友人の前ではこんな感じ

学校ではこれだ

バイト先ではこんな感じ

親友の前ではこんな感じ

恋人の前ではこんな感じ

家族の前ではこんな感じ

全部本当で全部嘘

そんな感じ

もしかしたら、犬の前だけ本物かも

◆エリー、ファー（31） 東京都

白日よりも遠い蛍光灯

昨日

体を売った

相手の体臭がきつかった

でも

誇らしい気分になった

自分にもできるんだ

自信がついた

買われてようやく自分を知った

相手は男で

自分も男で

これからも相手にするのは

全員

男

まともそうな仕事に就いて

やめた

嫌いな仕事ではなかったけれど

好きな仕事だと胸を張って言うことができなかった

嫌いな客はいなかったけれど

好きになってくれる客が多すぎた

今でも

自分の居場所は
あそこにあると思っっている

蛍光灯の下

もうすぐ寒い季節が来ると聞いた
笑顔で頷いて定時退社をした

電車の窓から

大破したタクシーが見えた

渋滞していた

綺麗だった

詩を書こうと思った

お風呂に入って

キーボードを見つめる

完成した

あつという間だった

救われたいではなくて

報われたかった

自分は他の誰かと何が違うのか

世間に問いただしたかった

ある夜

分別の利く使い勝手のいい子どものまま
大人になってしまったことに気付いて
泣いた

◆斬波なおみ（21） 埼玉県

かっぺ趙高

東京の空には鯖が飛んでいる

いつもじゃないけど確かに飛んでいる

テレビでそう言っていた

みんながそう言っていた

東京育ちの子たちの間では常識だ

鯖は飛ばないなんて言ったら

東京では笑われるよ

田舎者だって笑われるよ

正義

畑を荒らす猪

街に降りてきた罌

捕まえたなら可哀想でしょ 殺したら可哀想でしょ

農家の生活は潰れたらいいわ

北の田舎者食われたらいいわ

動物園 イルカショー 性労働者

見せ物にして可哀想でしょ 差別的でしょ

毎日毎日労働しても 可哀想ではないのにな

お偉い活動家にとって 人間はきつと最下層

だって動物たちは

だって女はこんなに弱くて可哀想でしょ

男性だから死んだらいいわ

名誉男性は死んだらいいわ

人間だから死んだらいいわ

従わないなら死んだらいいわ

襲われたなら自業自得

殺されたって自業自得

鬱になったら自業自得

親に感謝して生きなさい

高齢男性は迷惑だから殺しましよ

高齢女性は生産性がないから殺しましよ

中年男性は気持ち悪いから殺しましよ

中年女性は醜いから殺しましよ

若年男性は希望の星だ潰しましよ

若年女性はけしからんから潰しましよ

男児は加害者に育つから殺しましよ

女兒は被害者になるから閉じ込めましよ

あちこちからあちこちに飛び交うヘイト

活動家たちの言うとおりだ

人間はきつと最下層

害獣は可哀想だけど害虫は駆除してもいいわ

海豚は可哀想だけど魚は飼育してもいいわ

動物は可哀想だけど植物は食べてもいいわ
人間はきつと最下層

君らはどこから何を見ているの？

◆桜田弥生（25） 千葉県

スクラップ未然カラーージュ未満

私の体は私には勿体ない

捨ててしまうのも勿体ない

だからどなたかいかげですか？

ご覧下さいこちらの手

深爪ですが指長め

感情線に若干の乱れがあるものの生命線は十二分に長い

料理はできませんがピアノが弾けます

不器用ですがタイピングのスピードには自信があります

体のでっぺんを飾りましたるこちらの髪

コシが強めで黒の直毛

遊び心には欠けますがアイロン要らずの優れたもの

上の次は下の方をご紹介

立ち仕事で鍛えられた足と脚

スポーツ向きではありませんがなかなかの健脚

散歩にも通勤通学にも役立つこと請け合い

駅やバス停へのダッシュにも対応

底の高い靴より機能的で柔らかなスニーカーが好きです何卒

丈夫といえはこちらの歯

定期的なメンテナンスで状態は良好

親知らず抜歯済み、その他欠損なし

するめもおせんべいも何のその、爪切り代わりに

咬筋と歯茎、抗菌用唾液腺もセットで

次は文字通りの目玉

近視と乱視で眼鏡着用必須

ドライアイのためコンタクト不可

毎日三回の点眼で潤いをあげてください

黒目が大きくてブルーライトに負けない健気な子です

同じく五感をつかさどる鼻

大きいから呼吸が楽です

鼻炎ですが嗅覚には全く支障ありません

味噌汁の具材当ても腐敗食品の鑑定も朝飯前

納豆も銀杏もへっちゃらだけど

ここだけの話花屋が苦手

脇に控えましたる耳

なかなか隅に置けない奴です

楽器の単音なら音階が分かります

イヤホンの音量は最小で十分なので音漏れの心配無用

別室の音を拾ってそこにいる人の行動だって把握できます

集中時には自動でノイズキャンセルモードに切り替え

好物はテクノサウンド

外耳炎になりやすいのが玉に瑕

さあお待ちかね心臓登場

しょっちゅう動悸を起こすけどモノは健康

丸一日の心電図検査で期外収縮数がね

通常百から二百のところ

驚く勿れたったの六回

ホラーに強いがナイーブさも併せ持つバランス型

胃腸はセットでどうぞ

彼らはかなり繊細で

しょっちゅう不調を訴えてくる

おかげで私は自分が無理してるって気づけるんだ

器が小さいからあんまり入らない

その分瘦せられます

断食よりご馳走が恐怖です

自分なんかがこんなにいいんですかって

おしゃべりも大詰め

今まさに活躍中の肺を讚えて終わりますよう

ロングトーンもお手の物

背筋を伸ばせば風船も歌も悲鳴も笛も自由自在

猫背にはめっぽう弱くて青菜に塩ですが

そうかだから私はいつも息苦しいんだ

誰も私に見向きもしない
それもそうだ

あの人は料理上手

あの人はソバージュヘア

あの人はダンスが趣味

あの人は歯並びがきれい

あの人は視力が二・〇

あの人は鼻水なんて似合わない

あの人は耳が早い

あの人の心臓はときめきを知っている

あの人のお腹ではスイーツとラーメンが同居できる

あの人の声はよく届く

だから寄せ集めの私は今日も

できることとできないことの数と大きさを比べて

部品同士が少しでも仲良くできるようとりなして

いつか自分にびったり合う自分になれるように

見えない継ぎ接ぎが消えるまで今日も

◆小崎 青（38） 東京都

インスタント焼きそばに迷い込む

小さき肉をとりのぞく

あたしは女であることを利用している

鍛えてみても柔らかい女性らしい筋肉

白い二の腕とふとももと両頬の膨らみ

あたしは女だからやさしくされている

高いところに手が届かなくてもいいし

あの荷物たちを背負わずにすんでいる

あたしは相手を見て声色を選んでいる

記憶のなかのクラスメイトを真似して

思わせぶりで甘えた態度をとっている

あたしはあたしの顔面を利用している

世の中に無数に存在する善意の差別を

美人だしあのひとよりも若いからね。

細胞を描きつづける“KH@くうそう”さん
魚肉ソーセージしか食べられない“背表紙”さん
だれかに見守られながら眠りたい“あやまち”さん
彼らに惹かれてしまうわたしについて

ヤモリの住まう角部屋で
インスタント焼きそばに迷い込む小さき肉をとりのぞくわたし
について

誰も知らない

たまに一步も先に進めるつもりのない恋なんかしてみたりして
透過した花びらささやかにふるわせて

灰色のニットに身を包む

首筋から風呂上がりのママの匂いがある

消失点なんか

積もった霜をどうにもできなくて
別れたらしい、あのころのふたり

ことばをひろいに旅に出る
酸化するポストンバック抱えて

うたわずに済むのなら済ませたかった
門が閉まるとカラスが鳴き出す

さみしい場所で
未来の自分と散歩する

傷跡を大きさにラッピングして
これでも鈍く光っていたんだ

人生を知ったかぶりするのはたやすい

春には桜を

秋には紅葉を

酸化しないポストンバッグを膨らませながら
みんな生きてるこんなにも

疲れているのは意外にも自分だけだった

他人ひとより水分量がおおいから

誰かが乾かしてくれなくちゃダメだったんだよ
無理に焼きつけるんじやなく
縁側程度のやさしい風で

ほのかに海の香り漂う詩集をもつて
いま終わらせようかなって

消失点なんかどこに置いたっていい
いくつあっても
歪んでいても

冷凍庫

外側だけすり減っていく
スエードのショートブーツ
にじんだ花びらさえも舞いあげて
踵はずませて

うしろ姿をブックマークした
網膜に編みこむように

鉄板にしずむトマトのような

西日で焼きつけるように

ひどく

気に入ってしまった

わずかなすきまから迷い込んだヤモリ

早く、隠れて、行ってしまった。

とっくに致死量をこえた金木犀の呪いが

名残惜しそうに右足をさしこんでくる前に

いつまでも

燃えきらない

選んできた

つもりでわたし

渴きもせずただ

灰になった

初夏の葉のようにやわらかく

空に伸びる枝のように繊細で正しい樹

鉄のようにつめたいこの手が
実らない田園のようなこの目
が
何度もとかされました

おらは、海ど話ばする
父ちゃんど、母ちゃんど、婆っちゃんど、
話ばする

◆早坂泰子（88） 宮城県

泣がねど

おら、海が好きだ

海ど話ばすんのが好きだ

「おらも死にでえ」
「みんなんどごさ行きでえ」
荒れる海
父ちゃんがごっしやいでる
「ばがかだれ
生ぎろ、生ぎるんだ」

海には

父ちゃんがいる

母ちゃんがいる

婆っちゃんがいる

おだやかに光る海
母ちゃんの声がする
「病気すんなよ
元気でな、元気でな」

父ちゃんはずっと前に船で死んだ

母ちゃんど婆っちゃんは

黒い波にのまれだ

妹とふたんで、おれは生ぎる

ん、父ちゃんも、母ちゃんも、婆っちゃんも、
すんべすんな
おれ、生ぎっから
妹ど、生ぎっから

おら、泣がね

泣がね

おら、泣がねど

◆荒れ野（16） 岐阜県

帰国

風に吹かれていた

結局分らないままだった多くをそこに置いてきて

私たちは最終日を永遠に漂っている

刻まれ揺れ動く心たちは不平等に切り分けられて 風に乗って

上へ上へと

そのまま音信不通になったらしい

彼方の先で消えてしまったんだ きつと

さようなら 遠い全てよ

私なんて小さな場所の小さなピースに過ぎないけれど

刻まれ揺れ動く心たちの 不平等に切り分けられたひとつであ

るから

風に乗ってまっすぐに 彼方の先で思いごと 消えられますよ

うに

終わりの音

幸せには、終わりの音、というものがあつて、私はそれを聴くことができる。

エンドロールというのは常に小さく流れているもので、私はそれを常々知っている。

幸せに気が付くと同時に、終わりの音に気が付く。

幸せを感じながら、終わりの音に泣く日々を、何十年何百年続けていたって、聴こえるものはエンドロールばかりで、その存在を忘れられたことは一度もなかった。

しんしんと迫る終末に、沈んでいく陽の光に、抗えなかった追い風に、巣に戻っていく幼さに。エンドロールの歌詞を覚える頃には、私も地に還っているのだ。

願っても足搔いても幸福というものは続かないことを、身に染みて解ってしまったから。

終わりの音は、今も聴こえている。

誓いの言葉

どんな不幸も、悲しみも憎しみも。

この愛の元にはなんの意味もないと思うの。

大げさでいい。それくらいでいい。いつ死んでもいいと思えるほどに、君と出会えたことが私の人生最大の幸福であり、神の存在意義と、私が生まれ生きたことの意味だと思ふ。

広い広い果てのない宇宙の中で、抗えない抗力がどんなにあるうとも、それらさえ美しいと感じさせるほどに、君の輝きと瞬きは、唯一の永遠だと詠い続けたい。

三年と十か月の後、やっと分かる行方が。

命よりも大きいものなら、多分、私たちの勝ちなんだ。

銀の証

首を切られれば死ぬ

中心にある頸動脈をボキリと折られれば死ぬ

命の真髄とも言える私のそこに君は 愛の呪術をかけるかのよう
うに

飾りのついた銀の細い 鎖のようなネックレスをかけた

そうやって私たちは 終末を共にすることを約束し 瞳に酔狂する

こんなにあ愛する人は何億回生まれ変わっても永遠に見つからない
い

そしてこの一度の私だけが 最も神に近付いたのだと

神が私を愛し創り自らも人となり逢いに来た

そこにある白くもはやドロドロとした眩しい光に私はいつも壊れそうだった

扉の先にただ無限に存在する天に仰ぐは白い翼の根純白の肩甲骨

私は世界で唯一 それを目にした命なのだ

神の独占に値するのはただ私だけで 私もまた神の心が赴くただ一人であること

そのために私はまだそこにいるから 飼い慣らされる一方で命をかけても護るから

頸動脈にかかる銀に誓って

今はただ 死ぬことと死なれることだけが恐ろしい そんな幸福

呪愛

自分のために生きたい気持ちと、君のため以外なものもなかった私。

君があまりに私を好きだったから、私は自分を君基準でしか捉

えられなくなつてしまった。

そんな幸せなことつてある？ そんなおかしなことつてある？
こんなに苦しめられることつて。

そう君は、神なのだ。君こそが、君だけが、私のすべてなのだ
から。

神はやはり、下々の者を自由にはさせない。

非常に気まぐれに、異常に無責任に、慰めを乞えば無視する癖
に、いつまでもわたしの首に抱きついたまま、背中で悪戯にわ
らつて離れない。

君が狂うほど私を好きなら、私は狂わされ君を手放せない哀れ
な女神の下僕。

泣いてもはたまた見捨てても、振り回されるしかない。神の意
思には逆らえない。

自分のためになんか生きられないよ。時々考えてみても。
白い女神に誓つて、私は絶望しながら、また薬指に契る。

夏は嫌いだ

暑くて熱くてなんとも寒々しくて苦しくてすぐに病氣になつて

幸福な六月

しまうから

こうやつて今が一番幸せなんだと突き付けられるように分かつ
てしまうのがこの上なく辛い。シミシと 顔面の骨全体を輪郭
から内部へ粉碎されていくこの感じ

君が私に振り向いてくれているその視線のなんと幸福でなんと
恐ろしいことか

君の異常で重度の愛情は開かれた瞳の中のギチギチに硬くなつ
た瞳孔で私はその眼前で横目に君を意識しながら気持ちの悪い
脂汗のような冷や汗をダラダラと頬中に流してぎこちなく笑つ
ている

歌詞もリズムも噛み合い重なり合った 二つの美しい歌も 原
稿用紙がいつぱいになれば強制終了するように数メートル先に
ある途切れ終わりを見つめながら線をなぞることは心の自殺行
為であるけれど

生まれてしまつたら必ず死ななくてはならないように
始まつてしまつた以上どうしようもなく終わるしかないのでは
ある

雨蛙の鳴き声は私を糸鋸で削り切断する断末魔のよう
寒々しい月にか細く祈られた永遠を聞き入れる者は残念ながら
存在しない

幻覚

もうそこには現れてくれないのに、夢にばかり出てきて私を苦しめるだけ。

指を指しても歪んで。

悪夢、悪夢悪夢悪夢。

検査なんかじゃ分からないよ。

煮えたぎった抑鬱。

見ないふりをした分だけ、グラグラグラグラ、小さく上昇し続けた憎悪がもう食道まで。

やりづらい酸素。今更？今更だよ。

悪夢。悪夢、悪夢悪夢。

せめて眠っている時くらいは綺麗なものを見せてくれたついでにのい。

私は赦されない。

日頃の行い。指した指先がもう千切れそう。

グラグラ沸く。ぐらぐら。

笑ってんだから笑うなよ。笑えよ。

それくらいしか出来ることがない。

食べることを考えるだけで怠い。だるい。

力尽きた体で眠って、悪夢。

自傷行為

裏返った皮膚の中 血管の断面が ドクドクと気持ち悪い音をたてた時

私の全ては生き返る

全身が波打って脳波強く揺さぶられて

一瞬半回転する虹色の視界と共にリセット

血なまぐさいというのはそんなにいいものじゃなくて実際めち

やくちやなまぐさいし

誰のためでもないよ私はこの現象を説明できる

紫色の爪とか皮膚の切り口の薄さとか

再び熱を持ち確かに動き出した限界の心臓とか

瞬間に固まって指の間からこぼれ落ちた白

電球を飲み込んで指の間からこぼれ落ちた白

色を失くした中身笑ったままで死にたい

貧血

響く声で、誰も知らない言語で叫び、両手のひらを見せびらかして笑う。硬化した片鱗はしたたるのを既に止めていて、養分の抜けた冷たい身体は震えるように興奮極まりない。皮膚なんて全部剥ぎ取っちゃえばいいのに。もう。永遠に訪れない愛の金曜日。守っているように何も愛せていない。身体は冷たくても中から出てくるものは確かに熱くて、まだ生きていたことを感覚的に突きつけられる。

酸素と二酸化炭素は半分ずつ。安心と焦燥も半分ずつ。小刻みの息で吐き出したら、音が縮むのと同時に唾液を飲み干す。手汗がだらだら滴るから、今日だけは好きにさせてくれよ。反響する叫び声は鉄を超えて、私の皮膚を破っていく。辺境。変狂。喉がギチギチに乾いて死ぬような頭痛がする。霞んだ視界をただ愛していた。

宿題

簡単な自分が嫌い。心臓が熱くて息苦しくて、垂れる血液の湿りを実感する。熱い体液は身体中をべとべと巡り、肺胞の中が熱気に満ちる。焦燥。穏やかでない日々。境界。嫌いになる全部。錠剤と流してしまえば楽なのに、そうしないのはなぜだろ

う。躁？満足してるよ。ただ少し、大切だったものが懐かしくなってしまう。食欲なだけ。押し出される動脈を喉から吐きそうになる。いくつもの紙を広げてみても、なにも進んでいない。焦燥。境界。躁。

打撲

どんなに世界が耐え難くても、やってはいけないことがある、思い知っては忘れる。その感覚が、自分にだけは抜け落ちていくように思う。

人間であることに任せて強く強く強く、骨の近い部位をかたいところに打ち付ければ、大きなミミズが浮き出てくる。膜の表面をずるりと指で摘みあげれば、赤黒い中心から心臓が下へ伝って、小さな吐瀉物が膝に垂れる。青くて赤いそれは身体を侵食し、散々吐き気を催させた後、いづれ消える。ただしそれはいなくなつたというわけではなくて、近いうちに黒い斑点の死骸として現れる。それはなんとも質が悪く、殴るような痛みを常時与えてくる。ミミズがいた時の血管を潰すようなぐちゅりとした不快な痛みとは違い、骨の髄までやられるような、歯ぎしりの止まらなくなるような痛み。庇えば庇うほど息も出来な

くなり、けれども一度の激流には耐えることが出来ないのが分かってから、打ち付けたことを後悔することは出来ない。心臓のあたりで血迷って消えた声。宛先のない SOS も、内出血して膿んで、散っていった。

シャ

シャぶすりと壁を抜いて探し当てる筒

あつと声が漏れてはつと息が抜けて上半身を前に乗り出す

シャ吸っただけ体内の内臓に触れているようなじゅつという中

身重い重い痛み

障害児みたいに口が半開きのまま シャ あかい粒が生まれては墮

ちる

鮮やかすぎたんだ これは海馬の隅の虎馬のように

心のままに輪郭から振動させて濁点のついた鳴き声が吐き出さ

れた

瀉 私の身体がなくなっていく

ひとつに編み上がっていた芸術品が分離されていく

まとまっていた組織たちを自らの手ではらばらにしていく無心

アレにもそれにも憧れではないけれど

静かすぎる私の脳に シャ

笑えないよ私のものになってくれ

勇壮

三月十七時三十四分

黄色い線の外側で

規則正しい駅の音

鉄のレールの一点を狂ったように見つめ続けて

目まぐるしすぎるほど目まぐるしかつたあの頃

血飛沫と血潮に溢れた紅くビビットだった世界

死んでしまえばよかった

死んでしまえばそれもよかった

死の恐怖に怯え暮らすよりも

その方がもしかしたら幸せだったのかもしれない

ある意味では怖いものなんてなにもなくて

あの頃の私はきつと何にも負けなかっただろう

この中に飛び込むことだってなんの躊躇もしなかった

死という果てのない恐怖などとうに克服して

その先を見つめていた

死というなんの不安もない世界を解っていた

利発な私だけが好きだった

十七時四十分の踏切が鳴り出す頃に
目を閉じてもただ風が吹くだけで
暗がり始めた空気の中じゃ気持ち悪いだけで
通過する鉄の塊は私の髪だけを引きずって去って行った

◆狩野愛依（12） 埼玉県

道

前はバリ、シャリと音を奏でるよう
葉を踏んで踏んで走り回っていた
今はスツ、トツと音を鳴らさないよう歩いてる
葉を避けて避けてゆったり歩いてる
前は母と手を繋ぎ引っ張ったり強く握ったり
軽い体を動かして騒いだ
今は繋ぐ先がない手を揺らしたり手提げの紐や空気を意味もな
く握りしめてみたり
重い荷物を背負って無理矢理に動く
前は虫や葉っぱを探すようにウキウキ下を向いていた
今は重い頭で首を疲れさせないようになんとなくポヤポヤ下を
向いている

前は前にいる家族、友達を見るように前を向いていた
今は気づかないうちに近づいていた鳥が飛び立つ音に驚いて前
を向いている

前は空をバラバラ飛ぶ鳥を見るように上を向いていた
今はなんとなくピンクオレンジムラサキの信じられないような
空を眺める為に上を向いている

前の私の居場所は家族と友達だった
今の私は透明で本当は暗く黒くてベタベタへばりつくように褒
め言葉に依存しているかもしれない

君に

貴方とはクラスが違う
だから強制的に外に出される木曜日のお昼休みに
遠くからそっと見つめている
貴方とは幼稚園が一緒だった
けど時々見るだけで話したり遊んだりはしなかった
貴方のことを詳しくは知らない
ただ私より背が小さくて運動神経が良くて肌が少し茶色いこと
だけしか知らない
これから

貴方とは中学が違う

もう見ることもなくなる

だから手遅れになる前に、自分の想いを潰して消滅させる

こんな人も私以外に沢山いるだろう

こんな弱虫な人は

こんな臆病な人は

だから君は潰さずに吐き出してね

がんばって、頑張りたくない

がんばってと言われると勇気を持って頑張れる人もいるだろう

私は違かった

がんばっては好きだった

今は嫌いだ

ブス専美人専

不思議に思うことがある

ブス専はあるのに美人専はない

そもそもブス専とは？

一般的にブスと言われるような顔

(小さな目や大きな鼻)

がブス専と言われる人には綺麗だと思うのか

それとも綺麗じゃないと思うところが好きなのか

私は一般的にブスと言われるような顔だ

大きな鼻に小さい目、荒れた肌にしゃくれた顎

真正正銘の不細工

私も私の顔はブスだと思う

けど、この顔がブスだと思うけどそこが好き

もしくはブスだと思わない人がいるとしたら私と連絡先を交換

して欲しいよ

◆あべりさ(19) 神奈川県

脂肪

お尻の上に左右でふたつ

ぼっこり膨れた箇所がある

どれだけ力を絞っても

そこにわたしのからだはない

だけどもんなは

それは わたしの からだだよ

という

お尻とゆったりつながった

わたしのからだ、のようなもの
ためしにちよつとつまんでみる

これが意外と固いんだ

力を入れて　ぎゅうつと　しぼるみたいにつまんでみる
ちよつど握れるくらいの塊が　にゅつと現われて

わたしの握力ではどうすることも出来ないんだと絶望する
びちびちと揺りつぶせるのは皮下の繊維くらいだけど
かなしくなつてやめた

ちよつと勇気が要つたけど

さわさわと

そのまあるい曲線をなぞつてみる

ほんとはないはずのところこに

たしかに感触がある

ほんとうの　わたしの身体にはないはずなのに

まるでほかの女の人の身体みたいに　正しい曲線が

そこにはある

わたしはそれが許せない

わたしとしての許可が出来ない

わたしはこれを切り落としたと思う

だからなんども　ぎゅうつとつまむ　にぎる　絞る
腰のまわりが真っ赤になった

わたしの血は　この身体を認めているらしい
裏切りものめ

わたし以外のほとんどは　この異物を受け入れてる

あとは　わたし　だけなんだ

全会一致で決めるのは　個々人のほんとうの意志ではないって
ゲーム理論が言つてたね

これは

わたし　が　おかしいだけなのかな

わたし　が　世間知らずなだけなのかな

諦めるって　こういうことなのかな

わたしにはまだよくわかんないから

それらをみんな引き連れて

ランニングに行かなきゃ

いいね

この 青い承認 は

わたしのこのころの隙間に入り込んできて

わたしもそれを拒否しようとは思わず

むしろ歓迎し

いつのまにか わたしを構成する一部になっていた

今日はいくらスクロールしても

通知がとどかない

まるで世界が頭打ちしているみたい

それ以上 わたしを広げさせてくれないみたいで

もっと認めてよ

もっと評価してよ

がんばってつくったんだからさ

わたし を 精一杯露わしたんだからさ

わたしは枯渇している

わたしの要素が足りない

すぐに

はやく

いまなら

つぎこそは

きつと 青い承認が

いつのまにか

全身がかたまっていた

腰を曲げ

くびを突き出し

肩をよせ

くちをしかめ

視界がひらける

わたしは馬鹿だ

わたしは ちゃんとここにいないじゃないか

完全に

トラウマ

これは

ビョーキ なのか

タイマン なのか

きつとわたし の心が弱いんだよね

成功者は言う 宣伝する

「考え方を変えて」

「過去は切り捨てて」

「ポジティブになれ」

「落ち込んでなんかいられない」

いまこのときも 時間は進んでいるんだ

わたし は思う

過去を切り捨てたとして 拭ったとして

でもまだそこにあるんだよ

食べ終わりの皿みたいに

スプーンでどんなにすくったとしても

すくいきれないソースがあるように

最後の最後まで味を感じるように

お皿をべろべろ舐めたとしても

時間が経って唾液が乾くと

浮き上がった微かな塩分が、辛うじて舌を刺激するように

どんなに束子でこすっても 爪でひっかいても

こびりついたものはとれない

かれらはきつと わたし を見下し

「メンタルが弱い」って軽蔑するんだ

自らの優越性に浸り 自分はやはり「こちら側」の人間なんだ

と思ってる

もしくは 無責任なひとは

「その気持ち分るよ、というのぼくもこういふときがあったんだよ、でもね、」

と論してくるかもしれない

あるいは すこし勘違いしたひとは

「海を見に行こう」

と誘ってくるかもしれない

だから

治りかけの 手首の証を

ぼりぼり搔いて

重ねるように

また切り裂く

ほんとうは 切りたくなんてないけれど

これはビョーキなんだ と

社会に認めてもらう都合だから

多少の痛みは 仕方ないね

だってこうしないと

みんなわたしのつらさを

わかってくれないじゃない

タイマンだって 決めつけて

軽蔑するじゃない

お医者さんにかかるとき

「よく切るんです」

っていうと

やっとなたしを見てくれて

パソコンを より一層 かたかたと

あっちも安心したように鳴らす

そうして

いまのわたしが

この社会で生きられるように

既存の枠組みに当てはめて 形式上の薬をくれる

これはビョーキなんだ

ビョーキ ビョーキ

ビョーキって言われると すっごく安心する

もうひとりで手探りで 頑張んなくてもいいんだよって

社会に認められるみたいだから

サプライズ

世の中にある

宣伝や

快楽や

娯楽 は

大体

思いもしないような

ちっちゃいサプライズの集合で

わたしは

子どもじゃあるまいし

べつにそんなちっぼけなものに

踊らされたくないけれど

なんとなく

ボタンをぼちっと押せば

簡単にみれちゃうから

たぶんすぐ忘れちゃうんだろうけれど

ああまたこんなものだろうなって

予想して

確認してしまう

こんなちっちなサブライズの連続で

いまは生きているけれど

死ぬときは

どんなサブライズなんだろうね

意外とこういうものなのかなって

想像して

いまこうしているうちにも

ちっちなサブライズは

自動的に流れてきて

またなんとなく予想して

ボタンを押して

結果がわかって

ちよつとびつくりしたとか思っ

まいにち まいにち

ネットを眺めて

サブライズしていると

だんだん心は アスファルトみたいに

固く平らになっていく

「どうせ」

「くだらない」

「ありきたりな」

サブライズ

死ぬときは

どんなサブライズなんだろうね

わざとらしい

わたしは

詩も

小説も

よくわからなくて

しかも

ちよつとひねくれてて

有名ななんとか賞をとった作家さんも

その作品も

どこか戦略的で

自惚れで

計算高くて

かといって

偉い文豪の作品の批評とか

なんか持ち上げすぎじゃない？って

白けちゃう

この社会が

よくわからないんです

きつとあまり合わないんです

芸術のなかに

わたしの居場所はないのかも

こういうと

いやね、ぼくも昔はそう思ってたんだよ、でもね、だんだんと
社会に出て大人になるとね

とか言ってくる

自称 大人 がいるんだなあ

たぶんこれだから

子どもだ っつて

言われるんだよね

それとも芸術はもともと

全てのひとに開かれたものではないのかな？

世の中が理解できるようになって

大人 を名乗ることを受け入れられる日が
来るのかなあ

許可

これは許可をとったんですか

って聞かれて

とってないです

って言うよ

突然

みんな血相を変えて

わたしの行動を

ゴミ箱に捨てる

これにはどんな目的があるんですか

って聞かれて

それはわかりません でもやりたかったんです
やらざるを得

ないんです

って言うよ

みんな備え付けのことばを組み合わせて

文として「正しい」武器をつくって

わたしの行動を

殺す

◆和田愛実(22) 神奈川県

わたくし

胸の奥からわらわらと溢れ出してくる言葉は

朝焼けの彼方から迫りくる赤の、

空を覆う薄雲を染め上げるようにして

湧く

二十二歳早熟はしにきって

その残骸が指に絡まっている

ラディゲは二十歳で逝ったというのに

それが病にしろ彼のしは泳ぐ目高のように清く鎮魂歌色して光

って見えた

私は惰性を今も食い散らかして残りひとかけらのフライドポテトを狙っている

下戸の軟弱極まりない体は一本の煙草も受け付けず

浪費癖のあるわけでもないのに金も無ければ

この持ち合わせた甘だるく胸焼けできゅうと痛むような優しさで抱き寄せる女もいない

いずれにしても私は私という人間がどうしようもなく燃やしてやりたくなる

骨をも燃やしてほしい

燃えぬなら砕いて屑にしてほしい

築数十年の古ぼけたアパートの銀色の深い風呂に恐る恐る足を
入れて溺れる、と思うときのように必しになつて生きなければ
ならなかった私の骨は黄ばんでいるだろう

どうか消し去ってください

慈しみ深き君—もう君は君で私などどうでもいいのだろうか

午前三時二十四分に目を閉じると

とうに失つた愛が肉体を破ろうとして奥底から突き上げてくる

耐えきれない肉はざりと裂けその亀裂がぎざんぎざん痛み布
団を被つた

友人に恋人ができた、結婚したと、子供を孕んだと

万華鏡を回してこれは綺麗だ皆にも見せてあげようと思えていた頃にクレヨン匂いが消えきれない手で挿んでいたのはそういう類のほんの、血の通つた幻だった

この先に連鎖として起こる当然の出来事を耳の内側で思うとき
随分と静まり返つた六畳半に流れるリストは期せずして東を向
いた風見鶏になる

たとえば私が生まれなくなつたと口にする

瞳孔を見開いた君の眼に唾棄する

掌の

熱、

粒子、

蒸発、

果つ

油絵の具を君はジャージの裾に付けて擦つても落ちなかつたよ、
と言つて

生まれるなんて、と捲れた上唇に骨張つた指(半透明の血管に潜
む悪は青く鈍い色をして)を追悼の形に丸めて舌先で唇の皺を舐
めるその一瞬に見惚れてしまえば罰せられるような気がして四

階の窓に落下防止のための手摺の太いパイプがあることを忌まわしいと恨んで乾いた空気のなかかんかん叩いて昇りかけている陽を見ていた

言葉は私に振り向きもせず他人の振りをして見捨てていった

それは善きサマリア人の、祭司、レビ人だった

私の血だらけの右手に針金を刺したのは？

骨の浮いた脛脛を蹴りつけたのは？

壊した左脚の小指を切るはめになったのは？

これは比喩でも暗喩でもない

幼子の好奇心的加虐心で全身を切り刻まれ道端に放置された蠟

螂の子のように

そこにはひとつの墓標を建てなければならないのだ

私は心臓の裏にあるはずだったえいえんを希求し続けたがあれはずうつと遠くにある

私の脆弱を美德と勘違いし続けている鼓動が

生命を繋げようと弾むたびに業火にあぶられる夢を見る

焦げきった背なかの一部の皮膚をぐりぐりと穿ると意外と指が入ってしまった

ひと思いに抜いてみると幼少時にかくれんぼをして最後まで見つからないあの子を忘れられたと思わせたくなってどうにかして見つけなければと滲むを通り越して溢れる冷や汗をかきながら探し回るときの私の黒目の、ように空いた穴
それは瞬間的に目の表面に映った幻覚、人影、関節さえ亡き者にした

金木犀のにおいをエモいにしてしまうお前の感受性からはし臭が上っている

「阿呆」と口にしたら私までそれに飲まれると思うからお前を見殺しにする

そのポエジーと呼ぶにはなんと青臭くてああ浅慮の塊だ

そんなものををるらるら垂れ流しているのを横目に

私は醒めきって

性善説を真っ向から否定してみたくなる

ミニシアターの黴

メロン曹達の翠

林檎館の光

情緒が引き延ばされてその神経を折られ感覚をおかしくされていのに気づかない奴らに私のとうとさを弄ばれるならば乃木

大将みたいに清くしろう

私のしをしに還元して

それも含めて私のしを愛してほしい

腐りかけの赤黒い本棚の隙間に転げ落ちている私のしを

君が拾い上げて埃を拭って頁を捲って

言葉を咀嚼してくればえいえんを傍において抱きしめることができる

Sちゃんの腕のなかで丸まってそのなめらかな動脈の上で昼寝をする

私の崩れた前髪をその鬢で直してくれるのは無償の愛だということには夢

このふくらみのない憧れの奥にあるのは冷徹極まりない切り裂きジャックで

私が無防備に曝している喉笛を搔っ切ってぶしゅあと間の抜けた音を上げて

どうどうう血が溢れてくるのをその生白く鎮静を思う手でさばいて

ぶちぶちと引き千切って血管は息を止めて

血は薔薇色を晴天に転写している

—えいえん

そういうものを私はうたって遣していくのだ

胸の奥からわらわらと溢れ出ししてくる言葉は

朝焼けの彼方から迫りくる赤の、

空を覆う薄雲を染め上げるようにして

湧く—と思う

実

白昼夢をみた

きみがわたしの腕のなかでその細い顎を肩に乗せている

真つ白に光る無機質の空間だった

ぬくい、とおもった瞬間にその体温は気化していく水蒸気になつて

「乾く」と呟き十字架の上で息絶えたイエスのやう

わたしの醒めた頬にきみはそのがむしろつぶの甘だるく喉を燃す頬を当て

—わたしは生きてるの

わたしはわたしたちと云ってほしかったが

きみのそのとくとくと打つ心臓の音を聞けるのは

わたしだけだといういかにもなひとりじめが立ち込めてきたゆえにひゅうと息をできた

その腕に抱かれていれば神なぞいなくて良かった

きゅううとわたしの最奥のでろでろの身を引つ張り出して

嗚呼爛れている焔めく血をほんのわずかの痛切を願わくはきみ

「アヴァ」

い
こんなにもわたしが寂しがっているということをきみは知るま

い
あんなに黄色い月を見たことがあるのだろうか

霊たちが廻旋している

頭上から凝と私を睨む月は君の眼に似て

足の小指を切り落として憂いに放り投げ

それは綺麗に描かれたメルヘンのつづきだねと云ってしまおう

かと開きかけた唇に

きみは指を突っ込んでうぐうと呻くわたしを静観している

みずうみを蹴り上げて水が跳ねるとき一滴の命を利那的だと

云う奴にはトランペット(あれは真鍮で出来ているらしい)で殴打

してやると腹積もりしているがそういう暴力をきみはわたしに

むけている

ほほうほほうほほうほほうほほうほほうほほうほほうお

雪が降る

きみをとどめておくにはそれが唯一の永遠だろうと

耳に髪をそつと掛けて

そのおでこに触れようと手を伸ばした

瞬きをした

わたしはきみをうしなつた

◆アスフェリカル(59) 兵庫 沼

逃げ出す私を指差し

搾り出された声

「アンタみたいな女が殺されるんや」

藻に覆われた水面に目をやるが

今は有機物の匂いすらない

かつて「理不尽」は

誠実なふりをして

沼の縁に現れた

浅瀬でうごめくオタマジヤクシ
バクバクと頻りに警告する銀のフナ
その口に今にも飲み込まれそうな
重い足取りのアメンボ

ぬかるむ地面に足をとられ
戸惑い ぐらつく視界
差し出された手に縫ろうとして
引きずり込まれた私

もがけば
もがくほど はまる深み
堆積物が放つ腐臭にまみれ
絶望すら救いに思えてきた頃
湧きあがったのは
上昇する 浮力
泥を吐き出し呼吸する 勇気

「……みたいな女が」

必要なものは
すでに携えていたというのに
沼に近づく愚かさを知らず

「……みたいな女が」

湿気に曇る木立の あの骨は
どんな鳥だったか

弱々しい囀に操られ
いつまでも沼を眺めている

◆平久保好一 (39) 東京都

夕景の針

期限切れの毎日に
夕景の針を通す
秋風が肌に心地よく
街のフィルターから

取り残された河川敷で

サックスをいつものように吹く

音の隙間を嘲笑うかのように

夕景の針は

啜えるリードの湿りを照らした

近代化が進む街並みは

試行錯誤が続き見方を変えれば

再構築があり、解体があつた

河川敷に巣食う生き物は

時代の変化に媚びずに

日常を謳歌しているようでもあり

新世代の洗礼を受け

困惑を感じているようにも見えた

河川敷の陰影と奥行きは

年月と共に縮小を余儀なくされ

気づかないところで

昔から生息しているものたちの

生きづらさがサックスの音となり

消化されていった

街も河川敷も抱えている問題に

幾分かの誤差はあれ

大差はないのかもしれない

いつもにまして寂しがり屋の

秋風が肌にまとわりつく

眼前に広がる夕景を

網膜にスキャンしながら

ゆっくりと重い腰をあげる

手に持つサックスに

夕景の針が静かに差し込んだ

◆平田稔一郎(67) 群馬県

タケザオでございます。

清風が揺らす木の葉の色を

照らす光のその中で

空の海原 旅するように

力の限りたなびく 鯉のぼり

それを見つめる 母の宝は

一粒種の男の子

通りかかった近所の人に

一本だけじゃと謙遜しても

その表情は 笑顔に満ちている

そんな光景を見るのが好きな私は一本のタケザオでございます

真夏の休日 昼下がり

汗をふきふき ご近所さんが

居慣れた縁側に

集まってきて

スイカなど 頬張っている

聞こえてくるのは 蝉の声

暑さ高める 蝉の声

不意の涼風 癒しを誘い

雨は近いと 注意を促す

濡れないようにお帰りなさいと

ザオでございます

言いたげな 私は一本のタケ

缶蹴り 影踏み かくれんぼ

兄ちゃんたちは 草野球

夢中で遊んだ後からは

夕陽が 夜を連れてくる

セイコー社のオルゴール

鳴ったら早く お帰りなさいと諭す私は 一本のタケザオでござ

います

◆芦野夕狩（35） 愛知県

蘭の密輸

死んだ根の絡み付いた

コルクを一瞥し女は地に咲く

蘭を不思議そうに見つめた

シンクに一滴の水が落ち

どこからか聞こえる

アートテイタムのピアノに伴奏

された夜

豆腐売りの ラッパの音も

遠くの音が聞こえる季節

空気が澄んだ 放課後に

子どもらの声が 響いています

豆腐売りの ラッパの音も

白熱電灯のわずかなノイズ

二人の会話を密かに

漏洩している徴

堆く積まれた段ボールから覗くコルク

散らばった水苔の隙間

木目の看板が秘匿されている

胡蝶蘭 カトレヤ

女の視線が文字を

愛撫するように幾度もなぞる

虫が這うように

独楽がおのずから

自立を失い崩れていく

夜

男は

もう出かけていた

月明かりが少しばかりも

ないこと

窓ガラスに映る顔は

余りにも静かで

その顔に

記憶というものを見出すことができない

ピアノはいつの間にか止んでいた

そもそもはじめからそんなものは

なかったのかもしれない

ふとサイレンが鳴り

遠くに細い炎が揺れていることに気づいた

女は

どこまでも続く果てのない沃野

敷き詰められた蘭がいつせいに燃えている光景を見た

パチパチと弾けるような音が

誰に聞かれることもない空砲のように

鳴った

まず目に入ったのは花鋏だ

男はひとつひとつ丁寧に切られた

地生の蘭の首を拾い上げては

何も活けられていない花瓶に納めていった

靴に付いた土が

畳を汚した

遠くに揺れる炎を見て

燔祭

と

割れた花瓶が転がった

翌る日の夕暮れ

大量に注ぎ込まれた西日は

何しろ花瓶は割れてしまっていたから

ひたひたと部屋にあふれ

そこで

花につく一匹の虫が首を

捻じりながら溺れ死んだ

あとには

ただ赤い

光が

閉じる塔

きょう やすらいだのは

コンビニおにぎり選んだ一〇秒で

雪 ふってないのに

きみの街より寒いボイラー室で

飛び降りも阻む厚いガラスが

きみの幸福を映しては曇る

上るたびに盗まれた花

下るたびに思い出せ

今見た空の色もぐわわんぐわんの

人の目がらんと回りだす

灰と貝の 地から学ぶ日は暮れ

エコー 星は足纏れ

メロウ 謎と道連れ

きみのダンス 浮遊 陰影が滲み出た月夜

◆綿瀬菜穂子（23） 愛知県

舛花 最上階のプレビュー あうあうあ

白の机に

座るきみ 鎌のハイライト

黒の裾の下に

六と八 青い菴摩羅

息絶ち 帰すな

その声拾う空気が

楯突いた

遠いせせらぎ絡んで生まれた音色は

見ずにわたしを横たえる

きみの眼 縁取る木漏れ日も

わたしの火球に色褪せる

乾いた木の葉も擬態から ReDo

塔の下で見たきみをかえせ至急

宇宙再現の気球きみを乗せ

いま下階へと奇襲

◆清水悠正（22） 東京都

顔が破れる

顔が破れた

布切れみたいにスーツと裂けた

右目を巻き込み 顎のあたりで切れ落ちた

裂け目がほつれて皮膚がたわんだ

私は知った 私が繊維であることを

全部 全部 馬鹿らしかった

中からゆっくり私が垂れた

破れてしまったさなぎみたいに

とめどなく流れ出て 徐々に地面に染み込んだ

すぐに乾いてなくなつた

青く焦げるような空 白く爆ぜるような空

風が一筋なよなよと吹く

抜け殻は崩れ クシャツと悲しい音がした

そこに誰かがやってきた

ヨタヨタと 一步一步を確かめながら

苦しそうに口を抑え その時その人の体が割れた

ガランゴロン 音を立てて飛び散る破片

私は知った その人が岩であることを

するとなんだか嬉しくなった

その人は 落としたものをかき集め

岩も 砂も 嘔吐も全部 そして私の抜け殻すらも

地面を掘ってしっかりと埋めた

そしてゆっくり立ち上がる

間違いのない足取りの 瞳に強い光がこもる

忘れられた 私の右目が風に舞う

景色は流れ震えていた

今日も私は水風船に針を刺す

熱い痛み能耐えながら

キリスト教への憎しみを募らせる

だが九〇〇頁の約束は固く破れなかった

だが九〇〇頁の良心が痛んだ

握力に自信があったはずだが

いくら引きちぎろうとしても

男は約束を破ることを信条とする

禁止は侵犯し

友は裏切り

約束は破るためにある

破ることのできない約束など約束ではない

……

◆林淳 (25) 大阪府

Penalty

デスクライトの隣に置いてある新約聖書を手に取り

それを破り捨てようとした

一枚岩ではないキリスト教

カトリシズムとエキュメニズムの違いは？

僕は誰と戦えばいい？

柔らかい約束と硬い約束

幅広いペルソナと厚いペルソナ

残念なことに

分からない

脳死しているのは僕だ！助けて神様！

神様！ああ！どうしよう！神様は僕だった！

……

道端で見つけたぼろぼろの雑誌
イヌに遊ばれたぼろぼろの雑誌

壊れそうな

文字の代わりに

意識をかすれさせる

なおも読む

不器用な手で触れる

黒い白水

砂埃

苛立つのは僕のグノーシス

福音書のテクスチャ

……

過ちを

正された時

「全部全く覚えていない」

「言い方が悪い」

「もう文句を言わないでくれ」

と

そう吐き捨てて

実際に嘔吐して

洗い流すのに時間をかけた

神は誤らない

糾弾の無駄

「Penalty」

詩を生み出す僕の

デイスプレイの左端上端に

羽虫は

止まって歩いて飛ぶ

悶えて死ぬ

積雪

人が空を見て歩く大通りだったが

しくしく

ぐすぐす

皆、汚れは黒いのだと気付いた

しくしくと、ぐすぐすと、踏まれて

硬く汚れた雪道

コンクリートに

枯れ枝と濡れた土に

巨大な道路路橋に差し掛かり

黒い塊はなお増す

雪捨て場を見下ろすと

しくしく

ぐすぐす

孤独な雪が私を見上げる

独りぼっちなの、と

根雪も

また降ると

新雪

……

……

……

……

しくしく

ぐすぐす

戦後派の文豪たちが出入りしていた

この印刷工場に

無名の詩人の石碑がある

黒い艶のある石碑

去年は半分も読めなかったが

今日も低いところは読めない

印刷技能士のK氏を取材し

石碑の前を通り過ぎると

また降り直す

トル ママ 読めないといけない

トル

トル

トル

ママ

トルママ

読めるといけない

そのままの

河川敷の

道路橋の

枯れ枝の 土の

コンクリートの

黒ずみに

……

……

……

……

私を

染め

黒色

修正液は使えず
踏みつけられ
硬く汚されて

しくしく

ぐすぐす

しくしく

ぐすぐす

どうして泣いているの？

独りぼっちなの

話し出して泣き出して

ぎゅっと抱きしめられて

また降る

新雪

汚れてしまった現代の詩人は
新雪に傘で書く

イエローでブルーな

クロマトグラフィ

黒色インクの雪

後も

また降ると

校了

太陽の労働

触手を地上に伸ばす

太陽の内部で

そこに運び込まれた奴隷たちは

している肉体労働

手と足を動かして

している核融合

光エネルギーと

熱エネルギーの
生産工場

否

真昼の空には消えたくない

平らな屋根から

見上げる

光エネルギーと

熱エネルギーの

変換作業場

太陽の労働

論点の天使——*Les anges didactiques*
頭の、顔の周りを飛び回る

論点の天使たち

右手の甲を顔の左前から右向きに振り飛ばして

逆を二回して

それでもいなくならない

すぐまた首元に止まる

振り払い、暴れて、白眼を剥いて、脳みそを抱える

光栄だが

策を練ろう

一人、一匹ずつ殺そう、潰そう

だが一匹目が潰せず、他の天使が耳の周りを飛んで

ライトに集るか

殺虫剤は効くか

万策、尽きてくれるな

地を這う蠅とは反対の天使に、打つ手がない

庭から窓隙を通って入って来るような

蠅や羽蟻、蚋、蜂、蛇より何倍も

天使は仰々しい

彼らは、後ろを向いても数匹はいるから

十匹ほどの天使を遣わす神がいる

ことになる

現れるのが神ならまだ

気絶の記号と化したひよこや欠けた星も

傑出した真新しい描写も

この全一者との神学的対面になる

正面から見つめ合う私の右後方少し高めから、対面になる

神ならどれほど増しか

後ろを向いても、後ろの後ろにのさばる

複層的で入り組んでいながら、重要かつ慎重な

論点の天使

Les anges didactiques

が歌う

chantent.

Quoi qu'il advienne, il faut toujours nous aimer.

*Nous sommes pas une fausse chorale. C'est
un meilleur espace que chapelle Sixtine.*

Ne dites jamais « Si, je m'appelle un mystique. »

(翻訳)

是が非でも我らを愛せ

贗物の聖歌隊とは区別せよ

ここは、システイーナ礼拝堂、より望ましい

神秘家と名乗るべからず

◆小林枕 (27) 東京都

沈黙の国

微睡みに、

ぼつかりと、欠落した、

一室、——細切れに、息を吹き返す、

ぼくは、屍体のごと、——いや、

寧ろ、極悪の眼差しを以て

朝の、僅かなる、遅刻に付け入り、

——屍体を、捜している。

——錯覚だ

仄かなる、朝の○・一秒目、
さらさらと、崩れゆく、昨日の屍体。

——錯覚だ。

(世界の、透明さこそが、

遍く、冷酷さなのだ、

優しく、嘯いてみても、

白々と循環する、血液に冒された、

左胸の奥、——赤い心臓が、

やけに、重たい——

「こんにちは、こんにちは。

初めての雨。——ひどくぬるい、

風情も、趣も、何一つ無い雨。

レインコートは、肉体も無しに出掛ける、

踊る。——やがて、雨垂れの跡も摩滅する頃、

元来、頭部を持たぬ生物。

疚しさ、——或いは、玄関の鍵を、閉め忘れ、

黄色信号ばかりの街で、人知れず、鳴らしたかった

のだ、——レインブーツの靴底を。

アスファルトに、腐り落ちる紫陽花の

ごと、――、ぼくは

六月に沈みゆく、――

共同墓地のごと、人気の無い街。

シンクを埋め尽くす、汚れた食器。

（眼差すことで、ふうけいであった、
ぼくは、一体何時まで、

記憶の重みに、耐えられるだろう。

――自販機の側で、十円玉を拾った。
そんな神秘の、一つでさえも、――

バスタブに、かざりと落ちた徒花。

全て混ぜ返し、毛羽立つ水流に、

海を見たのは、――ぼくだ。

瞼を開く、○・一秒前、

そこに、願われることのない、青空
の、通過と同時に、息絶えた今朝の、
臃気な、遅刻のなか、

沈黙の国は、

――その存在を、僅かに赦される。

やがて、目覚めたぼくは、

あらゆる記憶の、重みで拉げる――

六月の果てる、――

シンクに、半分も飲まずに、捨てたコーヒー
が、――渦を巻いて、排水口に吞まれてゆく。

ありふれた朝の、どす黒い液体の

ごと、ぼくは今朝へと到達するのだろう。

バスタブに溜まる、雨水の腐りゆく。

首筋を、焼く筈であった、

生活の、成れの果てに、

亡命したのは、――ぼくだ。

七月、――最高気温、三十九度を記録した某日、

突然に、エアコンが異音を立て、

忽ちに、――泥臭い汚水を、吐瀉した。

ぼくは、濡れたコンセントを、
布を手にも、――静かに、抜いた。

(――やがて、この部屋で熱死するものの、
全てに手向け、――そう、
全て、死に絶える、日々の痕跡、

或いは、――その手触りに過ぎぬのならば、
心臓の位置を、把握せんと触れ回す手の、
悪意でも、良いじゃないか。

そうさ、祈れば、良いじゃないか。

ぼくは、滅びから――滅ばなかった、
今朝から――、日々の、綻びへと、

上手に、上手に、
祈りを、運んでゆけば、良いじゃないか。



(35) 東京都

エヘラエヘラ

独自の振る舞い、エヘラエヘラ

絶対的な懐疑、エヘラエヘラ

エヘラエヘラと自己糾弾

死の原因、空虚な思弁

確固とした生命どこへやら

欲望の奔出、一挙に崩壊、さらし台

エヘラエヘラとくだをまく

死への予測はもう詩いだされた

あらたな緊張たしかにここに

紙の上の記号のように死者は亡霊となる

あちらからこちらからエヘラエヘラ

さまざまな悲鳴が叫ばれる

もうない、いまだない、思い違いをしていた

世界の行き詰まりが呼び起こす

承認と拒否は、さらし台の亡霊まかせ

おのれは、すでに、その、過剰な死の穴のなかへ飛翔する

なんども出会い損ねて、あつめる記号の死骸

すでに、むかしから、つねに、意味の死は居合わせている

エヘラエヘラは、つねにすでに、嗚呼

不在と共に居合わせている、すでに

冗長な停滞、へんてこりんな生命の原理

エヘラエヘラは生きている、その、今の原理

穴の隠蔽、浅薄な有様、つねに

発端には、つねにすでに、その、穴への上昇がひらかれる

穴への上昇、天空への没落、今だからこそ

つねに、今、すでに拠り所は居合わせている

エヘラエヘラは総合への拒否

エヘラエヘラは具体化への非加熱性

エヘラエヘラは飽き飽きしている

我を我が物にすることに退屈している

我をエヘラエヘラは、差し向け、剥き出す

その、剥き出しの先端に真実の正体

今、先端の剥き出しが白日のもとへ顕となる

エヘラエヘラは、死へと先んじている

あらかじめ、すでに、むかしから、もう

その、方向へ、天翔けている

時が熟す、時が熟す、エヘラエヘラ

◆村雨巧夢(67) 大阪府

海辺のレクイエム

少し寒々しい秋の海風

山陰の浜を歩いている

不意を打つかなりの高波

一人旅の僕は

自然の猛威におののく

駅のフォームが見えている

人々が営んでいる生活を

自然は破壊することがある

自然に悪気はない

海沿いに古い家がある

読んだばかりの伊藤野枝の

生家だと妄想する

波の音 風の音 人通りはない

震えるように静まる家並み

野枝の生家は福岡県の海沿いだ

しかし僕は虚妄の物語を作る

さつき浜から見た

ブラットフォームで佇む女は誰？

誰でもいいのにこだわる

自分の心の中が同時に
皆に知られている
そんな妄念の中に旅をしていた
不毛で疲れた若き日のレクイエム

夢の崩壊

熱波の夏に燃えそうな実家の空き家
嘗て平屋の家を木造二階建てに新築した
ときめいた心 既によき家族なんて
まぼろしと化していたのに
僕の中ではこの家は今でも新鮮だ

築四七年 売られ壊される運命の家
庭は草原のようになり木々は破綻に直面
龍が怒るかのような門の松
悠然と控えていた穏やかさはどこに
ただ最後に自由を体現しているのか
家に残る品々は整理が間に合わない
それらの多くがこの暑さに消え入るのか

時は無限にあるという錯覚の生活の中で
享受しきれなかった思い出の品々
父の戦時中アルバムも宙ぶらりんだ

今日も実家へ行こうとした気だるさ
酷暑の天気予報の悪さを理由に 小さな
新居に安らぐ 実家や品々に未練はある
でももういいや 置く場所もない
そして自らの健康不安に沈み込む

◆人間しゅか(32)

停止線

(なぜ、ここで立ち止まるのか)
空ばかり見て目が悪くなった。歩道の樟の葉が生え変わっていることに気づいたのは偶然。という必然の滴り落ちる雨滴にまたねと言った日が幾度もあった。過去。書こうしたそばからそれは嘘となり、隣で寝ている人の顔も上手く描けない。将来について問う。ソウトオクナイミライ。花、咲いているね。
(なぜ、ここで立ち止まるのか)

自分が今ここに存在することに驚いてしまう。確かに私に違いないのだけれど、腑に落ちた瞬間ようやく私は私と出会う。窓辺でハエとハエトリグモが死んでいた。黙殺された密室。窒息し失速する桎梏。夕立にふさわしい空が欲しい。そそくさと逃げ帰る。泥濘を歩くみたいに微睡みの中溶けていく私。

(なぜ、ここで立ち止まるのか)

さて、かえるという行為について考える時が来た。家に帰るにも土に還るにも居場所があつて初めて成り立つのだ。身体の七割が水分であるのみならず、自らを省みず記憶に凭れているからどこへでも行つてしまえるのだろう。夜空には孤独の引力がある。帰り道、惹かれ合う寂しさの周波数。

(なぜ、ここで立ち止まるのか)

◆琴森 戀 (51)

沖繩県

ヌチヌグスージサピラ

沖繩戦で約二十万人もの命が奪われた

生き残つた避難民は 難民となり収容所へ連れられ

数十名の避難民が五メートル四方の狭いテントに収容された

避難民達は米軍からの配給する缶詰で飢えを凌いだ

そのうち石川収容所に 三線を抱えた男*が出没する噂が聞こえた

夜な夜な現われる奇妙な男は 一軒一軒の民家を訪ね叫んだ

「チャーピラサイ(ごめんください)

ヌチヌグスージサピラ(命のお祝いをしましょう)」

だが村人達はみんな家族を亡くしていたので

お祝いをする気になど到底出来ず 男を叱責した

けれど男は怯まず淡々と語った

「戦争で命を拾ったのだから 生き残った者が生き残った者の命のお祝いをして遊びましょう! それに私達生き残った者が

いつまでも泣き暮らしていたら死者達も成仏出来ないでしょう」

怪訝そうな男達も 子を失い泣きはらしていた女達も

両親をいっぺんに亡くした 孤児の子供らも

次第に男の弾く唄三線に励まされ踊り始めていった

村人の悲愴な魂に 再び灯と笑いが舞い戻ってきた

これが沖繩芸能と人々の復興の始まりであった

街を歩けば今でも 国際通りから軽快な音楽が流れてくる

では又六つとセー 昔淋しかった 石川も

今じゃ文化の 花が咲く それもそうじゃないか

小那覇ブーテンテンが 控えているでは ないかいな*

註*男・小那覇 舞天（おなは ぶーてん）沖繩の演劇人・齒科医

註*『石川小唄』・舞天の作を登川誠仁がアレンジした唄から引用

十六日祭（ジュウルクニチー）

ふと墓の前を通りがかると

立派な破風墓はふばかに 人々が集まって拜んでいる

白菊の花とお菓子 隅には

オーグスヤー*オグスヤの抹茶碗が ぼつねんと

海を閉じ込めた様なターコイズブルーの抹茶碗は

堂々とした風格があり

その空間だけ 異彩を放ち空気が変わる様に視えた

再び墓の前を通りがかると

破風墓にまた人々が集まっている

歴を見ると十六日祭ジュウルクニチーだった が

墓前に抹茶碗がない

すると一人の女性が木箱を開け

抹茶碗をそっと墓前に差し出し

茶筌で抹茶を点て始めた

周りの人々も 抹茶を嗜み歓談している

朱色の風鈴ふうりん仏桑華ぶつそうげが ゆらり 風に揺らめいていた

彼方人の魂も ゆらり 風に揺らめいていた

註*・破風墓はふばか・沖繩にある三角形の墓の形式の一種

註*・オーグスヤー・沖繩の緑釉

註*・十六日（ジュウルクニチー）・沖繩で、「あの世の正月」

の意

註*・風鈴ふうりん仏桑華ぶつそうげ・風鈴に似た赤いハイビスカスの花

地下

寝入り端 携帯が けたたましく鳴る

また Jアラートだ

窓外からは サイレンの歪んだような不穏な音がする

TVをつけると ニュースは緊急放送をしている

北朝鮮から沖繩県の方角に発射されたものとみられます！

建物の中 又は 地下に避難して下さい！

アナウンサーの声が不安をそそる

弾道ミサイルは約10分で通り過ぎるのに

これでは逃げる準備をするうちに着弾するかも知れない

「地下」「地下」「地下」「地下」「地下」が思いつかない

一番近くの地下に壕があるが、ハブがいるかも知れない

友人が心配してラインをくれた

早く逃げて！ 地下に！ の文字

気持ちは有難いが 地下の方が危険なんだなあ

先日は新しいショッピングモールが出来るので

土を掘り起こしていたら

不発弾が発見され 近くの住民は避難したばかりだ

上空からミサイル

地下から不発弾 もれなくハブ

一体どんな罰ゲームなのだろう

なんだか隠れるのも嫌になり 窓を開けて空を眺めた

秋の夜空は満天の星座が輝き

朱いアルデバランや碧いプレアデスが明滅していた

註*ハブ・沖縄に生息する夜行性の毒ヘビ

註*アルデバラン・おうし座で最も明るい恒星

註*プレアデス・おうし座の散開星団・和名は昴

◆漣（68） 福井県

Autumn Leaves 遠景・近景

なぜか近づくものはすべて罪人の纏いしている

ひと多く朽ちて夏に入る

（この地上では不幸以外の体液は流さない）

雷鳴がします

（訣れとは言葉をうしなふことですから）

深い霧に包まれたままです

雲がゆつくりと分解し

ものうさに眠るひとはひとり遠景に取り残される

海の匂ひが近いからです

心臓の弱い日が続いています

美しさは喪はれることの代償を願う
尊大なちぶさであるから

ひとは死ぬ

それは目の真実である

(われらが目にするのはいつも他人の死だけである)

わたしは明晰に彼の死を望んだ

罪以上に明晰に

しかり

憎しみだけが真実を明らかにする

ひとの本性は憎しみの純度による

透明な狂気が聖なる夜を踏み外す

わたくしは目を単純な兇器にする

砂漠の臍になり

おれは星を抱いた

記憶とは定義の死である

彼らは明けるまでは夜に待ち続ける
底のないこと
頂のないこと

あなたは越境する鏡である

わたしはいつから語りだすのか

白い森をさ迷つたままです

苦しい夢を見なくなつた分だけ

わたしは恥かしい存在になつた

愛は存在しないとしても

愛のごときものは必要なのです

わたしは骨です

わたしはくたびれました

顕微鏡のように美しい夜でした

空気が痛み 心が震えます

わたしはどこまで遠くなるのだろうか

インクな夜にこはばりし父のからだを拭きをれば天使は速やかに落下する

夜といふ相貌に疑念抱きしままひとりの女を愛することは魂が凍えます

わたくしの祈りの比重少し匂ふ

◆二藤(22) 沖繩県

Iaid

滔々と悠々と淡々とこのうのうと
息を吸って吐くだけの簡単なお仕事
微生物の数だけ存在する死体を
袋に詰めて値札を貼って品定め
その死体の口も多分、愛を語り合っていた

仲は悪くないんです

ただ、話す機会がそんなになくて

ああ、僕が口下手で会話できないだけなんですとは言えずに

意味もなく張る見栄

両親の良心

口に出せば同じ音のそれに期待をしている

無機質に鳴り響くクラックシヨンの

リズムが助けを求めているんじゃないかと勘繰る

それはただの気まぐれで

全員へ通達される不審者情報のメールはスワイプ

まだクラックシヨンは鳴り続けていた

生命生気生憎出生野生再生産生殖生花相生生粹先生
死は死でしかない死の先はない死は死でしかないから
無限ループを繰り返した先にあるのは肉の解体で
今日は、十頭分を解体しなきゃ
群がる蠅を包丁で振り払う冷凍庫
いただきます

アポロ一八号

合わさる手と手から

目に見えない糸が絡みついて

解こうにも毛玉の塊となったそれを
飲み込んで消化されずに
ただ見つめている

目 眼 芽

いつしか芽が出て花が咲いて
多分、君によく似た花

絡まれば絡まるほど大きな花が咲くこと

知らなかったよ、生真面目な僕

(アポロは月に降り立って初めて人のちっぽけさを知った)

好きな曲を君に教えて

それを君が深追いしてさ

僕が死にたいと思っているとか

君を捕まえたいと思っているとか

絡んだ糸の答え合わせを

三分のメロディの中にあるといいね

見 視 実

花が咲いていつしか実が成って

多分、僕によく似た実

僕が見ていたアポロを腹ん中で一緒に

だから、僕によく似たんだよ

(地球の青さは飛び立った者しか知らない)

誰だ、僕を馬鹿にするやつは

好きなものだけを追いかければいいって

確かに、僕の財布には一六円しかなくて

アポロだなんだって夢物語だけどさ

絡まった糸が燃えて

灰になる

種ができていつしか芽が出て

(月面旅行をしなかったな)

パラダイスフィッシュ

歯ブラシにカマキリが居座りついちゃってさ、磨かけないの、
どこから家に来たのかもわからないけど、もしかしたら、網戸
の隙間？そんなバカな、いつもびっつしりと閉めているからそ
んなはずない、なら、玄関から、ベランダから、帰ってきて開
ける一瞬、それとも、家に卵が？いやいや奥さんそんな訳ない
でしょう、家に卵なんてある訳ないでしょう、勘違いも甚だし
い、そもそも私ね、風呂場の洗面台が怖くて、眠る前に洗面台

で歯を磨こうとするじゃない、鏡を見つめていると、後ろに誰かがいる感覚になって幼稚園の頃に引越してきてからずっとそうなの、だから夜用の歯ブラシは台所の食器洗い機の隣に置いてあるの、そこにカマキリがいるのよ、腹は膨れて、今にもハリガネムシが飛び出しそう、台所に来たのは水回りだからかしら、寄生された宿主は泳げもしないのに、揺らめく水面を見た途端、ドーパミンが溢れ出す、ぬめりぬめ、あ、意思もないままに、水面に飛び込む、そこで息なんて出来る筈もなく、そして他人の子どもを産む、寄生されたことに気づかず、仕事から帰ってきたらシンクの中に飛び込んでないかしら、虫の意思なんかね、わかるわけないでしょう、虫じゃないんだから、奥さんうまい！そんなおだても何も出ませんよ、出るのは菓子折と少しばかりの情で、そして！私は奥さんを押し倒すのです、歯ブラシを口の中にねじいれて、唇とくちびるが、寄生されて、乳房から飛び出すハリガネムシ、ああ、そんな！そんなはずじゃあなかった、私はただ、鏡の向こうから覗き込んで、無知な奥さんを見ているだけで、南無南無南無南無、何それ、いやお経唱えてんの、仏教だかキリスト教だか知らないけどさ、虫に宗教なんてあるの、無宗教のままの方が幸せなんじゃない知らんけど、ばあちゃんは台所にヒヌカンおいてるよ、毎日線香焚

いて家族の健康を神様に報告してんだよ、そんで作るばあちゃんのご飯がおいしくてさ、家の台所のヒヌカンは、あまり手入れしてないから塩が固まっちゃってさ、埃ぼいし、火神怒心頭、ああ、なんか、久しぶりに田舎のばあちゃんの声が聴きたくなつたな、奥さん騙していいことないよ、そりゃひとりふたりなら良かったさ、都会の人間は欲に塗れているから、もうそりゃわんさか湧いて出るのよ、忙しいのなんのって、pripripriもしもし？あ、おばあ？久しぶり、元気ね、なんか最近仕事忙しかったんだけどさ、ちょっと息抜きに顔出したいなと思って、本当、おばあのごちそう楽しみにしてるさ、ハイ、奥さん、歯ブラシのカマキリ、シンクの中で死んでましたよ、やっぱハリガネムシいたんですね、可哀想に、そろそろお暇しますか、ハイ、おかしいな、あれ、が、脳を刺激して、

一抹の

冷蔵庫の底に水が溜まって濡らす塗らすフローリングが青カビ生えて底が抜けそう後で拭けばいいやと思っていたら手遅れになったこと学べよいい加減

幼子のときの方が時の早さに怯えていて

朝があまりにも直ぐに来ることが怖くて仕方なかった
できることできないこと

先生が書く黒板の文字の次を思い浮かべて

言いたいことを誰よりも早く気づいてさ

多分、良い子でいたかつたんだろうね、そうじゃなきゃ

そうでしょ、私は母親が知らんぷりで道に捨てたレシートを

拾い上げることなく見なかつたことにする子なの

我が儘なんて言える訳ないよ

うちの子じゃありませんって言われる方がよっぽどさ

だから、ゴミは見なかつたことにすればゴミじゃないし

死んだ鳥なんて隠せば死んだことにはならない

私のせいでもないよ、もちろん君のせいでもない

もつと、希望のある、楽しい話をしようか

そうだな、最近、従兄が結婚してこどもが生まれたんだ

小さくて愛おしくてそりゃ食べたくなるよなるよな

ころころと無償で笑う赤子

他人の幸せを見ると羨ましくなるんだろうな

私にとつとと働いて孫の顔を見せろつてさ

とつとととつとととつとと

とつとつとつとと、と、と、とつ

モールス信号みたいにS O S 出せないかな

とつとつとつ つとつとつと つとつとつと

ごめんごめんさつささとうむからさそんなにおこらないでよ

さつさつさつ つさつさつさつ さつさつさつ

ほら、うまれた

星火の夜

息を吸うように嘘をつく君の

逸らされた目から飛び出す光線は

大気圏を突き抜け宇宙の果ての

火星人を照らす光になるらしいから

私はその嘘をふんわり包んで飲み込んであげるよ

かわいそう、の中に紛れたうそ

ブラックライトで照らせば浮かび上がるのかな

いや、炙り出せば出てくるかも

そんなことしなくても君の目が

あっちこっちでんやわんや

犬の腹を撫でてる方がいいよ、幸せになるし

とつとととつとととつとと

居もしない架空の彼女を作り上げて

デートの話を楽しげに話す君に

「なんで私と一緒にいるんですか」

なんて聞けずに座る助手席で

「これあげる」ともらった詩集が

恋人たちの詩ばかりで泣きそうになる

「うーん、恋愛線がないです」

占いで運命の人が決まればいいですね

そうすればこんなに死にたくなることもないのに

架空の彼女は、現実において

君は毎日ベッドと一緒に寝ている

仲良くパンケーキを食べて夜中にカラオケへ行つて

かわいそう、の中に紛れたうそ

ほんとうのことなんてだれもしりたくないのです

みんな火星に行きたいから

嘘で固められた地球では

呼吸することもままならないから

八〇億人の中のたった一人が書くラブレター

火星を宛先にして

八四円切手を貼って海底ポストに、あれ、九四円だったけ

届く頃には君も私も灰になっているかもね

犬の腹でも撫でながら気長に待つよ

◆ 畠山拓千（80） 栃木県

野の百合

野辺の百合が咲く

ひとつは咲き

そしてひとつは枯れて行く

しかし根元は立派に生きており

つぎの華の用意をする

日々見る夢は落ちながら飛んでいる

白い落下傘の夢が咲く

地上にたどり着けばそこは戦場

虫を殺す事さえ出来ない私が銃を持つている
驚いて銃を投げだすと白い百合の華になる

静かな草原が広がっている

傷病兵

白い幽霊が列車のドアを開け入ってくる

皆さん私はひとつ芸をやる**っ**つもり

どうしてもできなかった人殺しの芸
どうしてもできなかった人助けの芸

幽霊は床にガツクリ膝を突き
見えない手りゆう弾をかざし

あれは夏の日列車の中の出来事

待つ

今日は待った
明日も待たろう

祖母は待った息子の帰りを
送り出す時は歎呼の声 小旗を振り
戻して見送った

小さな駅待ちわびていると
小さな駅の小さな明かりが灯る

明かりはだんだん大きくなり
一帯を照らし出し明かりはだんだん大きくなって
息子の姿になるのか

軍事会社

罪人を集めて罪を犯させるのか
鎖を解き放して新しい鎖につなぎ直すのか

軍事会社は大流行り

軍事会社は大諸け

国の兵士を殺さないため兵士の死者を少なくする見せるため

欺瞞の第一歩

兵士たちは金と無罪の荒野を進む雇われ兵よ

許しは訪れるのだろうか

戦車

ピンクの戦車は行くよ

笑らの夢乗せて

素敏だな

かっこいいピンクの戦車だよ

血ぬられた戦の血ぬられた戦車

請びついて動かなくなった戦車

動かなくなった

独裁者の心凱旋パレードの戦車はいらない

戦車は初めから欲しくない

祈り

祈りのように飛んでいる

あれは水鳥か

波間に漂う影あれは新しい兵器か

つぎつぎ作り出される兵器

人魚のように美しい

頭には核弾頭の王冠が

者は静か祈りに満ちている

戦士の休息

戦士に休息は

あるのか

戦いの日々は続き

戦えと睡魔が誰のための戦か？

誰も教えてくれない

小鳥に聞こうか河の流れに尋ねようか

命令者は耳無し

口無し

ロクデナシ

戦争の世紀

戦が終わっても

地球は戦争だらけあちらでボンボン

こちらでボンボン一体いつになったら

終わりが来るものか宇宙人も

宙戦争の勃発だ地球に住めなくなったら

火星に行けばいいさ火星住めなくなったら

土星に行けばいいさ

宇宙は星だらけ

ある拙裁者の嘆き

お前がもし私の目の前を

飛ばなかったら

決心しなかったろう

後悔というわけではない

口惜しいだけだ

私はいつも勝たなければならぬ

宿命でもあり 決意なのだ

百万人の兵士の死など

問題ではない

世界は私の手の中にある

蠅が飛んだ

◆丁（17） 東京都

御センチな僕らへの無類

雨終わりの空

夕暮れの始まり

ほんのひととき

この感じが好きなのは

自分の弱みを隠すようにできるからだ

ひたすら包み込んでくれる気がしていた

風鈴の音はこんなに優しくあっただろうか

記憶の色が少しずつ変わっているのが分かる

ホームの行き交う橋からの空は

どうしようもない

この忙しい街の道通りはどうしようもない

窮屈なものばかりと孤独が彼を襲う

誰だって同じものがあるのに、みんな違う

でも本当の奥底にあるものはきつと

だからみんな素直に居られたら

どんなにいいだろう

誰もが安らぐ居場所があれば

どれだけの幸せだろう

涙の涙を閉ざしていくのは何故だろう

別に誰がどうかではなくて

ただその中に眠ってる

触れようとしなない理由があまりに窮屈そう
僕は何んだか、また困って、考え込む、

きつと終わりのない不幸の連鎖ばかりが

前進している

ジレンマが知る星の破片

愚問だろうか

あんなメロディーがあつて

こんなにやさしさが転がっていて

それでも悲しいのは何故だろう

破片が散らばると眺めることが精一杯である

あまりにやさしい風が吹くものだから

僕はすこし夜空を見上げてみる

僕はすこし明日を探してみる

悲しみばかりが悲鳴している

そんな風に微笑んではいけない

悲しい夜になってしまうではないから

空は飛べるんだ

だから信じられる

「信じるは幻想に過ぎないわ」

そうかもしれない、けど

そんな幻想をもっていなくちゃ

僕は旅にゆけないな 僕は信じるさ

「憐れな旅人さん」

淋しいけれど

それ以上の淋しさを僕は知っている

罪なき夜空がなんだか心にさわる

「わたしは罪深いわね」

それなら世界は罪人のおうちだ

もう帰ろうか

天気が良いの定義

下を向いて咲く花の

美しさを知っているだろうか

どん底にいるときにだけ知る

美しさを知っているだろうか

自分だけの定義を

抱き締めていてもいいだろうか

アイロニーセンテンス

貴方は今晚も皮肉だ

僅かな絶望さえ一瞬にして粉々してしまう

この絶望だけは大事に抱き締めていたのに

軽く身を任せ時に流していくように

ひとつひとつ並べられた拙い言葉

辿り着く行き場を

思い巡らせたことはあるだろうか

高ぶる鼓動と速まる呼吸に語りかける

何度も何度も語りかける

凝視する先のものに罪なんてない

だからここにしまっておいている

今晚の二律背反なメロディーも賑やかである

それほどの狂気を

持ち合わせているにも関わらず

去り際には分かり合えない笑みを浮かべている

厭いなながらも背を伸ばし相槌を打つ

重く身を任せ時に刻んでいくように

拙く踊り続けている

貴方は明晩も皮肉だ

君は今晚を招いている

エスケープ

いつも通りに靡かないカーテン
隙間から聴こえる日常と太陽の存在
押し潰されてしまいそうな愛ばかりだ
エンディングを迎えたがる朝のため息
そこで頬張るラーメンは最高の宴で
フオークを使うのが僕のスタンスなんだ
麺が胃に行くまでの虚無感に耐えながら
決まって左下に逃れようとするんだ
テーブルの模様を連想してゆく灰色の朝
重い重い服に着替えて心地の悪い靴で這い蹲る
駅のホームは嫌というほど
明るさが灯されている
そのおかげで
ほこりが舞い上がると同時に痛みは増す
揺れる箱の中ではさらに痛みが増す
どんな姿勢もいまいちで眼の位置が定まらない
窓に反射している向こうを凝視して耳を塞ぐ
心の悲鳴はやまない
何億年の中で無限の中で

誰もが息詰まりながら
最期になにが待っているのだろう
誰かが造りあげた人間像や常識で
地球が潤いで満ちているのなら
温めてあげなければならない

地球は故郷

格好つけてしまうから
優しすぎるものだから
僕は戸惑いを隠せない
ちっぽけな世界だ
誰が悲しんでも
地球は廻っていて
何があるかと
何年ごとくらいに地球はアップデートされて
そんな易しい事実があるのに
地球はいつだって
騒がしい日々が替わっている
悲劇の中で生きもがくのも人間だ
花は咲いているから

ゆらゆら生きたいもんだ

小さな故郷に過ぎないのだから

そんな小さな故郷は案外もろくないのだ

僕がへとへとになっても

地球は欠けなかったし

月は鬱陶しいくらいに光っていたし

花はちょこんと咲いているし

雨は降っていたし

人間の温かさも散らばっていたのだ

代償は背負う分だけ幸福を知る

僕は正直にいたいから

おもしろがって世界にしようと思う

◆E (23) 静岡県

ゴミ屋敷と俺

冷蔵庫は今日も閉まらない

ついでに 俺の心に空いた大穴も

塞がらない 塞がらない

ガムテープで押さえていたけれど

最近 太刀打ち出来なくなってきた

不意に開く冷蔵庫

気をつける 気をつける

卵が落ちてきて全滅するぞ

何としてでも 死守するんだ

母さんの頭に ツノが生えちまう前に

冷凍室はくくり罨 身動きなぞとれやしない

一度開けると閉まらないんだ

目先の欲にゃ 負けてはならん

アイスクリームよ アボカドよ 鯖の味噌煮よ

待っている 待っている

今応援を呼んで そっちへ向かっているからな

浴室側 持ち手が取れたぞ 風呂場の折戸

うっかり母さんが閉じきれば ほら

うっかり俺が尻で突けば ほら

全部閉まって 密室だ 牢獄だ

俺は裸のまままで死ぬのか？

そのくせ 時々引つ掛かって

閉まらない 閉まらない

全く気まぐれな奴だな お前は

いや

立って付けの悪い 俺の心もか

階段や床は チリや埃だらけ

見ろ 髪の毛の大海原だ

あちこちで渦を巻いているぞ

ぐるぐる ぐるぐる

俺の頭の中みたいだな

激戦の夏

カツオブシムシやつつけろ

迫り来る虫共に コロコロで応戦するんだ

ゴミの様な部屋で

負けるな俺 頑張れ俺

顔面に襲い掛かってきたって――

脱線続きの人生 俺はサバイバー

絶対に生き残ってやる

家庭という名の戦場で

単騎厭世

家族の中の不良在庫 学校の中の不良在庫

職場の中の不良在庫 女性の中の不良在庫

人類の不良在庫 地球の中の不良在庫

人間のデッドストック

あらゆる人間の売れ残り

はた迷惑な置き土産

それが 私

負の感情を多頭飼育したばかりに

感情の飼育崩壊を起こしている

たむろする赤点の人間性と 目詰まりした暗ぼったい感情を抱

え込み

誰にも気付かれぬまま 独り生命を仕舞うのだ

そのくせ 気まぐれに人の暖かさを求めては
低温やけどして帰ってくる

心のすりガラス越しにちらつく

強炭酸の元気を纏った 君に憧れて

そしてまた

あべこべな世界の中 たった一人で

生き方と逝き方を探し 彷徨っている――

我が人生は その繰り返しだ

角度の付いた優しさ 包み込む様な卑しさ

私の心は

夏休み中放っておいた

絵の具のパレットの様に

整理がつかなくて 小汚い色をしているんだ
きつと

君の眼にはどう映る？

◆有原悠二（37）

奈良県

そんなことよりも

まったくお前は何回言ったら分かるんだ

毎日毎日同じことを言わせやがって

お前と俺は血が繋がってないんだから

朝起きたらおはようやろ

ご飯食べたら自分で片付けし

歯は磨いたか？

今日は雨降るかもしれないから傘持って行き

念のためカギ持ったか

はい、行つてらっしゃい

行つてらっしゃいのチューは？

まったく心配ばっかりかけませんよ

まず帰ったらただいまやろ？

だからママは今日出社だって朝言うたやん

はい靴はそろえる

まずは手洗いとうがいや

リビングにクローラー入れといたから

アイスでも食べたら宿題しときや

俺はこっちで仕事してるから

なんかあったら声かけて

いやそんなに甘えんなよ

俺はお前の本当のパパじゃないんだから

ほらテレビばっか見んとはよご飯食べ

そんなところに味噌汁置いといたら危ないやろ

早く食べて早く寝なまたママに怒られるで

今日はお風呂つかるか？

一緒に散歩行きたいんやったらゴミ捨てるの

手伝ってな

俺はお前の本当のパパじゃないけど

本当のパパ以上のパパのつもりだから

そんなことよりも

お風呂上がりの水は飲んだか？

うん、今日も頑張ったな

毎日毎日口うるさくてごめんな

腹冷えたらあかんからタオルかけとくで

はい、おやすみなさい

白い虹

蒸発のつもりで船に乗ったのは

本当に鬱病だったからなのだろうか

北海道までは約二十三時間

外はあいにく雨が降っており

船内ではヤクザが幅を利かせていた

僕は楽しみだった大浴場も

入れ墨の迫力に負けて

一番安い船底の三等室で一人毛布に包まった

カバンの中の乾パンが音を立て

その晩はまったく眠れなかった

別に働くのが嫌な訳ではなく

同じ結果になるのが嫌なだけだった

工場の夜勤も

倉庫内のピッキングも

荷物を運ぶだけの仕事も

手が荒れて

腰が痛くなって

眠れなくなって

起きられなくなって

新しい病院に通って

蒸発は自殺の代替行為だ

それで構わないとも思っていた

死について僕は寛容だった

明日という概念に日々怯え

将来はある種の脅迫だった

僕は北海道に行つて

なにがしなかったのだろうか

ゲストハウスをただ転々として

金が底をつきかけた頃

夕張で住み込みの仕事があることを知った

寮とは名ばかりの古い一軒家に見知らぬ五人

その中に僕は入り込んだ

朝は日が昇る前に起き

夜は日が沈んだら終わりだった

見渡す限りの大地が僕を監禁した

十一月はもはや冬だった

初めて見る雪虫と

広大な畑の前に悩む暇もなく

冷たく重たい大根をひたすら抜いた

手はいつも真っ赤に腫れた

収穫した大根は葉を切り落とす

そのときつい身まで傷つけてしまい

パートのおばちゃんに売り物になにするんだと怒られてから

僕は逃げることを考えはじめた

どこにも逃げ場などなかったのに

真夜中

外に出て煙草を吹かし

ふと夜空を見上げると

天の川がはっきりと見えた
僕はそこで逃げることを決意した

しかし周囲に駅はなく
歩いては無理そうだった
嘘をつくかどうかどうするか

大根を抜きながら考えていると
周囲がざわめいた

虹が見えた

白い虹が

はじめてだった

心が動いた気がした

もう少し頑張れそうな気がした

日給三千円の日々

そんなある晩

みんなで花火をした

その日は給料日だった

僕はそのお金を大切にカバンにしまった

それからなんとか契約が終わって
車で千歳まで送ってもらおうとき

窓の外から声があった

見るとみんなが花火に火をつけて振っていた
僕はもう少し生きようと思った

父と温泉

湯煙。を構成している極小の科学的水蒸気の一つ一つが宇宙だったと実際の分子をかき分けかき分けしているうちにぼくは知った、父に連れて行ってとせがんだ山間の温泉。の露天のその淵で、根本的な暗闇を包括している夜空に見つめられながら、ぼくたちは裸。だった。

——距離は、問題ではない……

問題は煙のように不透明な心。の機微だったといま思えば思えるのだがそう思うまでもなくさんのことを思ってきたから思うということにいつまでも思われていることがぼくはもう我慢がならなかった、だっただろうか？

（実際に、煙に色はない——）

棘を夢想する湯。の効能に溶けていく脳とそれに付随する妖に

煮詰まった言葉にできない冬と春の披露宴に父はいつになつても姿を見せなかつた、岩。の一部になりたいと思ふほど凝視した岩。に雨でも降ればいいのに、塊、煙の如く空にまで届かない手のひらの声だつたとして、

痺れる境目に

黄昏の余韻が染み込んでいく

回転する背骨だ

少しでも海の香りがするのは

僕たちの家が海の上にあるからだろうか

父は

その背中に

鱗を残したまま

湯の中に沈んでいく

追いかける春

足踏みをそろえた時間が

顔を火照らしていく

夜空に浮かぶ海が

真つ逆さまに落ちてくる

僕たちは息を止めて

死んだ兄弟を迎えに行く

汽笛が鳴つた——酒の向こう側に

不幸せだつた頃の泡に——電車は滑り込んでいく——？

魚。だと思つていた全身で呼吸をするように熱を帯びた細胞の一つ一つが時限爆弾だつた過去、父の人生と自分の人生を重ねたときに現れる差異こそが歴史の結果だと僕は父の背中にある鱗を洗いながら湯の効能を考察する。

「ああ、雨だ」

圧縮された重たい空気。は自身に宿した重力のせいだ徐々に徐々に丸くなってしまふその姿を例えればある銀河だとすると天体はいつだつて手の届かない背中に隠れているのかもしれないとそのときふと思つただけけれど、

「雨、だね」

湯煙。とは別次元のその小さな塊は確かに空から降ってきた一つの宇宙であり、確かに僕たちの体から熱を奪っていくから、

肩、その下を湯の中に避難させたとき、父の人生が溶けだしたのか僕はあふれでる涙。を飲み込んで詩を書いてみようと思つたのだつた――。

◆No.9 (28) 福岡県

エキストラ

詩を読み飛ばす
背筋を伸ばす
あくびを一つ
珈琲を喫する
液晶が光る
瞬きが増える
くたびれる
景色は流れる

私は誰だ？

ここはどこだ？

今はいつだ？

私は何を頼りに歩いてきたのだろうか、男は空を見上げてなんの解決にもならないことを知る。思い出ばかりでは忙しないから男は忘れる。ビル風が服をはためかせる。

流れ行く雲や映画のワンシーン、あるいは芸術的な詩情のイメージ。男は一編の風に無限に近い心の肖像を見るのだ。

地平線の彼方に光はあるか？ 曇天の先に虹はあるか？

ビル風の肖像にどんな光景があるのだろうか。秩序の地平線の彼方で祈る未来は、何を祝福するのだろうか。何を寄る辺に暗い夜を明かすのだろうか。思い出ばかりでは忙しないから男は忘れた。少し忙しくなりすぎたのだとはにかなんだ。

喧騒、雑踏、行き交う人々の暮らし、寄る辺がなくともビル風は男の背中を押した。夢の流れるよりも少し早く男を歩かせた。やはり忙しくなりすぎたのだ。

胸の内、ワンルームの小さな宇宙、都会の孤島で子供が泣い

ている。俺は少し大人になりすぎた。

流れ行く雲

映画のワンシーン

あるいは芸術的な詩情のイメージネーション

立ち止まれ

自分を、おいていかないように

流れ行く雲

映画のワンシーン

あるいは芸術的な詩情のイメージネーション

風が、吹いた。

暮らし

街中

電車

地下街

オフィス

やけにざわめきが耳に滲みる。

光の眩しさに目をしばたかせるように、俺は小さな咳払いをする。内側からざわめきを掻き消すべく喉をつくように咳を吐く。

ついでに、エンジン音みたいに喉を鳴らす。

インスタントな静寂を得た俺の隙間には粗い影が見える。

古いテレビの砂嵐

ブレーキのキィキィ音

虫の裏側

低気圧の息の重さ

粘っこい口腔

ざらつく視線

湿ったインソール

眼球に沈んだ頭痛

鼻詰まりの嗅覚

ああ畜生、鮮明さが随分と遠くにある。

雨うつような生活を終えて、濡れそぼつ気分になって、泥のよう
うに布団に沈む。

ぐるぐると夜が渦巻き迷路のように夜の深くへ誘われる。
書けなかったあの子へのラブレター

行かないうちに灯りの落ちた料理店

昔、夢に燃えていた友人の本音

時効を過ぎた約束の行方

無視をした自分の心情

届かない景色を描いては息が濁る。やけにざわめく胸が滲みる。

換気扇の音が頭痛のように夜を駆け回り、さえない頭に意識は

かりが現れて、煙のように揺れて、消える。

落っこちそうな真夜中にはぶら下がる安心が欲しい。

孤独が欲しかった人肌を、俺は鼻で笑う。

夢も見れないくせに。

虚しさを人の夢で埋めるな。

他人に人生を預けるな。

ああ畜生、頭がざわめいて夢の色彩が遠のく。

とっとと眠らせてくれ。俺を黙らせろ。

春の朝に迷子にならないように。

俺に明日を祈らせてくれ。

病気になって失った

元気だった私の姿を

元気と明るい性格が私の取り柄だった

疲れ知らず病気知らず

私は病気とは無縁だと

病気になって消えた

私の明るい人生計画が

立派な社会人になってすべてを充実させる

仕事に趣味に恋愛に結婚に

文字で埋め尽くされた私の人生計画表

カラフルだった私の人生計画

病気になって知った

人生計画は一瞬で白紙になることを

きつとなにかの勘違いだ

どこかで修正がきくだろう

またすぐに文字で埋め尽くせると

心のどこかで

◆桜咲（23） 愛知県

病気になって

病気になってぶつかった

いつ治るかわからない病気の壁に

検査結果には全く異常がないのに

身体に異常が出ている

線維筋痛症と慢性疲労症候群

私の病は治療法も薬もない

指定難病にもなっていない

病気になって変わった

不便だらけの日常生活へと

私は大量の薬を飲む実験台

一日に限られた時間しか動けない

ほぼ毎日ベッドという狭い空間で

一日の平均睡眠時間十二時間へと

病気になって苦しんだ

昔の自分と今の自分のギャップに

無邪気に走って階段を使っていたあの頃と

車椅子とエレベーターが必要になった今

身体を理由に使ったことがなかった昔
なんで私なの？

病気になって戦った

嫉妬心と自分の存在意義と

走っている人や元気な人を羨む目

視界が曇り人生の幕が閉じかけ

居場所も存在も見えなくなる

病気を抱えてまで生きる意味って？

病気になって襲われた

孤独感と絶望感に

周りは元気に働いて生きている

仕事も人生も周回遅れ

自分を滅茶苦茶に壊したい

そんな衝動と独り葛藤しながら

病気になって減った

やる気と外出意欲が

外出前に体調を崩すリスクを考える

仕事は回復か悪化かのデスゲーム
歩くのは必要最低限で諦めモード
スマホの平均利用時間十時間突破

病気になってできた

自分を見つめなおすことが

私の病の謎は一体？

スマホ依存が役に立つ

ああ涙でスマホが見えないのは困る

笑って自分の個性にしないと

病気になってやめた

無理をすることを

「運動したら治るでしょ？」

「体力ないだけじゃないの？」

「そのくらい我慢しないと」

「我慢」と「無理」の後は寝たきり状態

周りと思う「疲労」とは違うから

病気になって始めた

写真を撮ることを

心が孤独死する恐怖

この世界に居場所を失いそうで

自分の存在をなにかの記憶の中に

相棒のスマホと共に足をゆっくり

カラフルな街へと

病気になって味わった

世間の冷たさを

私は目に見えない激痛と疲労の病気

赤色のヘルプマークは私の必需品

病気を説明してもなかなか理解されない

「ただ怠けているだけでしょ？」

病気になって見えた

昔とは違う視点から見ることで

車椅子から見る世界

お店の陳列棚がまるでスカイツリー

道の幅がなんだか猫の通り道みたい

坂は意外と楽な道ではない

病気になって学んだ

人に寄り添う気持ち

今まで寄り添っているつもりでいた

「大丈夫ですか？」の声が寄り添うではない

「こういう人もいる」と考え工夫すること

これが「寄り添う」ことなのだ

病気になってわかった

人は一人では生きていけないことを

健康な身体を失って改めて

そして気付いた時には

今の自分とこの生活に慣れていた

一時間動いたらインフルエンザのような身体

体調崩したら二日は寝たきり生活

元気な骨に響く骨折のような痛み

こんなの日常茶飯事

体調が良い日なんて一日もない

病気になって忘れた

元気だった私の姿を

温もりの夫婦

時の流れは遅く、瞬きさえ余裕をもらえる

生きて来た道を振り返っても、出会ったことが無かった

とても心地良い空間を持つ

唯一無二の夫婦の存在を

心に障害を持つ私は、本人たちが気付かぬ内に救われていた

私などと話をする相手は限られている

発作が起き、目の前から急に姿を消した人が、何人いただろう

気付いたら一人で

またか…と、悲しき涙と慣れたくない寂しさが、私を暗くして
いった

震えた身体と感じられない目の前の現実

冷めた心を抱え、車椅子に身を委ね

ベッドに寝ている日々

誰か顔を見に来ってくれることは無く

私は、本当の独りを知った

次の日には何事も無かったかのように接しられ
死ぬより辛い人生だと思った

自分を捨てたかった
でも、

貴方たちに会ってから私は前向きになれた

笑顔だから穏やかで

穏やかだから優しく

汚れなき白い心が

何よりも美しい

二人の周りにあるモノからは生きている音が聞こえる

同じ感覚を心に持ち

一枚の窓が間に挟まったのなら

何も言わずに、お互い笑顔で手を振るのだろう

素敵だと思わずにいられない温かさが

見ているだけの二人の空気が

私の冷めた心を回復させてくれた

一体、どれだけ大きな気持ちで受け止めてくれたのだろう

「あのね？ 私、心の病気がなっちゃったんだ」

言っても無駄な事は充分かっている

この言葉だけで関わりを持たない人も沢山いたのに
どうして？

二人だけ何も変わらないのは

私は疲れてしまっていた

世の中から排除されることに

声が聞こえない世界に行きたいと思ったこともある

そんな時、

旦那様は言った

「窓から見える三本の大きな木、ずっと見ているとね？ 会話を
しているんだよ」

目を向けると、風でバラバラに揺れている木々は

急にリズムが揃い、振り子のようになる時間が確かに生まれて
いた

楽しかった

嬉しかった

私の心はワクワクとし、色が染まりはじめた

色々な角度から見える

二人の間にある確かな愛が

とても美しく綺麗だった

旦那様の一步後ろを歩く奥様は

必ず最後まで一緒にいるのだろう

何かあったら許さない

絶対に離れない

お世話をさせてくれないなんて

本当に許さないから、と

幸せという言葉を辞書でひけば

二人だった

いつも味方をしてくれた貴方たちは

心地よくしてくれ

笑顔と安心をくれた

それから本物の笑顔を知り

私は前に進んで行った

この先も生きていける自信がついた

分かった気がする

私が自分のことを口にしたのは

離れないと分かっていたからなのだと

記したい、この美しい経験を

残したい、二人の美しさを

どうか私の事を見ていてほしい

見るたびに

この前会った時よりも

もっと笑顔になっているだろうから

ありがとう

◆北村千絵 (58) Singapore

夜明けの月と星

朝六時に起きて、犬を外に連れ出す

赤道の真上にあるこの国では、朝七時に日の出をして夜七時に日の入りと一年を通して同じ時間帯に朝が来て、夜のとばりが降りる毎日である

真つ暗な中、リードを引いて犬と歩く

あたりにはブーゲンビリアやフランジパニーの花の香りが漂っている

今日は風がある

日の出真近のこの時間帯は常夏の国でも、涼しさを感じることが
ができる

空を見上げると三日月

真つ白に輝きを放ち、そのちょうど横にとても大きな星がいる
足を止めて空を眺めていると、今度は犬に引つ張られる

「いつまでも立ち止まってないで歩いてよ」と言ってるように

歩きだすと犬を散歩させている人に出くわす

おはようの挨拶をする

いつも会うコーギーのボコ

ゴールデンリトリバーのクーパー

そしてシュナウザーのミク

あたりがだんだんと灰白くなってくる

そしてあと15分で7時になる頃、あたりは少しづつ明るくなり、私はまた空を見上げる

三日月は鱗雲の上に位置している

まるで稲荷寿司の上に小さく切ったきゅうりを象つたみたい
に鱗雲はどんどん長く大きくなっていく

そしてその横の星も大きな存在感を醸し出している

あーきれいだ

ずっとずっと見ていたい

この時間がずっと続けばいいのに

でもまた犬に引つ張られる

人々は起き出し世の中が動き出す

どこかの家の誰かが起き出してコーギーを淹れる匂いや朝ごは
んの匂い

そして人々が一日の始まりの準備をする気配が漂い出す

また上を見る

さつきまであんなに真っ白にクリアな光を放っていた三日月は、フェードアウトするように薄くなっている
星はもう見えない

一日の始まり
さあ今日も丁寧に楽しく生きていこう

南国の雨

雨が降っている
南国特有の突然降り出す滝のような雨
アンズリウム、ヘリコニアやジンジャーフラワーが
至る所に咲いていて
ブルメニアの木や椰子の葉とともに風が草花を揺らす

この雨に何度遭遇したことだろう
トロピカルなこの国の雨は濡れても温かい
時々雷が鳴って雨足は一段と強くなる

でもこの雨が草や木の緑を保っているのだ

もうすぐこの国を離れる私
きつといつかこの雨を懐かしく思い出すのだろう

雨に打たれるさまざまな色の木々や植物を雨の匂いとともに
思い出すのだろう

さあ次へ向かって進んで行こう

未来は明るい信じて

◆るりなつよ（46） 茨城県

卒業宣言〜青き時のあなたへ〜

再会を果たしたあの日のあなたは、メロドラマから生まれたあの造語*を知っていたでしょうか。

私はまだ知らなかったけれど、あの造語を体現すべく、世の夫も妻もひっそりと家庭の外に彩りを求めるようになっていた頃。

私は初めての子育てに一心不乱となっていて、夫婦生活にさえ目もくれませんでした。

そこから数年が経ち、視界が広さを取り戻し始めた時、既に夫は子育てを目標とした共同生活者に変化していました。

その頃からでした。意識の奥深くに眠っていた記憶が頭をもたげるようになってきたのは。

二十歳という青き境界線にいた、二歳下のあなたと私が共にしたほんのわずかな時。どこもなくその延長を求めた私と、はねのけたあなた。置き去りという名の陰を宿したまま、私のパーソナリティーは形成されていきました。

あなたへの連絡の術を既に失っていた私は、SNS上に、その存在を探し求めました。恐る恐る名前を検索してみると、そこに顔写真を初めとするあなたの情報が並んでいたのです。天は私の願いを聞き入れてくれた。そう思い、私の心は踊り出しました。物理的にはメッセージを送る事も可能になりました。

それでも、あなたが時々投稿するのを端末から眺めるだけで、送信ボタンがタップされる事はありませんでした。

赤ワインの力を借りて、捨て身の思いであなたへメッセージを送った頃には既に二つの季節が過ぎていました。

二〇年の時を経て、あなたは拍子抜けする程再会を懐かしんでくれて、連絡をためらっていた自分が滑稽に思えた程でした。そこから、オンラインでのやり取りが始まりましたね。

これまでのキャリアや互いの家庭の事、e t c .
幾度かのメッセージを重ね、私はあなたを食事に誘い、あなたも快く応じてくれました。

実は、約束を果たしたあの日の私は子供を保育園に預け、かつ職場には子供が熱を出したと伝え、あなたに会うための道を切り開きました。待ち合わせ場所につながる駅の、動く歩道が白く輝いて見えました。これが自由への道筋なんだと、感慨を覚えたものです。

そして、二〇年振りの再会を果たしましたね。でも、そこには私が求めたあの頃のあなたはいなかった。私の無言の動揺はあなたに伝わり、ぎくしゃくと時間が過ぎていきました。あの頃叶わなかった願いを今度こそ叶えるべく、超自我の制止を振り払ってでも告げようと用意していた台詞も飲み込んだまま、陽の目を見ることはありませんでした。

好機を逸したとも、自ら手離したとも言えるような会瀬。それから、あなたとの連絡は再び途絶えました。

その後は、再会のきっかけとなったSNSからあなたの投稿をこっそり眺めるだけ。投稿へのリアクションも一切しません。でも、言葉を交わすことはなくても、互いが互いの投稿を見ているのを知っている。そんな気がしていました。

互いに全く関連のない内容でも、投稿したタイミングが近かったりすると、無意識レベルでも対話ができみたいで何だか嬉しくなったものです。

形而下での対話が叶わなくなった今、願わくば来世で：なんて思い、神にすがろうとした時期もありました。

でも、目にも見えず、触れ合うこともできないまま、過去との対話だけで余生を送るには、人生の時間はあまりにも膨大でした。

私は手の届かない遠い過去の中で生きるよりも、現実の温もりを手を伸ばすことにしました。最近では、社会的には夫や妻という立場を持つ人を対象として、不可抗力ではなく、確信的に人によっては罪と受け取れる行為を容認、もつと言うと推奨するようなアプリというのがあるんですね。妻ある人と夫ある人が出会うための場。これはもはや世も末なのか、はたまたパラダイムの転換なのか、分かりかねつつも、引き込まれるように

登録をした私は、早速その恩恵を受けました。あなたと同じようにメッセージのやり取りを経て、何人かの、家庭の主でもある男性達と出会い、中には肌を重ねた人もいました。手の届かない遠い過去ではなく、手に取ることができ、今現在のぬくもり。触れ合う経験自体が実に数年振りの事で、たちまち私はこの彩りに満ちた会瀬の虜になりました。この時、私の中の正義が書き変わったのです。

一夫一婦という制度の中の配偶者には、無言の優しさを：

再会を果たしたあの日のあなたは、あの造語を知っていたでしょうか。

私はもう知っています。そう、あの造語を体現することこそが、私にとって、青き時の呪縛から解放される唯一の手段だったのです。

それこそが、あなたからの卒業だったのです。

私は時が許す限り、この手段を行使し続けるでしょう。

いつか肉体が朽ち果て、ここにはない名前と姿で再び出会うその日まで。

*二〇〇二年一月から三月まで毎週木曜日、テレビ朝日系列で放送されていたテレビドラマ『婚外恋愛』から作られた、同名の造語を指す。

脳内セカンド・ラブ

秋の暮れ

横になりながら眺める

SNSのアプリ

メッセージでの対話を経て

熟年ミュージシャンのあなたから

告げられたメッセージ

セカンド・ラブ希望です

はて

かの有名なアイドルの歌を模したそれ

…という年齢でもお互いない

ああ

互いの夫と妻を守りつつ

…ということか

距離が遠いし

返信も遅いですよ

だからこそ、セカンド・ラブ

心の恋人ということ…

顔の見えないあなたに丸め込まれ

始まった

脳内ラブ

対話手段の次のステップ

LINEに送ってくれた

歌う姿を録音した動画

端末越しに知った顔と声は年相応

逢いに行きたいとシミュレーション

車と飛行機とバスを乗り継ぎ

二人を隔てる距離は五〇〇キロ

幼な児は連れていけない
配偶者と布団を並べながら膨らむ風船

いつか逢えた時は
抱いて下さい

昼夜逆転気味のあなたへ

今日という日の締めくくり

たとえ日付が変われども

タップを忘れぬ

送信ボタン

でも

新たな音楽を創造することを生業とするあなたは

連日のLINEというマンネリズムには耐えられなかったのだ
ろうか

日課のようなりズムと速度など必要なく
待ちぼうけのような

セカンド・ラブに相応しい返信

あなたが望んだのはそんなリズムだった

年の暮れ

除夜の鐘の音と共に

今年の事は忘れようと

LINEで交わした

ビールのスタンプ

端末一つで完結した

脳内セカンド・ラブ

効能が切れた家庭の主婦は

その役割を全うすべく

新年へとかけて行く

想い出づくり

勤勉な婚約者との生活の隙間に入り込んだのは
元バンドマンの電話営業トーク

左斜め後ろから耳に入るその声に

私は聴衆の筆頭となった

ずっと聴いていた：

チームが同じになったり

ランチが一緒になったり

少しずつ縮まる距離

オフィスから数日姿を消した席のパソコンに向かって滑り込ま
せた

一通の e-mail

これ

私の携帯メールです

端末を開いたあなたから

程なく受け取る返信

メアドありがとう

そして始まる

二人の交換日記

行きに帰りに通勤電車で

婚約者不在の部屋の中で

スマホに積み重なる

秘密の履歴

会社帰り

初めて二人きりでグラスを傾け

帰り際

路地裏でのキス

帰宅後の熱いメール

次のステップはこの次ね

そのはずが

独り身のあなたへの

不意打ちのようなりストラ

緩やかに緩やかに

あなたの熱をも奪った

につつき持病

とめどなく流れる

婚前の

青い涙

叶わなかった約束の日

かつ入籍一〇日前

予定を埋めるべく

会社帰り

ホテルに呼んだ出張ホスト

頭痛が行為への没頭を妨げ

早々に切り上げた

(ワルイコトハ デキナイモノ)

市役所に届け出を出した数日後

性懲りもなく送る

連休の予定を訪ねるメール

一週間待ちわびた返信によって知った

氷のような門前払い

ベクトルは もう こちらにはない

元 バンドマンだしね…

引き換えに

私は〈悪者〉にはならなかった

(ティセツハ ティセツノママ…)

やがてこの日々は

勤勉な配偶者との生活の中で

ひっそりとした想い出へと形を変えるだろう

交換日記は

今も

スマホの奥底に眠り続ける…

◆齋藤礼（22） 東京都

つまらない人間でごめんね

風呂に浸かって、カビが生えないように必死に磨いた壁に汗が伝うのを見ていた。働き盛りの、つまらない日々、底にある生活。絶え間ない生活を平然と送るのが苦しい日でも、二十二になって手首の傷は情けない。川が流れるような生活を、祈るように生きることの残酷さが脳裏をよぎって、大きな舌打ちをした。世界は一体いつまで続く気なのだろうか？ たくさん年金を払っている気がするけれど、次の世紀末が来るまで、私は生活を途絶えさせてはいけないのだろうか？ 私は、生きてしまったと思うのが嫌なのだ。

どうしようもなく人が憎くて、どうしようもなく自分が愛おし

い日に、歌を歌って、あまりに下手くそで、死のうと思った。おかしな穴が空いた私の身体はまだ若くて、子宮頸がんのワクチンを打つのは国からの一生のお願いだ。人魚に産まれたらよかった。人魚に子宮はないはずだから。蛍光灯の下で身をよじって一人でうなる、小さな小さな抵抗。涙が出るほど憎いこの身体を持って産まれたのに、世界を終わらせることさえ出来ず、涙の染みついた枕はダニの温床で、私はくしゃみが止まらない。せめて生活だけでも壊してやると、ひらひらのカッターでお腹を撫でも、血も赤ちゃんも流れない。極度に乾燥した皮膚は、カッターの形に深く沈んで戻らなくなって、私はアラームをセツトする。

また、生きてしまった。小説と音楽は、呑気な貴方にとつての救いで、私の救いは私だけ。生理が終わったら仕事も辞めて、恋人も家族も捨てて、私、曇り空ばかりの共産主義国に行つて、独裁者になるわ。傷ついた数を数えていたら指が折れちゃった十四歳の私を救うために、核戦争を起こすの。そして、悪魔より魅力的な、死ぬ理由のあの人を殺して、私も死んでみせる。おやすみなさい、明日になったら、どうか、私は私を愛しませようように。

瀬

晴れやかな朝だった。朝露が、むき出しになった斑点が多い二の腕に、好ましげにまとわりつくようだった。二十二歳も、もう終盤であった。朝に珈琲を飲むとお腹を壊すから、私はいつまでも大人になれなかった。ストローを奥歯で噛んで、気休めの刃物を作り出す癖も辞められなかった。ぽっかり穴の空いた身体だけが不自然にぼつぼつと膨らみ、子どもを作りたそうに濡れている。私は痛みが欲しかった。生活を帳消しにするほどの痛みが。グレープフルーツの果汁がついたままの包丁を、産毛の多い腹に押し当てる。乾燥した皮膚がじんわりとへこんで、血は遠く、果てしなく遠く、身を引くような痛みには耐えられず、包丁を離すと、皮膚は人工的な直線で乾燥して窪み、戻ることはない。鳩が通りを飛んで渡る。寝巻きに汗が張り付いて、そつと撫でるようにして、冷えていく。

すっかり忘れていたけれど、私にも自殺を知らなかった日があった。不幸は戦争だけだと思っていた日があった。とうに焦げた心臓の、いちばん苦い部分をすくって、あなたの呑気な口に詰め込んでしまいたい、今はそう、あなたを強く愛している。あの日、初潮のために取っておいた体操服には、とつくにカビ

が生えてしまつて、あなたへの秘密は、たったそれだけ。左腕は先生とセックスをするために作つたためらい傷だけど、シヨーツのシミは醜い自慰の跡だけど、もういつでも子どもを産めるようになつちやつたけど、私のこと、いつまでも愛していてほしい。白人の戦争も、いじめたあの子の夢も、世界中の男から見捨てられる日が来るのも、怖いけど、怖くてこわくて、死んでしまいたいような日もあるけど、それでも、私はあなたに愛されながら生きていきたい。(幸せと不幸せのちがいがわからない代わりに。)

そして夏が終わり、秋が過ぎ去り、停滞した冬が来る。冬が来たら私は一個歳をとつて、二十三歳に、あなたも一個、歳をとる。私はあなたのために卵を一つ多く使うようになり、だんだんと夢を見なくなる(ロックスターに抱かれる夢も)。どうせ世界が終わらないのなら、せめて、冬生まれの私たちと、戦争だらけの地球だけでも、温かく！ 遠くでクラクシオンが鳴つて、あなたの瞳が北の方角を捉える。生活の温度が私たちを貫いて、でも、いつも、たったそれだけ。

◆伊藤Q1則（35）

オートフィクショナル・アンドロイド

人と話すのは虚しい
自分の益になるものを探してその場を愉しむのが、
愉しみのジャンキーとなり刹那に笑う

*

僕はあの娘が美しくあろうとする代わりに醜くあるように努めた

優しさなんかじゃない

美しさを目指す自然は、おなじだけ突き動かしていた
焦りをも含みながら

醜い老人は縞模様のシマウマのように論なく、
本当の醜さとは若年の輝き（？）を圧倒して腐っていくから

存在がじゃまで、いることが不快になる夜、
僕は眠りから醒めると、前日のことを忘れてしまう、

いつも次の日の自分へとメッセージュを書いていた
俺は逃げるためだけに思考が終わるのを願った。
メッセージュは天啓のように従いたいと思わせる。

《お前はツイインタワーに突っ込んだのが、アメリカの象徴への
反逆なんて安いこと言うなよ

そんなんじゃなくて、ただあそこの人の叫びを聴けよ》

*

「俺たちは布団にくるまって思案を練っている奴らとは違うんだ」
一定のバイオリズムでこびり付いた感情に動かされている、
誰かが囁く、
今日は昨日に動かされている

生活の中の旅

かつての朽ちた海沿いに

漁港の老けた肌質に

俺のイヤフォンから流れるYouTubeが
生活から逃れられない言葉を流す

感情のない旅が

俺の中であぐく

哀しみなんてとうの昔になくしたよ

人はだれしも永遠に自画像を描きつづける絵描きだろ？

叙情のゆるされない山陵が
俺の中であぐく

貼りついたコンタクトレンズを剥がす時のような
確かで

不確かな

センセーションは

あなたの口吻

偶像の子孫は禽獣のように遠くまでも飛んでゆく
小さくて脆い少女のように
どこまでもひとり

◆麦家（28）

東京都

いちごのケーキ

あの日ケーキをかってきた

父がケーキをかってきた

くちべたで かいものべたで

たのんだものも ろくにかえず

たべたいものも ろくにおぼえず

母はいつしかあきれていて

兄もとうにあきれていて

そんなひどくにぶい父が

ある日ケーキをかってきた

その日はだれのたんじょうびでも
なんのきねんびでもなかったのに
父がケーキをかってきた
なんでもない日のいちごのケーキ

わたしはそのころ父がいやで

いやでいやでたまらなくて

きたないうるさいめんどうくさい

あつちいけこつち見んな話しかけんな

だけど異様におぼえている

あの日かってきた 父のケーキ

いちごののった さんかくのケーキ

甘いものは好きだった

子どものころから好きだった

毎年わたしの生まれた日には

いちごのケーキをホールでかって
かぞくそろってみんなでたべた
おいしいおいしいってたべた
おいしいものも おいしいものも
おくりものは なおさらすぎ

だけどわたしは

そのころの私は

おなじ顔した父がいやで
いやでいやでたまらなくて
だからケーキもたべたくなくて
あまったケーキを父にあげた
なにもおもうわずなにもいわず
いちごのケーキをちちにあげた

そのときの光景を

わたしは今でも覚えていて
どうしてあの日

ちちはケーキをかってきたのか

どんな思いで仕事をこなし

どんな思いでふとおもいつき

どんな思いで車をはしらせ

どんな思いでケーキをえらび

どんな思いで家路をはしり

どんな思いでただいまをいい

どんなおもいで

わたしにケーキを渡したのか

ちちはじぶんのぶんのケーキはかってこなかった

なぜその日だったか

わたしはいまだにわからないけれど

わたしは今でも覚えている

お風呂から上がったリビングで

わたしののこしたいいちごのケーキを

ひとりたべるちちのせなかを

わたしは今でも覚えている

◆秋月平也（45）

東京都

ひとこと、みこと

言葉を離すべきじゃなかった

届かなければ伝わらない言葉だというのに

アネモネの花ほどの価値があったというのか

ぼくは負けたくない一心で

放り投げた言葉について話せずにいる

雨の散歩道

雨は人を急ぎ立てることがある

21世紀美術館から鈴木大拙館への道程も

街の賑わいとは裏腹に創造のイカロスは飛ばず

雨は人を急ぎ立てることがある

傘を濡らして道をも濡らす

夏の山景

^{みどり}碧を碧^{あお}とも呼べるのは

山並みの万緑が空の青さに溶けて行く

そんな夏の景色の賜物だろうか

熊谷守一が描いた「夏」の思想に

その答えがあったと思う

◆手向ける（18）

東京都

雨天、独り、夏祭り

祭りの空に雨が降る

アスファルトは黒味を増して

雨の匂いがソースの香りと混ざってゆく

雨粒から逃げ惑う人々の声は

かつての恋人との再会は

古本屋で失くした本を見つけた時と似ている

読み返す気なんてないけど

とりあえず背表紙に触れてみる

色褪せた花布に爪をかけてみる

そうそう、こういう感じだったわ

こんなにくたびれてはいなかったけど

買い直す気なんてないけど

とりあえず棚から出してみる

見慣れた表紙を指でなぞってみる

そうそう、スピンは青だったわ

こんなほつれてはいなかったけど

ページをめくる音は

シーツに乾いた踵がこすれる音と似ている

持ち帰る気なんてないけど

しつこく汚れを探してみる

見つけてはそだけ破り捨てたくなる

いやね、シミなんかつけられちゃって

私はさよならだだって言わなかったのに

古本を閉じると左手に痛みが走った

指の腹に鮮血が滲んでいる

赤色が指紋の渦を縦断している

ばかね、引きとめたって無駄よ

運命を信じるほど愚かじゃないもの

つまらない本、と悪態をついて

裏表紙で小指を拭った

雨粒が弾ける音を打ち消した

私は独り立っていて鳥居の下で髪を濡らす

ふと誰かを探していたような気がして

人混みの中で背伸びをするけど

多分探していた人はいなくて

その名前さえ忘れてしまう

雨は激しくなってきた

店じまいを始めた露店でりんご飴を買った

彼は忙しそうにガスの装置を片付けながら

私にニコリと飴をくれた

私はその人工的な甘さを感じながら

傘を持っていたことを思い出して

駅へと歩いた

◆あんのくるみ(37) 埼玉県

古本

かつての恋人との再会は

古本屋で失くした本を見つけた時と似ている

読み返す気なんてないけど

とりあえず背表紙に触れてみる

色褪せた花布に爪をかけてみる

そうそう、こういう感じだったわ

こんなにくたびれてはいなかったけど

買い直す気なんてないけど

とりあえず棚から出してみる

見慣れた表紙を指でなぞってみる

そうそう、スピンは青だったわ

こんなにほつれてはいなかったけど

ページをめくる音は

シーツに乾いた踵がこすれる音と似ている

持ち帰る気なんてないけど

しつこく汚れを探してみる

見つけてはそこだけ破り捨てたくなる

いやね、シミなんかつけられちゃって

私はさよならだって言わなかったのに

古本を閉じると左手に痛みが走った

指の腹に鮮血が滲んでいる

赤色が指紋の渦を縦断している

ばかね、引きとめたって無駄よ

運命を信じるほど愚かじゃないもの

つまらない本、と悪態をついて

裏表紙で小指を拭いた

◆吉田愛香(16) 東京都

湖のある学校

湖の底にいるみたいだ

君の吐いた言葉が木霊してる

響く鼓膜がくすぐったかった

睡蓮が浮いていた、水圧で透明だ

ねえ、廊下の足音よりも確かならそれでいいや

湖の底にいるみたいだ

呼吸の一つが喉に絡んだ

口から出る気泡が綺麗で見惚れていたんだ

言葉って薄情だ、水圧で透明だ

なあ、想い出よりも綺麗なものを探しているんだ

湖の底にいるみたいだ

揺れる月明かりが眩しいんだ

降る光だけ温いと思えた

人生って透明だ、水圧で透明だ

ああ、だれも彼女が見えないのかい？

◆田村悠一郎（24）

京都府

僕なりの戦争と平和

高校二年 夏 原爆の日

彼の地に立っていた 平和記念公園

茹だるような炎天下 蝉時雨 コンクリートの鈍い反射

僅かに吹く風だけを便りに 独りでに足が動いた

正常を生きることに固執して 未だに心が焼けている

馬鹿正直に無表情 電柱に止まった鴉が鳴いている

気持ちがそこに向いていた訳では無い

ただ、確かめたかった そこになにかがあるのか

……なにもない

あるのは 人人人の群れ 鳩鳩鳩の群れ

僅かに磯の香り 途中で買ったフロートは溶けかけていた

僕の心ももう既に弛緩している これはただの幻想だと

ただ蜃気楼を負っているようなものだ

そう、ただの記念碑なのだ 僕にとって

意識の外に碑がある 碑は様々に形を変えて

外敵を排除する 水を飲もうとすると

喉に刺さった棘が突き刺して邪魔をしてくる
本当は意識の内にはなにかあるのか
確かめることもできずに

ただ碑の言うがままに 正常であり続けてきた
めくれない楽譜をそこに置いたままのような
とにかく 欠け落ちたものを捜していた

ぼうっと座り込む僕に低音が響く

十数人の人集り その中心に立っていた

YOH YOHと場違いな電子音にビートを刻む

長い髪をひとくりに右手を前に突き出す

マイクに乗せてラッパは言った

「嗚呼、現実とは虚無のようだ！

嗚呼、私は虚無のようだな！」

茹だるような炎天下 蝉時雨 マイクの鈍い反射

ふらふらと近づく ラッパは空を睨みつけた

言葉を踊らせて 僕が勘違っていたことを

一つ一つ 丁寧に 解錠していく

誰にだって戦争があったのだ
誰にだって平和があったのだ

心からっぽ 僕の言葉はどこにも届かない

浮かぶ花びら すらまだ生まれていない

そんな命のことを考えて どうにかなると思っ
ているのか

だけど歌っていた 訳もなく声を出して

だから歌っていた あらん限りの力を振り絞って

コンクリートに僕の汗が落ちて

真っ黒に染まっていた

◆石川小傘（56） 千葉県

ゆきの

白い部屋

白いカーテンは幾重にも揺れて

雪はちらちらとさつくり敷かれ

人間や動物の小さい足跡を

カーテンをよけながら辿っていく生き物

その後ろを追いかける

木の音の聴診器を持つ人たちが

眠りを忘れて起きては音を聴く

少しづつ だんだんと

気が付かないテンポで大きくなる

ギャロップのリズムに怯え

色んな何かの足跡

血の跡を見つけて嘆き音を聴き

見えないように 慈しみ

誰かに伝えて聴いては狼狽し

そっと柔らかい雪をかける

深夜の木枯らし

小枝のクロスを作りリボンを飾り

もう知らん顔のふりしてまた進む

カーテンは今日も幾重にも揺れて

突風で路の先のさきまで見えては隠れ

目指す

光 ありますようにと祈り 迷い悩む

一枚一枚ひらりとくぐる歩む

しみになる水滴のひとひらの邪気に

気づきもしないで

赤い あかいしづく

青い あおいしづく

黒い くろいしづく

得体の知れないしづくと

ひらひらのドレス

真白の深雪 新雪をすくい

そっとかけて全部埋めて消した

ほっと息をつき

枯れた草の味のする薬を飲む

次のカーテンの向こうへ

染まる雪の色を記録する

小さく変わる何かを ずっと

忘れないように

途中 立ち枯れのあじさいに挨拶

長い間 下を向いていて

雨の日の

あなたの花の冠にも気が付かなかった
いつのまにか

茶色の枯れた細い指が空を指す季節

緑のボンボリを順々に宿す

こんなどんな 楽しい出来事もいつか
さよならがくると知る

皆で笑った小雪の冷たい日

あの動物園のペンギン池の事

ペンギンのふりをして遠くを見つめて

魚を横取りくわえる

すましたゴイサギの目は虚無で

灰色と紺と白のお召し物だと

皆で笑った日の面影

カーテンに映り

得たいの知れない楽しい誰かの
幼生たちは日々ちよこまか舞って

回転しては笑顔になる

全てのカーテンが尽きた後

結晶の形を秘めた

すみれ色の粉を

最後のカーテンの下に

そつとまぶす

淡雪色に反射して

眩しいひかりになった墓標

遠くから新しい誰かを呼ぶ

雪野で

◆水蓮花（13） 東京都

雨天の詩

勉強がはかどらないのは雨のせい。

気分が乗らないのは雨のせい。

液晶画面ばかり見ってしまうのは雨のせい。

こうやって全部なすりつけられてしまう君は嫌なやつ。

草花に滴る露が綺麗なら、雨だつて綺麗なだけにしてほしかったのに。紫陽花が好き。傘が嫌い。ドーム傘は好き。じくじく

悲鳴を上げる私の側頭部。

宿題なんて庭に放り投げられるべき。嗚呼。

安心するもの

やっと家でゲームができる日のひととき。

怖い夢を見たと言えば手を握ってくれた母親の手。

鞆の奥底に眠っていた数学のプリント。

一週間ぶりに登校してくれた友達。

帰宅してギリギリ間に合ったアニメの放送。

今年も吹き飛ばせる誕生日の蝋燭。

それなら、行き場なんて分からないこの涙を誰か流させて。

脅威と白黒

身勝手な白でこの部屋の、私の扉を開かないで。

優しく絆そうとしてるのが見え見えの口振りが怖くて気が狂いそうになる。友達なんていつも表面なのに、外じゃあ反射的に仮面ばかり被ってしまうのに。でも仮面なんてほど綺麗なものじゃない。

そんなの、私だけの場所なんてないことの証明みたいじゃないか。どうせこの人は私の性格なんて知らない

◆一色冬陽（25）

滋賀県

宝石箱からガラクタを探して

なぜだか

私が上手くいつているとき

いつもそのことに気づけないの

視界のすみで揺らぐ水路が

太陽光を透き通って七色に吸い込まれていくこと

名もまだ知らない花が

ふわりと生暖かい風を通してそこに咲いていたことを

そこで慌てよるめき

左足をあげて私はサンダルの底を覗いた

花なんて踏んでない

きつと

いや

あんなに小さかったら踏んだかも

いつかの私を信頼できなくて

その小さな花を

サンダルの裏で踏んでいたら

なんて空想して今の私が焦る

なぜだか

私が上手くいかなかったときに

いつもそこにあつたことに気づくの

小道を曲がった先には

背が熱く

胸が妙に生ぬるく感じる

風と共に

もたついた稲臭い匂いが広がって

白鳥のような鳥が

陽が射した水田の鏡でバレエ踊っていたの

日々を繰り返せばただの景色になるように

旅人はこの景色を

宝物のようにハンカチで包んで

私はガラクタにして宝石箱にしまつてしまつていたの

ガラクタだった木の葉は

宝石箱では緑じゃなかった

日が昇ると太陽光を吸い込んで

真つ赤な花のように表情をかえるから

私が上手くいつてるとき

いつしか踏んでしまつたかもしれない花のことを

水田でバレエを踊る白鳥のような鳥を

花のような真つ赤な木の葉のことを

なぜだか忘れてしまつていて

そそくさ宝石をガラクタに

ガラクタを宝石に

誰かと交換して

わずか残りは宝石箱にしまつてある

探して

宝石箱はあなたの中にあるわ

探して

あなたのガラクタを

◆堀 茉夕（27） 東京都

あんず

雨が降る

会いたい

会いに行く

目を見て

匂いを思い出す

くるくるの髪を好きだと言う

肌寒くてもそのまま出てくればよかったな

かわりに日向ぼつこの約束をして

指折り数える深夜二時

勿体無いと最もらしい顔してみるけど

もつと居ないと駄目とか

言えたら良いのに

本が読めるのはうれしい

てのひらには熱烈なラブレター

恋は相手を知らないからこそ出来るものだと思ったり

外国語では恋も愛も同じだったりして

ふしぎ

呼吸より確かな音が鳴ったの

胸のもつと奥で交わった淡いもの

気のせいかな

それでもいいね

やわらかい陽射しが部屋にとどいて

その指先を温めてくれていればいい

西日がまたくだらないわたしの

覚束無い影をいたずらに伸ばしてる

かさなる日とかさなつた日を空に浮かべたら

川はちゃんとひとつになるし

望むままに月も美しいから

もう一回

初恋がしたいな

スキップ

金木犀

遅れてやって来た青春も終わったみたい
手を振った後の幸せは何色かなあ

もう来るはずのない手紙を待っている

よくあることよ

頭と心は違うんだもの

会えなくなるほど呼吸がみえる

今が一番混ざりあってるなんて

空想と皮肉がひらり

愛は愛でも食べられる愛がいいわ

不毛な感情ほど滑稽で愛らしいでしょ

生きていくなら美味しいものでなくちゃね

誰もが小さな嘘つきだから

本当に私を抱きしめてくれるのは私だけ
背中にだつて両腕は届くから

人も昔話もここに埋めていきます

左様なら

どこかで幸せになつて

あこがれ

夜は妙にあせる

気持ちがあ走ってじれる

追いつかない身体に火をつけてこがす

空虚な指先にまた絆創膏ひとつ

優しい唄が今日はやけに遠いな

浅い記憶をなぞって息を吐くと白い空

ああわたしこんなちっぽけなまま人生が終わると思うと怖くて
堪らないよ

眠れない、許されたい、わたしに

あつという間に過去になる日々をただ生きている

さん、に、いち

幻想が輪郭を持った瞬間

月が青く滲んだ瞳に映した

痛いほどの呼吸をもつて

唯一つこの今だけは忘れないようにと

わたしの潰れた心臓を取り出して

灰色の眼球もどろどろの脳味噌も

きみの何かになればよかった

清々しい日こそ最もその日に相応しいのに

刺した光はわたしの影すら掴んで離してはくれないの

偽りや諂いのない感情が流れ着いたら

吐瀉物さえ赤子に変わると信じていても

もらったものが次から次へと指の間をすり抜けていってしまふ

砂時計は止まらない、止めたくない、止めては駄目だ

そうなたらわたしはわたしを憎むでしょう

抱きしめてあげられなくてごめんさい

歪でもどうにかして愛してあげたかったな

だからここはきつといつまでも

朝にあこがれる夜

◆桑島明大（30） 東京都

岬

きみの

とがらせた唇が ぼくの

あたらしい岬だ

つんと

とがらせた唇が ぼくの

なくしてしまつたさまざまを歌う

朝の光にうたれる ぼくは

心もとない一羽の蝶だ

永いはるかな旅を終え

狂おしくただよう舟歌の

リズムにのつて

鱗粉がたつ

ぼくの舟は

星あかりの夜の波濤に

粉々にくだかれてしまった

岬におとずれる

あたらしい季節が ぼくの

さまざまをあきらめさせたから

まだぎこちない足どりで

歩いてゆくことにしたよ

この岬を訪れる

いくつもの季節を

だからきみの

月あかりに磨かれた

まっすぐな刃のような唇で

この錆びついた二つの羽を

切り裂いてくれ

きみのとがらせた唇に

ぼくは

永遠のありかを知る

◆小谷松かや（65） 東京都

中庭で

桐の花か散っていた

ひとは思いおもいに

通用品に吸い込まれていった

もう四十年も立っている

無骨な建造物のそばに

桐の花が咲く

癒されて帰ったひとも

そうでないひとも桐の花を

見た筈だ

季節になれば中庭広場へ

ジャグリングの道化師も来たし

ミュージカルメドレーを歌う歌手もきて

身体をゆらして一緒に楽しんだ

なんの縁でしょう

わたしがあなたになり

あなたがわたしになっても

大した違いがなかった

車椅子を押したり

額の汗を拭ったり

とても気持ちのよい木陰に

爪ピアノをはじくと

中庭に

永遠の空が降りてきた

月日が飛ぶように去り

わたしは退くのだ

わたしの代わりとなる若者が

メタセコイアの巨木を見あげている

君はこの世界にしばらく留まり

無類に笑顔がよろしい君が

祈れば叶うことばかりと信じてほしい

さようなら

尽くしておくれ

夏死^{げし}

季節は巡る。

移り変わっていくのか、死んでいくのか、

どちらにせよ、想像に過ぎない。

季節は何も考えていないだろう。

そもそも季節なんて概念すらおかしいのかもしれない。

けれど、そんなものすらあると

そう思っ生きてることが、いや、生きている。

じわじわと蝕んでくる夏の残骸。

夏に至り、はて、どれ程か。

もう、今年の夏は成してきたではないか。

文句を垂れてはみるが、確実に、衰弱していく夏。

死、至、死、至、……。

循環というべきか、蓄積というべきか。

死んだ季節の残骸を重ねて、

気付けば同じように、

時が過ぎていく。

◆榛あお(19) 岡山県

残骸は時に美化され、時に醜化される。
創造する。否、される。

残骸の元の形、そんなものは存在しない。し得ない。
ただ、創造される。

創造に、はたまた創造が重ねられる。
創造が破壊される。改造される。

新たな創造に。

概念は、記憶は、創造されたものだ。

それは 臍気で、脆くて、

執着的で、創造的で。

追憶でさえも。

実体のない全ては。

海馬に眠る全てが、否、感じるもの全ては。

◆ナチ (23) 東京都

もしも話

もし この世界に私一人だけなら

スクランブル交差点の真ん中で

大の字になって寝転んでやるし

そこら中の横断歩道をノート代わりにして
詩を綴ってやるし

信号機にぶら下がって

大きな声で世の中に対するあれやこれやを叫んでやる

もし この世界に私一人だけなら

何だってできるよ 何だって

きつと 自由に生きられるよ

◆幸地チカソ (36)

沖縄県
セピア

遠くに落ちる

セピアの空

砂粒あろう

指のあいだ

時間のない

色のない

呼吸のない

合間に溶ける

平たい陽

木も砂も肌も波も

みな同じ

ほほえみが

静止する

◆たんぼぼ（13）

群馬県

空の色

空って何色なんだろう

大の字に寝そべって

冬の鋭くてどこか中毒性のある空気を

ぎゅーっと吸い込んだ

久しぶりに来た公園は

前とは違う花が植っていて

遊具も違う色に塗られていて

おまけに芝生もさっぱり刈られていた

空は青色

なんだか知らないけど

気がついたら知っていた

だから、

幼稚園では青いクレヨンで塗ったし

小学校では水色の絵の具で描いた

でも、

中学生になった私はあまのじゃくだったから

そんなんわかんないじゃないって言って

めちゃくちゃな色で

私の好きなように染め上げた

私だけの空

いろんな色がちや混ぜだし

こんなのぜつたいふつうじゃないけど

こういうのも悪くなかった

幼稚園の頃から会っていないあの頃の親友は

今どこにいるかな

小学三年生の時に転校したあの子は
今も給食早食いしてるかな

ふふ、

あは、

わはははっ、

私は

一生こうやって馬鹿みたいに

空の色を考えていられる人でいたい

◆ナツメナギ（38） 北海道

ピーターパン

タマゴボーロをサクサクと噛み砕いて

その甘さで得られるノスタルジーも3粒まで

サンタクロースはいないんだぜ

ファンタステイック ドヤ顔

ゴリゴリとミントタブレットを擦り潰して

あら、クマさんご機嫌よう

鏡よ鏡、この世で一番、のは、誰？

ランランラー

育成不良のもやしは

フィジカル強めなアイツを妬んでるよ

羨むのは得意だけど

欲しがるのは難しいな

努力とかは、知らないな

誰も褒めてくれないもん

たまごボーロ

対象年齢って何歳まで？

もうおいしくないな

なにしゃぶってればいい？

タバコは高いしな

もう空、勝手に飛んじやおうか

ティンカー・ベル間に合わないかも

なんてね。怖いのにやだよ

布団でねんねしようか

甘えてんなあ

甘えないなあ

だけどママもパパももういないんだぜ

プレバライト

プレバライトを砕くくらいは

容易さで

この退屈を甘やかしたいのです

過不足のない窓の内は

弛緩しきって

程良くぬくいので

脆弱な生き物の

自尊心だけが

スカスカと育っていきます

その虚を飢えとして

そこを満たすのは

痛くないドラマチックが良いのでしょうか

でも

そうじゃない

だけど

あの美しさはもう戻らないので

過ぎてから気付くものなので

きらきらとこぼれる細かな破片が

チリリと刺さる

◆回避（17） 東京都

死にたいが許されるのはどんなひとだろう。

不老不死の人？

永遠性はその果てしなさ故に手放すことが許されるの？

だから、永遠の愛を詠ったのに捨てる人が多いんだろうか。

きつと、永遠の愛は時間的な果てしなさではなくて、その一瞬に永遠という果てしなさの重みがかけられるのじゃないかな。

㉔。

紫陽花の 匂いのように

英語の騎士の Kのように

揺蕩う海月の 意思のように

㉕。

「もう少し早くきみと出会えてたらなあ。」

「もし今よりも早く出会っていたら君の好きな僕はいないよ」

「どんなきみでも好きだよ」

「それ、顔だけってこと？」

㉖。

帰り道が、一生赤信号だったらいいのに。

朝日を、自分の部屋でだけ浴びることができたらいいのに。

㉗。

いつもは下りな上り坂を、宇宙飛行士のA12を装って。

このときの宇宙飛行士は天王星にだっていけるんだ。

嘘じゃないよ未来じゃないただだよ過去の夢を嘘へと消化した
過去は喉元通らず頭を回って心を量る量りからは逃げられない
けど海底へ潜れば軽くなったかのように、錯覚。

小さい頃の目標は、月に降り立つこと。

今の夢は、天王星に降り立つこと。

◆河原ほか 鹿兒島県

雪道

ツンと寒さは際立つ

それは美しき絵画の美女のようであり

肌の白い雪ん子を思わせる

寒さは私の心を震わせる

度し難い歓喜と這い寄る恐怖に

ひとりぼっちの感覚が蘇り

何処かの深淵を覗いている気がするのだ

冷たい拍子で淡々と語る

掌の雪のようにスツと溶ける

だがそれはいつまでも心を凍らせる

雪解けなんかないと

あの永久凍土を思い起こさせる

飄々とした風がふく

白と灰色のコントラストが目刺激を与える

瞬きすらできない

目を逸せない

一瞬の出来事ではあるけれど

息が空に溶けていく

やかんのピョーっとした音が聞こえそうな唇に

雪の口付けが授けられた

優しい口付けだが

赤い鼻と顔隠し

寂しがる抱擁を跳ね除けた

ザクザクなんて生温い

ガスガスとした軍靴のような音を鳴らす

音だけは立派だが

秩序がない一人だけの隊列の

腑抜けた軍靴は寒空に響く

温もりを探して

温もりはどこだろう

白く寂しい道がどこまでもあるだけだ

◆月辺達矢 千葉県

正六角形のブランク

大気から太陽の匂いが消えた頃

僕に馴染みのない駅の改札から君は下りてくる

でも、君の表情や服装はあの頃のまんまだね

淡い系統の服に、目を薄くするような笑顔

それを見て、僕の中の過去と今が激しくつながりだす

そんな空白なんてなかったかのように

当時は毎日会っていたのに

死ぬまでに君とはあと半年間しか会わないんだね

だから僕は綺麗な空白を作りたい

ハチの巣のような綺麗な空白を

過去と今と未来を強固に繋ぐ正六角形の空白を

そしてお互いの経験をその六角形の中にしまいな

飛び回ろう

今日が終われば、次の120。のカーブまでさよならだね

それまでにおいしい蜜を探しておくことにするよ

◆清水らくは(43) 熊本県

傷口の私

私の傷口から生まれたもう一人の私が、私の体に乗っ取っていた。もがこうにも、抗おうにも、今の私には体がない。必死にしがみついて、見失わないようにする。知ってはいたのだ。いくつもの私が、零れ落ちることを。どこかに落ちて、崩れて、なくなっていくのだと思っていた。しかしもう一人の私は、強く私を押しつけた。白く輝いていた。赤い血を流しながら。

もう一人の私は歩いてきた。かつて私が向かおうとしたところへ。この、ほんとうの私が手に入れてきた、美しいものすべてを捨てて。私の外装は、私でなくなっていく。もう一人の私は、こちらを見てにやりと笑う。振り落とそうとすればいいのに。私も消えてしまえるのに。私は私でいなければならないと思ってきた。

私の体はどんどん白くなって、姿を変えていく。私の知らない

私。いや、知っている。私はこうなりたいと夢想していた。傷つきながらも前に進むような、私。けれども、そうならないと決めて、諦めて、苦しんで、苦しんだ振りをして生きてきたのだ。何人もの私を打ち捨てて。けれども、私は今、この私自身を諦めようとしている。

私は、傷口だったのかもしれない。体の内と外の非常口。もう一人の私は涙を流して、涙の中に消えていった。私は私の体を取り戻す。後ろへと進む。かさぶたの中に記憶をしまおう。

◆月野シトロルネ（38） 広島県

AI

愛により

張りぼての世界は加速する

空っぽな地球はこの上で

張り子の芸術が踊る

コピーを抱き締めてきた

コピーを抱き締めてきて人々は

その偏愛の想れきしい出の先

極上のランダムミックスで

オリジナリティーの夢を見る

愛により

張りぼての世界は加速する

好きな顔で好きな声

張り子の芸術が踊る

コピーを抱き締めてきた

コピーを抱き締めてきて人々は

その偏愛の想い出の先

極上のランダムミックスで

アイデンティティーの夢を見る

手向けの歌

白、

赤、

黒。

「何も聴こえない。」

聴きたい唄がない

歌いたい唄もない

何も聴きたくない。

「こんなにも。」

人の声は欲しいのに

雨が降ると何時も

貴方は寂しいと泣くから

水音が暗闇を埋める日は

私まで不安になる

「信号を見逃していたらどうしよう。」

ねえ、

誰が綺麗に見えても

誰が強く見えても

貴方が傷つく事ないんだよ

「結局独りだ。」と

堕ちていくのは容易いね

自ら絶望を手取る貴方に

何もしてあげられなかった

ねえ、

だけど聴いて

貴方が理由も分からず寂しくなる日にも

私は簡単に崩れたりしない

死んだりしないよ

だからもう謝らなくていい

困った人だねと笑うから

雨の日の貴方が安心して甘えられるように
雨の日の貴方が安心して眠れるように

私は

私はもつと。

ねえ、

そうしたらまた

「一緒に居て。」と

声が聴きたくなつたと言ってくれる？

罵声でも弱音でもなんでもいい

貴方の声が欲しい

月

あの月に浮かぶ彫りの深い男が言う事には

「若い女のナルシズムが目余る」

あの月に浮かぶ恥ずかしがり屋の鬼が言う事には
「皮一枚の美醜が少女の自尊心を奪う」

売れ筋Z〇〇の靴を欲しがる気持ちは想像もつかない
定番など定着しようが剥がれようが興味もない
流れ造られるスタイルに服従のポーズ

個人をこの世界用にカスタマイズするくらいなら

いっそ子供の遊び心でデタラメな幻想をばら撒こう

「何でもありだろう」

あの臆病で控えめな満月の言う事には

「裏側に聳く無数の傷はわたくしの歴史。照らされてやつと形
になる」

あの貪欲で率直な三日月の言う事には

「磨かれていく感性と理想に表現が追いつかない。だからいつ
でも僕は不満なんだ」

安易なジャンクに囲まれて悦に浸るなど寒気のある収集癖
それでもガラクタの傷一つ一つまで確かに愛している正当な矛
盾

お気に入りのブランドの歩く看板などなりたくはない
既製の量販物を妥協して消費するのはほどほど辛い

存在する物しか存在しない

狂おしく愛しく物足りない哀しさ

存在する物しか存在しない

現存する不完全さを改め想像しよう

あの具体的で自信家な新月の言う事には

「よく見て、聴いて、この先の空を想像し続けている。だから
いつでも僕は新しいんだ」

それらしい文句も意味も

華々しい演出も宣伝も

必然と見紛う新鮮さも

生み出す事の痛みも

移りゆくこの空に仕掛けられる無数の箱

祭りも祝いも文化も

自作の包装に添える唯ひとことの伝言も

必然と見つける温かさも

守り通す事の痛みも

移りゆくこの空に贈られる無数の箱

◆紗奈さより (31) 神奈川県

あなたのために

主よ わたしの魂はあなたを慕い求めています。

人はだれに詩をささげることができでしよう。

無いものにささげることができません。

見えるものは消え去ります。

目に見えない在るかたにささげます。

在るかたは あなたのほかにありません。

ただあなたがあるのみ。

だからあなたはわたしを引き寄せ

結びつけてくださいました。

あなたのいのちに わたしがあずかるために。

永遠にたえない いのちに。

この世のものは過ぎ去ります。

見映えのする物 便利な暮らしは

人の心を満たしません。

人の心は愛を求めて さまよいます。

わたしたちの天の父

御子イエスキリスト

キリストをとおして与えられた聖霊

あなただけがわたしたちを満たします。

信じて祈る者に あなたは聖霊を注ぎます。

聖霊の助けがなければ わたしたちは悟れません。

霊である神のことは人にはわからないからです。

高ぶる者は退けられます。

水は低いほうへと流れます。

わたしの内から混ざりものを取りのぞいてください。

わたしを精錬し 純粹にしてください。

わたしの霊は あなたとひとつとされました。

つねにあなたから心離れず

すこやかに成長しますように。

ゆたかに愛することができますように。

いちばん低いところで人に仕えておられる

あなたのところに帰ります。

すべてのものの上におられるあなたを仰ぎ

ひれふします。

あなたは わたしを愛の両腕で抱き寄せてくださいます。

わたしは涙します。

なんとあたたかいのでしょうか！

見える物には与えることのできない 喜び。

人にはつくることのできない 安らぎ。

よいものすべては あなたからのもの。

人にとっては苦しい時も

愛される者にとっては贈りもの。

その人は あなたの心を知るようになります。

すべての栄光はあなたに帰り

あなたの御名だけが賛美されますように。

どうしてわたしはこの祈りのことばを送り出すのでしょうか。

わたしは主がなさることを そのまま行いたい。そのようにな
りますように。

主がなさることは人の理解を超えています。

わたしが信頼して従うことができますように。

天地をつくり すべての人をつくられたかたに。

わたしのやりかたではなく あなたの行われることに忠実に従
えますように。

これを読むかたに恵みが注がれますように。

◆どろぶね(42) 神奈川県

アミ目

二十年の編み目の差分を

遠く遠く遠く

さかさまになった道で

掬いとる

陽のなか

雨のなか

土のなかを

境いのない

目のなかに宇宙をみる

あみめのさぶん

在りし日の紫陽花

かかしのほつれに包まれる

◆横道逸太郎（31） 東京都

耳の裏の赤い砂

目の前に広がる、空虚な人生の水平線。

広漠とした風景から目を逸らして、耳の裏をポリポリひっかいた。

かき終えた指先を見ると、爪と肉の間に、赤い砂が挟まっている。

血液が固まったもの、ではない。

砂のようななか少量の血で赤く染められ、また別のなにかによって多少の油つけを得たなにか。

こんな名前のないものが、自分の耳の裏に潜んでいたとは知らなかった。

それは少しだけ、土産物屋でかわいらしい小ビンに詰められて売られている、星の砂に似ていた。

星の砂は海岸でとれる。

俺の耳の裏には海があるのか？

星の砂は、死んだ有孔虫の殻の残骸らしい。

俺の耳の裏にある海岸に流れ着いた赤い砂は、いったいなんの死骸なんだ？

赤い砂も空虚な人生も、答えを返す気配はない。

もう一度耳の裏をかいてみたが、爪の間にはなにも残らなかった。

あの日から、赤い砂を一度も見ていない。

◆早水たき（25） 東京都

ひがんばな

このきびしい北風の世界で

ひとり またひとり

お前でさえもついにいなくなってしまうのか

あの日私たちは鬱蒼とした森を駆け巡り

深淵の土地に踏みいる船に乗ったのだ

私は散りばめられた星に虜になり フレームを向け

船が傾きゆくことに気がつかなかった

私にとっての見上げる星々は

お前にとって故郷の鐘のように夜更けを知らせる時報のようなものだった

若く、憧れなんていらな

私たちは常に得体のしれないものに怒り 泣き 火元を探し

「明日」よりも自分達の方が確か

向こう傷から出る血は

火花でできた勲章だった

夏の果てにお前の糸が切れてしまったと聞いた日

私は北の国の入り組んだ海岸にいて

女という異端としてひとり

打ちひしがれていた

燃えることも

燃え尽きることも忘れてしまったお前は

「東京を絶つ直前、初めて彼岸花を見た」

と言ったね

あたりを見渡すと、私のいる北の国でも

一面に、周りの緑と一切調和しない

まがまがしい赤を放つ彼岸花がそこに！

虎視眈々と私の血を吸おうと待ち構える虻よりも

その花はずっと美しく可憐に

「あきらめ」を知らせる花として

私に死を告げようとしていた

お前がいなくなった世界で

私はその花にさえ

火をつけなければならなかった

花などいつくしまなかつたお前がこれから

花との記憶に抱かれる世界を見られればいいと思う

わたしは彼岸花を燃やし、燃え、その火に埋もれながら

これからのつめたい北風に耐えうる

船を作ろうと思う

◆松田佐登美（80） 埼玉県

あの空の向こう

夕日が美しい

あの空の向こうに 父と母が いるのだろうか

あいたい

一緒に 冬桜を見に行つた時

あれから何年が過ぎたのだろうか

今年も 同じ日に 来てみた

やはり 夕日は美しく あの時と同じで

何も変わっていない

小さくて ひかえめで ちよつぱり さびしげに咲いている冬
桜は

あの日と同じだ

でも 父と母は もういない

あいたい

夕日も 冬桜も 何も変わっていないのに

父と母だけが いない

どうしてなのだろうか

何も変わっていないのだから

父と母が いたって いいじゃないか

こうして自然は変わらないのに

大切な人は 一人 また一人と この世から去って行ってしま

う

やがて自分も この世を去る時が やってくるのだろう

そして 今 美しい夕日が沈もうとしている

◆佐伯凜(21) 千葉県

牡丹と桜

真つ白な雪に咲く 一輪の花は、牡丹

私の口から吐き出された

真つ赤な 真つ赤なその牡丹は

私を蝕む病の証左

北風が肌を刺し

猫の瞳 あやしく照らす冬の夜は

近々私にある幻想を抱かせる

あなたと共に

桜散る木の下でおしゃべり

この世の優しさの一切を丸め込んだ

あの時間は

今年も、訪れる

枯れゆく花のように

死にゆく私

枯れゆく花の美しさと

死にゆく私の美しさ

枯れゆく花の寂しさが

死にゆく私の寂しさで

枯れゆく花の悲しみは

死にゆく私の悲しみだった

枯れゆく私は

真つ白な雪の中 真つ赤な牡丹の花咲かせ

あなたがひとり 桜の花を眺める春

◆相馬 実(27) 大分県

本棚のある部屋

昨日は自分で本を買った、

母親が朝8時にマルシェで果物を買うように。

それ以来、私の本棚は

裏庭の木のように大きくなった、

水は外の雨だけで、

時々、窓ガラスに当たる、それは私の心の外側。

日に日に、机の明かりで、壁はその暗さを増す。

緑色の苔はかさぶたのように覆いかぶさる。

私は

読む本を選び、

果物を食べる、

よく挽かれたコーヒー豆は

雨に濡れて、質の良い肥やしになる。

この本棚で、私は木を作る、

そして父が少年の頃の森を、

地上の樂園を。

十一月の悲しみ

外の風は秋の葉を締め付け

血の滴のように見えてくる

その血は私のものがむしやらかな太陽のもの

風が木を打ち付ける間

サアー サアー(かなし かなし)と繰り返す

私はこのねじれた心が

いたずら好きなつむじ風が

あなたの噂を

忘れられた痛みを

もう長くあつていない人々についての

良い知らせを

囁くのを感じ取る そのどれも
私がいまいるところにも 昔いたところにも戻らない

かなしばり

陸に

打ち上げられた

巨大な魚

銀色の鉄 刃物も貫けない

その魚体が

うろたえもだえ 帰ろうと

覚醒を探すも

死は

他人のふりした冷たい波

目の前は海

光は

鱗を削がれた魚たちの

執念

ああかなし かなしばり
この硬い体にしか伝わらぬ

死の痛み

この眠りの麻痺に

夢現さえも失う

◆あさとよしや（41） 沖繩県

決意

飛雁の旋回

野次を飛ばして高く喰い

街路樹のガジュマルの厭な根が

アスファルトを砕き拡張している

その描写に何を関連付けるか

阿呆のわたくしは死んで

もつと阿呆に産まれるかも識れず

死ぬに死に切れん

金毘羅橋の欄干にて

水捌けの悪いコインランドリーから
流れ出る洗濯污水の臭いが漂うて
新年の挨拶を

もう何年も

親類たちにしていないことを
想起させ 死ぬに死に切れん
チタン瓦斯を肴に酒を呷る

阿呆のわたくし 死んだら

きつともつと阿呆に産まれるか

或いは畜生に転生するかも識れず

やだもう 歩くと嫌なことばかり

考えてしまう 話す相手がいないと

ソクラテスのようにはいかないのだ

金毘羅橋の欄干に立てるわたくし

ラテン語でひとつ

試作でもしてみようか

世界を歩きまわって学んだ

いにしえの大学生になるのだ

ではまず

ラテン語からはじめよう

金毘羅橋の欄干に立てるわたくし

ソクラテスと肩を並べて語り歩
くにしえの大学生になるのだ

覗きたい闇

永遠に照り付ける強い日差しの中

眩暈がするほどの強い日差しの中

日差しが強ければ強いほど

そこに出来る影は濃くなる

あの岩場に落ちた影をじっくり見てみろよ

真っ黒だろう あんなに黒いんだ

そこに何があつたかなんて

もう分らないほどの黒い闇が出来るんだ

それでも目を凝らすんだ

日差しにヤラれて真っ白になる視界

その目を凝らして 黒い闇を見つめると

何か見えてくるだろう 何か感じるだろう

そうさ 僕たちはその真っ黒い闇の中をさ

その中を何千年も生きてきたんだ

その闇の中で

泣いたり笑ったり

貝を穿り船に乗って魚を釣ったり

釣った魚を焼いて食べたりしていた

そして僕たちはようやくと始めたんだ

僕たちはその闇に光を照らして覗くん

それは何故か

それはつまり分かりたいんだ

何千年も前の僕たちのことを分かりたいんだ

今を生きてる僕たちと地続きの

何千年も前の僕たちと手をつなぐために

僕たちは真っ黒い闇に光を照らして覗くん

それはソウゾウする ノラしごと

月光をして汝の逍遙を照らさしめ、山谷の風をしてほしいままに汝を吹かしめよ

「あんた、だって泣いてる！ うわ——、うわ——」

朝が来て、洗面所で顔を洗う度に

眠気と一緒に流れ去る夢の記憶のように

さつきまで見ていた夢の記憶のように

流れ去ってゆくものを

掌で囲って排水口に吸い込まれていく

水を食い止めるようにように

流れ去ってゆくものを食い止める

もしも新しい頭の世界が

みのむしのように

輪ゴムで出てきていたら

あかりのなかで色に美しく

輪ゴムの反動で あなたは

またここへ戻ってくる

「われわれのチーズはどこへきえた？」

「ノラしごとはたのしいかね？」

ななつのしゅうかん、ひとをうごかすゆめをかなえるゾウ
たどりよく、しこうはげんじつかするか
きみはどういきるか ひとはみためがりわり

とはいえいちいち ちいさいことにくよくよするな

『創世記』に書かれている全ての観察結果は、宇宙からのエア
バースト（空中爆発）と一致している」
「しかし、この破壊された都市が旧約聖書のソドムだという科
学的証拠はない」

オリーブは解放された木

くらいへやの

のされた詩人

お腹すいたカバンのような

お魚くわえタバコのような

はいつくばって

follow 平生 ほのかな

もがく ロートレック

ジョン・ロンソン

キャプテン・ビーフハート

ダニエル・ジョンストン

何の巢？ 聖典 想像力の作り方

輪ゴムの反動で あなたはたえず

またここへ戻ってくる

◆長澤雪（30） 大分県

僕らが濾過した、青

空を綺麗だと思った

まだ少女だった頃

世界を美しいと思っていた

いつしか見上げなくなつた、空

目の前を生きるしかなかった

見上げる、電光掲示板

この街の夜景、東京タワー

無機質で薄汚れた光を

こんなにも綺麗だと思った

僕らはいつしか目が眩む

世界に絶望してようやくわかる

空、僕らが濾過した青だった

永遠に変わることのない純度

ーひとたちが、生きる限り

所詮この世

苦しみ悲しみ怒り憎しみ恨み絶望

喜劇悲劇ロマンス

地球とかいう部屋の劇場

僕は踊らされる

特別な出来事だと錯覚する

僕ら地球しか知らないだけ

ああ地球がすべて

ああこの世界がすべて

ああ僕自身がすべて

この人生がすべて

所詮この世に 感情を手渡し

嘆き涙し死んでゆく

地球とかいうこの部屋で

遠ざかる 「また明日」

「また明日ね」

分かれ道、歩くスピードをあげる

ここからはひとりぼっち、あの子もわたしも

人たちの夕ご飯の匂いがして駆け抜ける

どうやってここまで来たのだろう

木々が光を遮る 届かない もう届かない

翳りゆく道、遠くにぼやけたひかり

壊れた街灯が不規則に点滅しはじめる

ひとたちは歩くスピードをあげる

自分の人生に帰ってゆく

僕は今でもあの日別れた道を

ひとり歩き続けている

ひかりの届かないところ

壊れた街灯の点滅だけをたよりに

遠くに聞こえる

「また明日ね」

◆くろ(41) 北海道

ひとりとひとつ

まっ白な犬が 芝生の上を散歩している

茶色い野良猫が 塀の上で昼寝している

みんなお日様の匂いがする

私の好きな人が 私の知らない男と楽しそうに話をしている
私の知らない女が 私のとなりでひそひそしている
みんな私をひとりにする

近くの公園の 小さな川
しゃがみこんで そこに生きる小さな生命を思う

昨日の大雨が嘘のように 今朝の空は透きとおっていて
明日出会うであろう まだ私の知らない空の青さが
みんなの心をひとつにする

川に映る自分の顔はいつもより歪んで見えて
泣いているのか 笑っているのか 怒っているのか
捉えた心は石にぶつかり
音もなくどこか遠くに流れていく

ピアノの音が聞こえる
水面の草は水に揺られ
木々は風をまとい

小鳥は空とひとつになる

ここに息づくすべてのものたちが
私に心を与えてくれる

澄み切った私の心
私を越えて 空を越えて
私は世界とひとつになる

◆沼田きえ（59） 神奈川県

東京

ああ
このドアの向こうには
東京の中心という匂いのする
バッグにコート パソコン 書類
娘しか知らない世界が
詰まっているのだな

まだあどけなさの残る寝顔の娘とともに

東京の匂いが眠っている
わたしの知らない顔を持つ
娘とともに

半月

南のペランダの
羊羹色の空に輝く
半月が
余りに綺麗だったので
もう暫く

嘘はつけない
咄嗟になぜか
そう思った

◆藍羽由宇（21） 千葉県

ルッキズム

綺麗な人を見ると、
脱毛してない 髪の毛がサラサラストレートじゃない ファッ

シヨンに興味がない

ネイルしてない コンタクトに変えてない 姿勢が悪い
メイクがいつも変わらない 痩せてない 笑顔がぎこちない
私は、

私のことがとてもイヤになる

そんな「しんどい」を心の中で増幅させて、
しんどい

しんどい
と思ううちに、

どこかで糸がプツツと切れて、
あ、もういいや
となる。

どう頑張っても、きつと満足できない。

どうすれば、この苦しさは消える？

頑張る前からこんなにも苦しい。

いくら自分を愛せと

あなたはあなたらしくあるのが一番なのだ
太っていようが痩せていようが関係なく魅力的だと

……そう、言われても、

目に入ってくる自分の姿は醜い。

そして、そういう「綺麗」なことを言っている人は、やっぱり、綺麗な人だ。

汚い。

汚いじゃないか。

綺麗じゃなきゃ、そんなことは言えないってことじゃないか。

自分を愛しましょう、だなんてできない。

私は私のまま存在して、

骨格とかパーソナルカラーとか

メイクもファッションもなにもかもいららない、

ネバーランドに行きたいのかもしれない。

苦しい。

ただ、苦しいのである

碎む手と季節外れの夏の歌

一人思うは、人を愛すること

私にはそれがわからない

寒さで出てくる鼻水をすすって

ああ、早く帰りたいと思いながら帰路につく

欠陥！欠陥である！

夜の雨風の中、寒さで動かなくなっていくこの手も

そうしてだんだん動かなくなっていく指で紡ぐ言葉も

だんだん雨が染みて来て、濡れていく靴下も

愛を表現できない私

親に申し訳なさを覚えるこの心も

欠陥。ただそれだけである。

欠陥

月と夜道と街灯と

酒と夜風と冷雨ひさめと呼吸

日常へと、帰っていく。

相対性の孤独

午前
AM 4:00

少し開いた窓から見える街灯は

私の目をしっかりと灼く

Night Dancer

Night Dancer

ただ ここにいる

その証明だけが欲しくて、

どうしようもなく欲しくて、

でもこんな醜い心の底を

この光は映し出す

夜明け前の、いちばん闇がそのマントを大きく広げている時間

まで

起きているしかなかった臆病者は悔やみだす

ただひとつ輝くその光は、

私のおろかな勘違いをしっかりと感じさせてくる

私はただの人間で、

私はただの不眠症で。

私の心の空白は、鏡ではなく黒い穴で。

光はとうとう吸い込まれ、

果てない終焉おわりに進むのみ

2023/07/13 AM 4:15' 窓辺より

夜のヴェールが解けた時

振り解けない光が首筋から右の頬をなぞって

そのまま耳を辿り、そして塞ぐ

私は静かにそれに手を重ねてしばらくその沈黙を糧にする

光がまた頬をなぞり、そして右耳の輪郭をなぞる

私はそれに身を委ねて

静かに光とキスをする

夜が終わるはずなのに漂う、太陽の残り香に包まれて

残夜の空を、ただ見つめる

ああ、今日も寝られなかったな、と思いつながらも
この逢瀬を楽しんでいたいと、ぼんやりした頭で思った
まだ、唇の感触は消えない。

◆戸賀崎恵太（19） 埼玉県

無常

言葉にすれば嘘になってしまう
夢も理想も野望も
形にすれば 朽ち果てる

翻った盆の水が
指の隙間から零れ落ちる
ひらひらと舞う希望の屑を
眺めることしかできない僕ら

今、僕が見ている物は
いつか全て壊れてしまふ
見えないものが欲しいと

願うことは強欲だろうか
人は皆、そういうものを欲しがっているのに

形にすれば 消えてしまうから
世界は愛を象らなかった
口にすれば 消え去ってしまうから
僕は「愛してる」と言えなかった

◆岩渕新（18） 東京都題

毛布

やさしくくるまれない

私の全身を包み込んでほしい
本当に、全てを

子供の頃の毛布みたいに
とても心地の良い布で

私の針を

尖っているであろうその先端を

少しでいいからまるくして

どこにも刺さらないように

隔てて欲しい

まだ新鮮で色々な考えを持つ私は

「尖っている」のでしょうか？

社会と手を取り合っている私は

「正しい」のでしょうか。

そのふたつはまったく異なるものだから

一緒くたにしたくても

軋み合う

そうやってできたたくさんの

がたがたや

とげとげや

ぎしぎしも

全て

大きな大きな柔らかい布で

外の光さえ一筋も入らぬように

ずっと包んでいてほしい

私はその暖かな空間で

たくさんの時間をかけるの

私はその暖かな空間で

まあるくなつて

生まれたての頃のような

つやつやでぴかぴかの私になってしまいたい

◆渡辺真麻（18）

東京都

スカート

身体は、

どろどろだったり

カクカクだったり

ヒヤヒヤだったり

スカートはふくらむ

布が張って どこまでもいけるみたい

足には冷たい風が張り付く

身体は回って

頭も回る

空は滲んでいく

手は風とハイタッチ

背中のはのびのび

それは同時

ペーンっーんぐるぐるだんだんクラクラくにやくにゃふらーっ
とぼんぼんぴしー

ってな感じだよ

それがスカートだよ

◆辻遷玉（56） 宮城県

花溯浜にて

冬の花溯浜。何かに呼ばれた気がしてひとり降り立つ。

誰の姿もない小さな入江。

砂浜に横たわる朽ちた小舟はあの頃のまま。

変わらない景色と、静かな波音。

ふと、打ち寄せる波に足を止めしゃがんでみた。

見えたのはぼんやりとした月と霞む水平線、それから。

今にもかき消されそうな私の足跡。

私を呼ぶものは何？

それはあの日の月明かり。

それは二つ並んだ長い足跡。

冬の砂浜、朽ちた小舟、静かに響く波音。

空と海が一つに溶け合うまでもうあと少し。

あの夜、カーステレオから流れていたのはしゃがれた声の「オ

ール、五五」。

◆渡辺八畳（28）

東京都

C I A機密文書

退屈な山道に心を打たれる。周りに店は無く家は無く、
自販機も信号も畑さえもな一つ無くて、地点と地点の
間に広がる空白、移動それだけのための道。小石も単色
だ。その道を渡るのに、人生の数十分を支払い、風圧だ
けを肌に刻む。それはとても潔いことだ。

C I A機密文書

アダムスキー型のミニチュア

延々と流れる3Dシアター

ここは福島市飯野町

悠然とした県道の先にある

UFOふれあい館

こんにちは、宇宙人さん

バツタが跳ねる

素手でも捕まえやすい

笹の葉のような触り心地

拳の中でもそもそ動く

毎年あたたかくなると行きたくなくなる。田舎の坂は角度が
急で、原付にはすこし苦しい。まるでえっちらおっちら
散歩しているようだ。平成の前半で止まっている年表と、
手塗りのレプリカ。でんぐり返しで端に着く程度の広さ。
この資料映像も何十回観ただろうか。白くなつた空に、
いつまでも未確認な物体。A Iが人権を得た後もこの謎
は明かされないだろう。ああ、ちょうどよい室温。

そして、6月24日は、全世界的にUFOの日！

希望にはほど遠い

清く、正しく、美しい言葉を綴りたいのです

私は希望を抱いて、キーボードを叩く

裏山の千貫森は古代のピラミッドだ。草木が屯する、遊歩道ならぬUFO道。右手にいちご味の宇宙食を持ちながら一段ずつ上っていく。

ちようちよ

だんごむし

グレイ型宇宙人

牛は連れ去れてもなおゲップを残す

かみきりむし

よくわからないむし

フラットウツズ・モンスター

運が良ければトカゲにも会える

風呂あがりみたいに全身が汗でべちゃべちゃ

山々、山々

明るい曇り空の下

フリーズドライのいちごアイスが口の中で溶けていく

「ちきしょう、いつから、ひでえ世界になっちまったんだ。まともなニンゲンはどこにいる？」

賢者みてえな、すごいヤツじゃなくていい。

ニンゲンはどこにいったんだ？」

希望にはほど遠い、咆哮するかのような文字列が打鍵されていく

「サイアクだよ、俺も、俺たちも、お前も、お前らも。

普通でよかつたじゃねえか。普通で。

暴力も、盗人も、騙しもなけりゃあニンゲンは、平和なはずじゃないか。

誰も泣かずに済んだじゃねえか」

◆遠野しま(33) 埼玉県

きつと月給6万円の生活で、湯豆腐ばかり食べている生活のせいです

こんなにもみっともない言葉をほんとうの私が語るはずがありません

「なぜ、俺もお前も正直に生きないんだ。

なぜ、俺もお前も自分だけ助かろうとする？

ニンゲンが動物だからか？

種の保存の法則、弱肉強食、自然淘汰、生存本能ってヤツか？

この世に命綱は一本しか存在しないのか？」

そう、私はお腹が空いています

まあ、なんて恥ずかしいこと。おほほほほ

お腹が空いているから激しい気持ちになっているのね。うふふふ

「ニンゲンが使う言葉なんて、元々薄汚いのを知らんのか？

自分の意見を述べて、同意を求めようとする、服従させようとする、

このちんけな嘔りが、

清く、正しく、美しく響くわけがなからうよ」

ふと、私の手が止まる

骨の浮いた、瘦せぎすの手が考え事をしている

真紫に変色した爪の色を見つめて、私からの応答を待つ

「どんな動物だって、子どもを呼んだり、敵が近くににいる時に発声する。

あるいは、愛を伝えるときに。

彼らの言葉はラブアンドピースに使われる。

喧嘩の時だってそうだ。

ここは俺の場所だ、あっちへいけ。

俺にかまうな、ケガするぞ。

性根の優しいヤンキーみたいなやり取りで、解決しようとする。

動物は、キズを負ったら死ぬからだ。

治療という概念がない以上、深手を負った動物は死ぬ。

だから安易にキズを負わせない、負おうとしない。

ニンゲンを名乗っている動物だけが、なぜこれができない？」

私の腕が動くたび、砲弾のような腹の音が鳴る

「他の生き物に対して、死ねばいいのに、と思うのはニンゲンだけだ。

動物は仲間の生存を許容する。

生き抜くことが全てだからだ。

ニンゲンという動物は、清く、正しく、美しい言葉とやらで、対話も、交渉も、相互理解もできるくせに、仲間の生存を容易く否定する」

私は、想像する

電気代が怖くて暖房もつけられない氷河の部屋で、ニンゲンが小鳥のような愛らしい囁きだけで対話している世界を

「どうした、妙に静かになったじゃないか」

びびび、ちゅん、ちゅん、びび。

小さく囁ってみると、涙が零れたるるる、びよ、びびび。

これから私は、清く、正しく、美しい言葉を、囁るのです
びー、びー、ちゅちゅん。

明日は牛肉のバックが安くなりますように
希望にはほど遠い世界で、どうか泣かずにいられますように

◆谷 凜乃（19） 神奈川県

ろうと

口から鉛を入れられる

漏斗で入れられる

苦しいなあ苦しい

胃が重い

あああ、うまく飲み込めない

真っ暗で霧が濃い

つま先から氷水が入ってきて

嫌な冷たさが心臓を包む

どうしてそんなに早く歩くの

追いつけない

追いつけないことを

悲しんだ方が良いのかな

悔しがった方が良いのかな
それとも

目配せしてもあなたの顔は見えなくて

前を見たい

ただ

首を上げることもできなくて

立っていたい

ただ

震えを止められなくて

息が吸いたい

ただ

なにかに縋りたい

ただ

喉の奥で体育座りをしている本音が

ただ

立ち止まってくれる人を待っていた

さつきから、世かいは、

ぼんやりにじんできて、

わたしは

泣いている

のかもしれない

◆翔麗（52） 宮城県

「、、、」

それは

どこか遠い場所において

飢餓や紛争で苦しむ誰かが

流した涙

「、、、」

「、、、」

それとも

無関心を装い続ける

他の多くの人々の沈黙

「、、、」

もしかしたら

見知らぬ誰かの命を奪う目的で

兵器や武器にこめられた弾薬

「、、、」

できることなら

私の回りにいる

一人一人が蒔いた

愛の種であって欲しい

「、、、」

バラバラと降る雨の粒は

この世界の不平等を憂いた

神の嘆声となり

無情の世にまた一つ

河清の花を咲かせる

◆大江 豊（63） 愛知県

島々

雨が降って来て

席を立つ時があるだろう

（いまも あの時の横顔のまま）

教室まで 傘と長ぐつを

持って やって来てしまった

母のように わたしも やって来て

うしろ姿で ひとり帰って行った

だれかの溜まり水だったのでしょうか

もうひとり 遅れてやって来た

わたしよりも ちっちゃな背丈で

雨になると 空模様が

わからなくなってしまう

母のように　しゃがみ込み

鳥が　そのまま　鳥に

なるように水が溜まっていた

立ち止って　まえから手を出され

うしろから押されて　泣いた

はじめて　歩かされた道だから

忘れようにも忘れられない

足の裏が　ぬかるみ　曇りぞら

草木に覆われてしまった

水の中の前方後円墳の高み

円筒埴輪の中で鳥を待つ

そこが　鳥だ

しゃがみ込むと

かげぼうしのような鳥が

あらわれ　その島の向こう

また　水溜まりがあつて　曇り

かげぼうしのような鳥があらわれた

そのうしろ姿を　追い駆けて

また　そこに　立ち　しゃがみ込むと

わたしも鳥になり島になつて

群れそのものになつて　雲の中で

テルテル坊主を吊るした

漂う王国　半島から

やって来た渡来人のように

はじめて　曇りぞらを見上げた

「あれ　雲の足あとでしょうか？」

足そのものが　溜まり水になつて

舟を出す　あの灯りは駅だろう

いつものように群れの中から

父が　こちらに歩いて来て

傘の家に入った

穴の中で

握り締めて

ポケットの中に入れたまま

洞の中に入った

暗がりの中で

ニイニゼミが シイシイ と

鳴きはじめて 困った

(あれは 幼虫の声だった)

何人か先を歩いてみえた先生が

半ば 振り返って その顔が

皺くちやの蟬のように

見えて来て これは

本当に 困った

溜め池に鳥たちが飛びかう

比企丘陵の麓 草木の剥がれた

そこに 穿たれた それも

ひととき大きな横穴が 数か所あって

蟬たちの声から遠ざかるように

旧中島飛行機地下軍事工場跡に入った

(母屋の柱時計の振子が止まって―)

ひとり言のような声だった

南シナ海のどこかの島で 頭に

鉄砲玉が当たって死んでしまった

兄に代わって 跡取りになった

父は どんな思いで 椅子に乗って

ネジを巻き直していただろう

(巻き終えて 指で 良し と言って―)

防空壕の中から百穴は見えないが

洞の中で ぶら下がっていた

蝙蝠たちならば 鳴き声で

見えていたのだろうか

洞の中から

出て てのひらを開いた

石ころが 軽くなつて

一瞬のうちに飛び去って行った

先生は はるか先に

行ってしまつて わたしは

ポケットに手の入れられない

男の子になつて

しまつて

あれから
叱られたことは
なかった

自転車に

乗っても 頭一つ
背が高かった

わたしは
線路ぎわの草むらの
ように走っていた
泣きべそをかきながら
きみのうしろで
腹話術のように
ボクボクボク と
思わず ひとり言を
呟いていた

夏が終わって

転校生

よそから やって来た
転校生のように あれは
びっくり箱を開いた時の声だった
名前だけ言って席に座った
背が高かった きみは
放課後 運動場の片すみで
鉄棒に凭れていた

高崎で 気動車に
乗り換え 八高線で
(ガタン ゴトン)
ジョイント音を
背中に 草むらの中
高麗川まで走った
大きな「むら」ができ
小さな「くに」が生まれた
高麗王若光のものがたり
蛇のような高麗川が
夏の 日射しに
煌めいていた

縄文系か弥生系か
中学生が頭のかたちで
泣きわらいしていた
男の子たちの中で
かくれんぼができない
異人さんのように きみは
どこか遠くを見ていた
半島から 弓なりの
島々が見えた

追い駆けても
きみは どこまでも
先を走っていた
あきらめて
立ち止まっても
角を曲がるまで
背中が見えていた
赤いポストだ

堤のような
ところで きみは
自転車を下りて やっと
歩き始めた 草むらが
揺れ ハンドルがひかった
工場帰りの父のように
自転車を引いて
歩いていた

◆土肥和子（58） 北海道

岬に立つ

夜明け前の岬に立つ
白く ないませの空間に
遠く沖をゆく船が
空と海の境目を教えてくれる
太陽が連れてきた
今日が くつきりと広がる

空の淡い青 海の深い青
2分割された 青の中心に
垂直に立つ私がいる

たよりなく ゆらぎそうに
力強く まっすぐに

許せないこと

許されたいこと

黒い重いかたまりが

この体の重心

立ち続ける よすが

風は足元の草をゆらし

手にした便りを吹き飛ばす

額を打ち

まぶたを閉ざそうとする

責めることもせず

あわれむこともなく

すべてに無関心で
どこまでも平等で

自由

世界は

ふたつの青と 私だけ

ここに ずっと

ここに

岬をあとにする

息苦しく 明るい

色のない場所へ

冷えたつま先で 帰っていく

◆麻樹子 (43) 福岡県

Something

私にはやるべきことがたくさんあったはずなのに
全部忘れてしまったわ
本を開いても

文字の読み方がわからなくて
煙草の吸い方だって忘れて

フィルターに火をつけてしまった

なんなの？ なんなの？

外は雨 何が欲しいのかわからない 忘れてしまった

私が 忘れてしまった 何か

全部 忘れてしまった 私

私に 忘れられた 何か

センチメンタルが怖い

センチメンタルが怖い

今 私の脳をフルスピードで疾走している

アドレナリンが切れた時の

コルタールのように重い

あのセンチメンタルが怖い

息を切らして 走る

声を上げて はしゃぐ

笑う私 楽しむ私

その後に やってくる 静けさ

落ちる

毛布

冷えたインスタントコーヒー

嫌いなんだ

充実した時 楽しくてしかたない時間

誰か今のうちに

早く次の扉を開けてくれ

黄ばんだタバコのフィルター

転がるリップステイクのふた

嫌いなんだ

薄まってゆくアドレナリン

ゆるんでゆくスピード

センチメンタルが怖い

冬の夕涼み

夜風は優しく2人を包む

湯上りの火照りは

咲く花からこぼれる 甘い吐息にも似て

真冬の濃紺の空へ

揺らめきながら 立ち上る

あたたかな湯にほぐされた体は

触れ合う皮膚の境目を忘れ

2人を果てしない安らぎへと

ゆるやかに導き運ぶ

揺れる カアテン

星の戯れ

洗い髪の鼻歌よ

ああ この静かな夜の時を

あなたは 幸せを名づけたのですね

着火

あなたが私の左耳にキスをした

私の左半身は

たちまち真つ赤な火を噴いた

困ってうつむいた 私の目に映ったのは

熱で溶け始めている足の先

ああ どうしよう

私の細胞の

素直な恋の反応です

心

私の心はすぐに溢れる

カーテンを通して聞こえる雨音の

激しく 静かに

変化する

甘い速度に

私の心はすぐに溢れる

暗い天井へ向かって

けなげに伸縮する

黄金色の

ろうそくの灯りに

◆橘 美花（42） 福井県

椿の涙

桜が咲くと

椿が落ちる

そろそろ自分の番は終わりと気付くのか
山の階段を彩る絨毯となつて
最後までで人の目を愉しませる

そんな奥ゆかしい花も

石の上では自然に還ることもできずに
誰かの手を煩わせることになる

どんなに美しく見える物事も

実はどこかで犠牲が生じているもの
本人にそんなつもりはなくても

そんな悲しみをひとつ、持ち帰る

春は別れの季節

だから本当は、

本当のことを話そう

訪れのよろこびよりも
寂しさのほうが大きい

新しい場所への期待よりも
不安のほうを強く感じる

日差しをあたたかさより
風の冷たさを

満開の桜の美しさより
その先の散りゆく姿を想う

さて今年はどうだろうかと
自分の心の動きをうかがっている

◆鈴木夏子（50） 兵庫県

街路樹とわたし

紅葉する街路樹

あか、き、枝の合間に残るみどり

紅葉する街路樹はどれもみな
それぞれに美しい

白髪が増える
皺が目立つ

人なら

そうゆうこと

街路樹は抗わずに

みどりの葉がその色を変えることを

ただ受け入れる

自然がもたらす変化を

その時々々の等身大の自身を

受け入れる

それは強さ

それはしなやかさ

ここで（わたしは）

これまで（こうして）

生きてきたという

自負

自負のかけらは持っている

ただ

もう少し

わたしには時間が必要

老いがもたらす変化を受け入れ

他人にその変化を晒すには

引け目も感じつつ

今月もまた

白髪を染める

ほんの少し

老いを

先送りする

◆ 溼（16） 長崎県

ねがいごと、つぶやく。

しあわせが脳を駆けたのは

あなたにもらったハンドクリームが

秒速一〇cmで香って

我慢できず

手の甲に鼻を近づけたとき

脳を使い疲れ果て

大人になればこの難問も簡単に解けると信じたい気持ちも

わたしに馴染んで変化する香りも

「ぜんぶ、まるごと愛したい」

ダイニングテーブルに広げた教科書は

五分前と変わらぬ

蛍光色のラインマーカーが目立つだけ

ニュートンの林檎が落ちるのを過去に戻って阻止すれば

この面倒な問題は存在しなかったのか

彼は林檎ではなく

雨粒が 小枝が

落ちるのを見ても法則を見つけたのか

目の前の林檎

窓に雨粒が当たると音

懸命に手を伸ばす小枝たちのシルエット

ハンドクリームの香り

あなたを思い浮かべる

「わたしだけの、しあわせ」

◆ ウワヤユキ（28） 神奈川県

バイバイさよなら世界は

痛くも痒くもある

サンドバッグのような諦めです

「大丈夫」でも隠せない

「泣き出しそう」が溢れ出している

自分の中の弱ささえ

測り違えていた僕だったんだ

躓くときもあるけれど

前を向いて生きていこう、

・・・なんてね。

バイバイさよなら世界は

僕たちを置き去りにして

終着地点を決めない列車

揺られる夜の答え、探してる

ハイハイ・・・、さよなら世界が

僕たちを置き去りにしたから

自分のことも許せないまま

他人には優しさを分け続ける

もう十分僕は、

冷めきった 冷え切っていた

そろそろ助けが来る頃合いだろうか

今日で何日目だろうか？

余力が残って見えたなら

大分 嘘が上手くなった

「楽しそう」なんてさ

君は笑顔の裏側を知らない

あと十分だけ待ってみようか、なんてさ

抜け出せないのなら 眠らせて欲しいな

無慈悲に鐘の音なる

バイバイさよなら世界は

僕たちを置き去りにして

終着地点を決めない列車

揺られる夜の答え 探してる

ハイハイ・・・、さよなら世界が

僕たちを置き去りにしたから

自分のことも許せないまま

他人には優しさを分け続ける

過ちを犯した数だけ

正しく生きようとしてきた

傷が深くなるたび

無償の愛を配り歩いた

だけどこの償いは届かなくて

どうすれば許されるだろう

造り物の優しさは

有限で 空になるだけ

バイバイさよなら世界は

僕たちを置き去りにして

終着地点を決めない列車

揺られる夜の答え

探してる

風邪引きのバラッド

僕はまた一人 この道を進む

くぐもった声で この歌を歌う

僕の大切を守ろうと歌う

あなたがいないから この胸は痛む

咳しても一人 響く乾いた音だった

毛布が吸い取る 僕の存在の証みたいなもの

精一杯叫んでも

胸で突っかかって

そもそも音にもならないよ

せいぜい ゼエゼエ 息鳴らしながら

僕はまた天井を見上げる

癒えない熱は あの日の傷から治らずに発されているみたい

ああ、何度も叫びたい

掠れ混じりでも、鈍い低音でも

心の涙を流しながら歌う

風邪を引くたび、何に効くんだかわからない薬を飲んで、
自分のことを、独り専用に作り替えてしまっているようなんだ

僕には、にわかには信じられなくなってきた
誰かと歩むためにある、歩幅が存在するなんて

◆雨宮信夫（72） 神奈川県

心急く道

心急く道は、

右と左に別れてまた出会う道。

大通り、仲通り、そして路地裏へと、

道はずっと先まで続いている。

道は、今にも消えてなくなりそうだけど、なくならない。どこ
に続くか分からない。

何度歩いた道だろう、この小道。

人とすれ違った。

すれ違う人とは、無言の挨拶を交わすだけだけど、名残惜しい
のは何故だろう。

セミの抜け殻、ねずみの尻尾。私の色は何色だろう。

そんなことなどを考えながら先を急いだ。
ビー玉、野の花、女の子。風に捲れた赤胴鈴之助のメンコ。
おや、どこかで見た顔が過ぎて行っただぞ。
聞き覚えのある笑い声が聞こえて消えた。
きつと誰かいる。焦る小道は心急く道。
私は花を散らして歩いて行っただ。

◆響きよう（27） 宮城県

自称恋路

留めていた

あなたばかりで埋め尽くされた道を

俯いたまま通り過ぎないように

留めていたの

私は

私を

得意だよねそういうことだけはと

誰も責めないなんて少し変

首を傾げながらただの一步を踏み出す

取り立てて理由のないただの一步

肩が少し触れたと感じても

遠い体温で

上手に避けてくれるのよね

いつだって

あなた

声をかけても真新しいあなたと出会うだけ

それだけで

よくできた人違いだと毎日感心していた

包囲されているあなたの後ろ

こぼれる為に注がれているとは

思いもよらない

定時を過ぎたら

見えてきて

代わりに見えてきて

あなたがどんな色の液体を飲んでいるのか

明日までにどうやってあなたを取り戻すのか

はじまりの前に確かめて

朝なんていらぬとか

考えていないといいのだけれど

絶対に怯えないと約束するなら

振り返ってもいいよ

つまり投げやりなあなたがいても素敵だなきつちりと家へ帰るあなたも素敵だな

ということ

手放すには惜しくてたまらない

ということ

あなたじゃなきや駄目なんてことは

ありえない

ということ

いくつものあなた

何人もいるあなた

替えがきくあなた

そんなことないよ

たったひとりだよと嘘もつけないあなた

私が追いかけているのは

そういう本物

いたらいいなと望むもの

たくさん並べておけば整って見えるでしょ

アドバイスどおりだった

たくさんの恋人を作った人類の

的確なアドバイスだった

生きるを続ける為に見つけたんだ

すべての人があなたを

いや

勘弁して

たったひとりだよと言わせなさい

今更

今更

今更だって後ろ指さされて

かゆい

指し示されても無視を続けたから迷った

未知は私を留めていた

あなたは真っ直ぐに前を向き

歩きたびに最新のあなたに変わってゆく

そうして私に気づかない

そういう仕組み

ことわり

止まれと言われるまで止まらない

止まれという人は誰もいない

ありがたい仕組み

今日は目が合わない

今日も目が合わない

仕組み

仕組み

見て

あの家々

すべて合わせてひとつにしたら

宵の海に浮かぶ豪華客船のよう

私たちが一生をかけても乗ることはできない

できやしないのに

あの波

うねり

私たちは同じものを見ている

少し
ほんの少しだけど
変
変だな
この路

◆宵闇ことね（25） 香川県

鏡像認知

洗面所の鏡を見て
背筋が泡立つ瞬間がある

これは誰だ？
わたしだ
本当に？

わたしと世界の間には薄いヴェールがかかる
鏡像のわたしは、果たして正しくわたしだろうか

言葉が鏡なのならば

わたしの鏡は無数にあって
それらが屈折して、反射して
わたしを映し出しているのならば
わたしはいつたい何人いるのだろうか

一昨日はおとなしくて

昨日はわらって

今日はかなしくて

明日はたのしくて

明々後日はきつとつまらない

そんな不安定なわたしは、全て確かにわたしだった

それらを否定して、肯定して

姿が見えない淡雪を拾い集めながら

わたしは呼吸を繰り返している

きつとわたし、透明になりたかった

透明になって、空気を揺蕩って

淡雪をただ眺めていたかった

わたし自身も忘れてしまったかのように

消えてしまいたかつたのに

ライミン

でも積雪の上には

足跡が残ってしまうから

だから消えられないことを
ありありと思ひ知らされる

それを何度も何度も何度もくり返して

人生という雪道を歩くしかないのだろう

雪道の先に青空が見える日は来るのかしら

薄いヴェールをこの手で剥ぐ日は来るのかしら

洗面所の鏡に向かって笑える日は来るのかしら

か細く謡いながら

濡れた鏡を

パジャマの袖で拭った

身に余る、不慣れな幸せ

世相みたいなひと 生々しくって

目は塞がり 昔話は跳ねて

摘み損ねてはまた会えると手を組んだ

意気地なしが根を張る

骨休みのふくらはぎ

これからの話をこじ開ける 血眼の着信音

居残り ただひとつの体温が二つになる時

不相応な熱

もう数え切れないもの

馬乗りのアナウンス 絞り込んだ、逆立つ産毛は

欲しかったものと

勘違いしていた手触り

なんだって白黒つけたがって

努めて早く話してみたりして

目を合わせるのが上手

苦手なことだったから、もう上手

◆緑羊渚(28) 東京都

不都合 4つの番号に1つが加わる時

開けた場所が散々と身に染みて

息継ぎも忘れる

片腕だけで過ごしていたつもりで居たのね

焦らせるつもりで優しくしていたみたい

それだってもう、目を瞑ったこと

前走する侮蔑

時期早々の乗り換えに足が止まって

延々と目に余る 四肢の長さもどかしい

言葉を打ち続ける過去

染み入った気楽さは身体を濡らして

シーツの中央 溶けてゆく

あまりにもきれいだっただから

もう会えないかと思いましたが

良く動く両手に光が当たったその後ろで

体育座りがこちらを見ているような気がしたから

居心地が悪いような

なんだか突き放されたような

こんにちわ そしてごめんなさい

心配しないで 笑ったりしないから

さようなら いつまでも指先が冷たいまま

どこへも行かないで 天井の先に

何が見えたの

もう

終わらないで。

車線変更

他人の妹 みたいな顔

ドライヤーを挟んで映った縁

青いペンで鉤括弧をつけた

いくら手を取ったとしても

私は嘘です

回らないタイヤ 藁半紙

ふしだら 遅延電車は寝巻きのまま

寒い日に 寒い場所に居た

眠気を落として

そうして浮かぶ、日なたの痣

光らない声で

余計な事 良い過ぎたかな

違う匂いくらいで弱りすぎたかな

どちらか表ずつ説明したら

畳むはずのものも畳めたのかな

芝の上では水面みたいに陽が滑って

その向こうでは

上に跨る勇氣だけが残って

グースダウンの羽根がこぼれる

そんな心持の鉢合わせに

腹と背の間がよろめいた

ガスの元栓はもう締めた

頼むから、熱を持つのはやめにして

半日同じジュースを飲んで

痛めた喉を晒して見せて

相談事に花を咲かせたら

もうこれ以上

知りたくなんてないんです

七、一四

強張った顔

麻紐の指輪

幾つはめれば気が済みますか

1本の指に

眼鏡の奥

秒針の先

覗く集中豪雨

めくらの硬水

頭ごなしに割り切って

晴れやすさを勘違いすると

後姿に助け舟は漂着する

それでも、

私を置いていきますか

ただ、居なくなる時だけは傍に居ないと
生きていた覚えが無いようで

それまでは

なんとか面影は残していられそうで

◆大西陽子（52）

岡山県

はなのうみ

はな なる かな

はな なる かな

はるかなる

はなの うみ かな

うみ なる かな

うみ なる かな

はてもなき

うみの はて かな

はて なる かな

はて なる かな

はてしなき

はなの うみ かな

はるかなる

はるかなる

はなの うみ かな

はなの うみ

みな みな

うみの ごとく

のにさく はなよ

なを しらしめし

はるの はなよ

みちみちて

うまれんとする

のにさく はなよ

なれは うつくしき

はななればこそ

みどりごは ねむる
うみのなか ふかく
のは みわたすかぎり
なれが かぜにゆれる
はるのひの ゆうぐれ

◆ユエ（21） 東京都

あなた
いつまでも
夢をみていた

道ばたの小石をあつめ
白い花にリボンを結ぶ
蝶にあいさつして
わたしの木に登り
いつまでも

手紙

雲をながめる

空の上には大きなうまが駆けていた
あまいラムネは
いつまでも
口の中でころがっていた

ひかる犬の毛も
ひろいたてのどんぐりも
あなた
いつまでも
小さな手でにぎりしめていた

私
いつのまにか
夢を見なくなつた
ビルの隙間を

急ぎ足で通り過ぎる

抱えきれないほどの荷物は
私には重過ぎて

あなたのだんぐり

いつのまにか

どこかに落としたみたい

拾う暇もなかったの

空の上には

雲しかみえないみたい

いつも

追われているの

きつと走っているとき

いつのまにか

あなたの犬の毛

飛ばされてしまったみたい

気がつかなかったの

ごめんなさい

でもあるとき

いつのまにか

あなたの手から離れていった

赤い風船は

今もまだ

上へ上へと

のぼっている

◆中村真理子（31） 兵庫県

檜

田舎の小さな田んぼを守り

なんだか煤けた帽子をかぶる

黒々と日焼けした皺の顔

昼から焼酎をあおり、怒られていた

私知ってる祖父の姿

おみやあは、ええ子だと

頭を撫でてくれた

大きな手

ええ子なんかな…

小さい頃はええ子だったかもしれない

でも、おおきなつて、色々あつて

全然ええ子じゃないんだが。私。

おじいちゃん、

あんなに元気だったのに、

なんでそんなに痩せてしまったん

カップ酒買ってきたで

好きだったでしょ

何か言つてえな

ぎゅっと握らせた祖父の手は

小指が潰れて丸まっていた

節くれだった指は

硬く、そして温かい

おじいちゃん、私な…

目を閉じると稲穂

くすぐったく晴れた高い空

通り抜ける深支子の風

高く高く手を伸ばせば、つかみとれそう

大きく吸い込んだら

つーんと消毒の匂いがした

おじいちゃん、私のこと、好きだった？

かわいいつて、思つとつた？――

「ママ？」

私をぎゅっと握る小さな手

柔らかく、温かく、そして未知なる茜

大きな瞳に映る私は、密かに揺れて、定まる

おじいちゃん、

私、この子を一人で育てとるんだが
どうしても、言えなかったんよ
ええ子のままで、おりたかったんよ

僅かに差した日が

祖父の頬をなでていた

ゆっくりと扉が閉まり

田畑も空も、あの日の祖父も

透明な心にしまいこむ

キラリと光るビー玉が

胸の中にコトリと落ちた

あの日鳴いていたトンビは

きつと今、透き通る青空を味方に

どこまでも、どこまでも、飛んでゆく

たんぼぼの綿毛

たんぼぼの綿毛にキスをして
茎からとんでしまう前に

たんぼぼの綿毛にキスをして
雨に濡れてしぼむ前に

たんぼぼの綿毛にキスをして
他の人にキスされてしまう前に

たんぼぼの綿毛にキスをして
誰かに踏まれる前に

たんぼぼの綿毛にキスをして
根から朽ちてしまう前に

たんぼぼの綿毛にキスをして
何度も何度も何度も何度も何度も
何度も何度も何度も何度も何度も

たんぼぼの綿毛にキスをして

◆星野芳太郎（75） 神奈川県

終活の朝

また目が覚めてしまった

今日も生きている

さいわいというべきか

それとも

七十五歳

生きているなら急がねばならない

終活のあれこれ

残された時間はあとわずか

だと思ふ

梶山は新型コロナウイルスの洗礼を受けて鬼籍に入り

田沢は梶山の思い出を電話で語り合った三日後

風呂場で心筋梗塞

田沢の妻が風呂場を覗くと

湯船の中で完璧な死体に変容していたという
理想的なピンピンコロリ

団塊の世代の僕らは

死亡適齢期に突入

僕の肉体も金属疲労の進んだ歯車のように

いつ破断しても文句の言えないポンコツ

緑内障に白内障

高脂血症に鼠蹊ヘルニア

顔や手にシミとシワがじわじわと増殖し

歯周病で歯はがたがた

P S A 数値は危険水域に達し

頻尿なのに常に残尿感

死に向かつてひた走っているが

金麦350 ml 缶の晩酌だけは毎日欠かさない

立ち上がる時には手で支え

「ドッコイシヨ」

五キロの米袋を持ち上げるのに

「ヨッコイシヨウイチ」

昭和の駄洒落で気分を紛らわす老いの自嘲

急がねば終活

PCの整理

ネットのアダルト動画の視聴履歴はすでに削除した

過去の仕事のデータの整理はなかなか進まない

孫たちの写真のアルバム作成もまだ未完成

多方向から引かれる後ろ髪

目白押し of 命の残務整理

果たせぬままお迎えが来るのか

お迎えが来るのは明日かもしれないし

明後日かもしれない

三年後かもしれない

ただその日を待つだけ

キーボードを叩く手を休め

ふとため息をつく

耳を澄ますと

隣の寝室から聞こえる妻の寝息

午前五時

晩秋の外はまだ真っ暗

◆竹口久美子（39） 京都府

宇宙

夕方スーパーを出ると

複雑な秋の空

地球のすがたに直面する

死んで

永遠になった

死を考えると

宇宙を思ってこわくなる

宇宙とか粒子とかに詳しくはなかったけど

それなのに

それに何の意味があったのか

思い出話

ふたりとも 記憶力がいいから

同じ思い出話を 細部まで 何度もして笑って

その瞬間はそこに戻るので 楽しかった

泡だて器の代わりに天ぶらのカスを拾うあれでメレンゲを作らされたとか

清水寺から出町柳までバイクやったら一瞬やし大丈夫と言われ
て謎に歩いたことや

カメラを向けた瞬間に象がでっかいうんこをしたとか

私のメールが安部公房の後期の作品の文体のようだとか

男女がそういうことをする所要時間は二〇分とか

青春一八切符を鳥取砂丘で失くしてお金もないし来た道を歩いて戻って発見したとか

お好み焼きを作ろうとしてキャベツが腐っててピーマンに変えたとか

安売りのごみみたいなカニを鍋に入れたらすんごいおいしかったとか

私にとって初めての祇園祭の宵々山の夜とか

あの光景を知っている人が

もう私だけというのが 普通に不思議

一年あとの日から

一年くるまでは

去年の今日はまだいたと思いつながら

ずっと毎日そういうト書きのなかで過ごしてきた

亡くなった日が近づいてくるといよいよそう思った

その日が過ぎてしまつて

一年前の今日はもういなかったという毎日になつて

層、を想像している

一年は明確だったが

層はこれからぐるぐると巻くようになり

何年前か何回めの三月か

だんだんぐるぐるしてくるのだろう

その日が過ぎてしまつて

いない日々のあたりまえの中に

ポイと置かれている感じ
軽いような からっぽのような

子ども

帰ったら 明かりとストーブがついていて
勉強していたり皿を洗っていたり
ふたりでテレビを見ていたり

私は、彼女と毎日いる

元々一人なのに 私が存在させた

けつきよく 私に残したものの
まぼろしのような人たちと 生きている

残してくれたから 現在の私がにぎやかなと思うのは
そう思う日も、多い

仕事で人に

へモグロ빈はトラックの荷台

鉄欠乏性貧血の説明をする
赤血球は体中に酸素を運ぶトラックでへモグロ빈は荷台
荷台が少ないから載る酸素が少なくてそれでしんどいと思いま
す

話が終わって一人見やる窓の外は暮れて
今日もよく働いた

説明がわかりやすいと言われた

大学の教科書に載っていて私に読ませてくれたところ

私はあの頃の夢をかなえて安定して暮らしています

かわった人の力にもなれていると思います

今の仕事に就いているのは大半あなたのおかげさまです

働くことは楽ではないけれど、

そういうことを時々ちゃんと思いついて

頑張っている

◆昆布いおり (20)

神奈川県

病みに踊る

夜二時半、何もできなかった、一日。
今になって体が動く。

重りが取り外された泥舟のように、体が外へと動き出す。

住宅だけが密集し、なんの活気もない町。

エンゼルフレンチのチョコも粉も乗っていないところみたいなの道。

車ひとつ無い車道を歩いて、悦に浸る。

四十八時間動かなかった体に当たる、心地よい風。

千鳥足を咎める者などいない。

ここは私だけの世界だ。

私が世界の支配者だ。

足の感触が変わる。

どうやら踏み切りに足を踏み入れたようだ。

駅に行くために渡らなければならぬこの踏み切りすら、

愛おしく思えてくる。

ふらふらと歩を進めれば、

やがて線路に躓く。

私はそれを誤魔化すように、踊り始める。
それはきつと世界で一番美しい舞だっただろう。
世界には私しかないのだから。

そっ——つと、

片足を地面につけた刹那、

遠くから、ジリリリリリと音が聞こえる。

「嗚呼、邪魔が入った」

◆詩桜（49） 北海道

共振

宇宙の彼方の存在が

私に染み付いていた観念を払い

好きなことをやり続ければいいと

教えてくれた

理由も目的もいらない

人間の表層意識では全体像は見えない

やり続けて本当にそこからひよいと

自分の表現が見つかったとき

私の中の深い部分が動いた

服の下の肋骨の下の

なにかが

ゆっくりと動いた

揺り動かされていた

これはなんだろう

私が私の真髓のようなものを表現したら

私の真髓がゆらりゆらりと動いたのだ

心と身体の

共振だったろうか

それが魂なのだろうか

私は私の内から湧く

震えるような感動が身体を包み込むのを

静かに楽しんだ

そうして

自分というものを

自分の一部分ではなく全体を使って

喜びとともに

ただ表現したとき

魂の震えを感じるということを

知った

仲間割れをしていた私の中の私たちは

そのとき静かに共振していた

私は完全な一つになり

満たされていた

人はこの世界の中に自分の居場所を見つけない

自分が分裂をやめて一つの存在になったとき

ここがどこでもなくても

ここにいることが自然になるのだ

その道筋を教えてください

彼方の存在たちへ

ありがとう

お礼しか言えない

ただ

この魂の震えを差し出そう

時空を超えて
共振するために

◆依田壘(19) 東京都

暑い日に眺めるための詩

最後の蝉が死んだ十月に

蝉の抜け殻を踏みつけました

最後のヒマワリが枯れた十月に

麦わら帽子を買いました

最後の花火が打ち上げられた十月に

公園で線香花火がちりちりと

最後の蚊取り線香が燃え尽きた十月に

秋が来ました

天気予報

ワイシャツにシミができました

汗がシミをつくりました

左手にはスクールバック

右手にはアイスクャンディ

走れ、走れ、走れ、走れ

信号が変わってしまいう前に

晴れ時々曇り

ワイシャツにシミができました

夕立がシミをつくりました

すれ違ったあの子の下着は

真っ白でした

今日の天気予報は

晴れ時々雨

夕立注意

夏の朝

夏の朝はとても静かです

セミの鳴き声も聞こえない

一人取り残されてしまったようで

とても悲しい気持ちになります

日が昇ってくる

花壇の朝顔は一斉に目を覚ます

扇風機のようなひまわりも

そろそろ起きる時間です

新しい一日の始まりは

刺激的な一日の始まりです

大学教授

なで肩、白髪、メガネをかけた

ステレオタイプの大学教授

「地方分権」「中央集権」

お堅い話はやめにして

銀杏の木を切り倒しに行きましょう

スロープを下って

校門を飛び出して

街へ出よう

遠く離れた群馬の森まで

銀杏の木を切り倒しに行きましょう

おなががすいたらリユックサクから

大きなおにぎり取り出して

のどが乾いたらよく冷えたお茶を飲みましょう

新しい一日の始まりに

古い一日の終わりに

じゃんけんぽん

あいこでしょ

◆近藤善揮（55） 東京都

冷蔵庫

冷たい扉の冷蔵庫

中には野菜や果物寄り添い

彼はただただ孤独に佇む

夜は静かで中には冷氣

冷たい光が照らしては消え
食材は影に包まれる

時折暖かな手が触れる
それはほんの一時で
寂しさがまた包み込む

冷たい空気の中で
彼の心は凍りつく
孤独と冷たさ融け合って

一雫の涙棚に滴る
冷たい涙滴り落ちて
冷蔵庫の奥その音響く

扉が閉まると元の静寂
食材たちは寄り添うけれど
その結びつきも一時的

野菜、果物、静かな別れの時を告げ
再び孤独と隣り合わせ

過ぎ去る日々を数えては
変わらぬ寂しさ抱え込む

一人佇む冷蔵庫

扉が開くそのたびに
新たな食材やってくる
彼はそれを楽しみに
新たな出会いに幸せ感じる

束の間の微笑ましい時
冷たい冷たいその中に
温かな時はひそんでる

冷たい冷たい冷蔵庫
窓の外には真っ白な雪
連綿とただ降り積もる
寄り添いながら降り積もる

雪の下には新たな息吹

◆栄 茉莉（22） 東京都

タイムカプセル

下駄箱には 小さな運動靴が詰まっているのに
机には 赤と黒のランドセルが鎮座しているのに
黒板には 三月十一日の日直の名前が並んでいるのに
小学校には 不自然な静けさが満ちていた
マスク越しに鼻を刺すカビの匂い
でたらめな時間で止まったままの時計
行われることのなかった卒業式の気配

海が黒い壁になって押し寄せたのも
東京のための原子炉が爆発したのも
東京の小学校に通う私にとって
テレビの中できごとだった
教室の黒板には三月十二日が訪れ
小学校生活には卒業式の句点がついた
双葉南小学校の子どもたちは
着の身着のまま逃げ出して

小学校生活は読点で途切れてしまった
小学校というタイムカプセルを
故郷に置き去りにしたまま

彼らも避難先で大人になっているのだろう
私も画面を取り払って

被災地と向き合うようになり
いつの間にか成人していたのだから

長い冬の先にあった大学生活は

不要不急に振り分けられてしまった

入学式も新歓も行われず

六畳で完結してしまう毎日

無限ループで心をすり減らした

コロナ禍明けに登校してみれば

普通の大学生活を送る新入生の眩しさは

私の心に濃い影を落とした

私にも訪れるはずだった

四年間の形の影を

若者にとっての四年間は長い

人生の分母が小さいからだ

分母がさらに小さかった
小学生たちから奪われた
故郷で過ごすはずだった日々が
どれほど長いものだったか

双葉南小学校は震災遺構になる
社会からみた東日本大震災が
歴史の教科書に片足を突っ込んでいても

新しい駅舎や住宅ができて
復興の道を踏みしめていても
双葉駅前の時計はあの日から
二時四十七分を指し続けている
避難した子供たちの思い出が
止められてしまったのと同じで

避けようもない力で
閉じられてしまったタイムカプセルに
入っていない日々を
取り戻すことはできないけれど
タイムカプセルは開けられるためのものだ

私はずっと願っている
大人になった持ち主たちが集い
母校というタイムカプセルを
開けられる日が来ることを
宝物のような思い出と
再会できる日が来ることを

◆八海夢現（39） 北海道

ヒーロー待望

僕は仕事もせず
部屋に引きこもっている
添加物漬けの怠惰な日々なんて
腐りきった大腿骨みたい
言葉の溢れる電脳空間は
みんな涙の糸が狂ってる
愛を歌っている歌姫は
芸術の神アポロンのご機嫌よりも
再生数といいねの数を気にしてる
喋り続けることだけが価値のあるゲームなら

恥知らずのデタラメ野郎が優勝者

遠くの国で罪もない

子供たちが戦争で BANBAN

腐りきった世界なんて

ハエのたかる黒い汁の流れるご神木みたい

昔見ていたアニメのヒーローは

どんな悪にも屈しなかった

ヒーロー、いるなら出てきて

みんな貴方を待っているから

あなたが砕いて

この世界を

砕いて……

✽

鏡を見れば

何の力もない

年ばかり取った子供の僕が見えた

ヒーローはどこにいる

ヒーローは誰だ

どこの誰かは知らないけれど

誰もがみんな知っている

ヒーローは誰だ！

✽

僕は拳を

握り締めた。

◆白石香織（48）

茨城県

ねこのように

けがをした野良猫のように眠った 雨がザーザー降っている日に

る日に

◆空々菜（65） 東京都

私

死んだ私が棺の中で冷たい笑顔を見せる時
生きた私は涙を流す

生きた私が鏡の中で道化した笑顔を見せる時
死んだ私は涙を流す

私は生きているのだろうか
この身体も出来事も
すべては幻の中なのではないか

絶望の中で
生きていた私は
死んでもいいと思った
死んでしまいたいと願った

恐怖の中で
死ななかった私は
心を消そうと思った
私を消してしまいたいと願った

一直線の始まりと終わりが
苦悩と混沌の中で混じり合う

私は生きているのだろうか
幻想が作り出した4D画像の現実で
死ねない私が生きているのではないか

電源が切れたら消える現実

私が消えていく
はじめから何もなかったかのように

そして再び電源が入る

記憶を無くした私が始まる
無くした記憶の中に刻まれた私が
夢を問いかける
希望を語る
愛を求める

そしてまた：

いつかきつと

それは私を完成させるのだろう

きつと、それでいい

◆水木（16） 茨城県

星の音

星が落ちる音を聞いたことあるかい

それはきつと綺麗だと思ふんだ

ひとりには嫌いだけど

どうしてもひとりになりたくて

一二月一四日の真夜中

僕はひとり 丘に出た

街の光はなかった

大きな闇と無数の小さな灯火が浮かんでるだけだった

誰もいなくて

自分から望んだのに

涙が耳を掠めて地面へ落ちてった

綺麗な音がしたんだ

どこでも聞けないような音

涙のかわりに星が落ちて

僕の瞳は輝いた

星が落ちる音を聞いたことあるかい

それは涙が引つ込むくらい綺麗だった

僕は瞬きをする

星も瞬く 脆く儂く

一二月一四日の真夜中

僕は流れ星になりたかった

街の光はなかった

僕の大きな闇に流れ星が微かな火を灯してくれた

誰もいなくて

僕の息しかなくて

広い満天の星空に包まれていく

綺麗な体温おとがしたんだ

どこでも感じられない体温おと

明るい闇が僕を包んで

僕の心は休まった

星が落ちる体温おとを聞いたことあるかい

それは安心するくらい綺麗だった

僕の心は矛盾ばかりで

光と影の境目がないうみたい

すべてが欲しくて

ひとりが恋しくて

また広い闇を見上げた

綺麗な光がしたんだ

どこでも見られない光

大きな光は僕を照らして

また僕の光が生まれた

星が落ちる音を聞いたことあるかい

それはとても綺麗だったんだ

それだけで生きていける気がするんだ

◆堀場竜哉（44） 静岡県

けたたましいサイレンス

油蟬の音が燃えさかり

蒸しあがる草いきれ

だく汗を吸いこんだ黒い帽子のつば先から

ぼつりぼつりと滴りおちる

その液体の成分は

入道雲がそびえ立ち

鏡と化した水面にうつる

束の間の静寂に

黒い帽子の塩が沸く

忘れられた形見の残骸は虚しくも

清々しい雨に洗われて

何事なかったかのように

銀の奥歯で噛みしめる

味気ない空白を

深紅に刻まれた葉脈の毛細に爪をたて

たたりたりとしな垂れおちる

その液体の成分は

五十肩にのしかかる

夢のあとさき鏡にうつる

もがいてもがいてもがいたら

ツクツクボウシも騒ぎだす

忘れられた形見の残骸は虚しくも

清々しい雨に洗われて

何事なかったかのように

忘れがたい形見の面影はいつまでも

柔らかい殻に守られて

何事なかったかのように

◆橘いずみ（42） 島根県

懐かしいのは知っているとということ

信仰の意味を問う坂で

わたしの手を取るあなたを火と思う

明かりが灯るとひとは皆見つめるようにお前を見る

朝がくると萎んでその唇に似るあの花

夕化粧に覚えるなつかしみ

あなたが大人になればきつとそれも分かてるでしょう

するとあの花も折りです

触れたことのないはずの夜更けの傷を

この肌についた気にさせられる

わたしたちそうして夜を分かつ

やすかろうと

あなたの淡い水色の荷を預かっていた右手
坂の途中で落ち着いて

結び目を介してそちら側にわたってしまふ
何でもないように引き上げて

あなたが自ら首に提げたので

この坂道は終わりを告げる

まだ開かずにいる夕化粧

頑なな夕闇よ

つながれたところからときは継がれる

お前が諦めてほどかれるのを隣で見れば

我が身をそれに重ねるからよ

雌蕊のなれのはて

細く褪せた糸のからまるところに祈りがみえる

水色を預けた私はかろくなり

下り切らなくてもよくなつて

お前がころころゆく背を見送るかshれない

振り返ればまるで同じに

点々と

高いところまで

どこまでもつながっているのがみえる

種子

種子

転がり落ちて

◆末永 逸（61） 鹿児島県

かくれんぼ

金曜日の夕方に 家につれて帰る

日曜日の夕方に 病院に送り届ける

家へ行く 病院へ行く

母にとつて

どちらも 行く場所

帰る場所じゃない

紙袋からのぞくのは

シルクのバジヤマ

最期に着せてねと 今日託された

もういいかい まだだよ

裏山の急な土手 木の根をつかんで

子供八人で登って

松ぼっくりを拾った昔話

モテモテのモガだった 娘時代の話

お父さんと二人でラーメン屋を始めた頃

夜中に出勤して犬に吠えられて走った話

私が小さい頃迷子になって

心配で怖かったと声がかすれる

もういいかい まだだよ

お父さんが死んだのは

夢の中の出来事みたいだと

同じ話 何回聞いたかな

あと何回 聞けるかな

おかえりなさいと

いつもの看護士が笑いかける

また来るからね 金曜日に来るからね

帰り際に

これ見ると 放射線治療のために

おなかにマジックで書かれた印を見せて

母が笑う

もういいかい まだだよ

車のライトが反射して

雨の路面がまぶしい 国道十号線

もういいかい まだだよ

ああ そうか 助手席はからっぽ

もういいよ

泣いてもいいよ

あなたは、
とても生きづらそうだ

◆中原ゆうり（16） 高知県

二十三時三十三分のような人

あなたは、
かっこいい
あなたは、
おもしろい
あなたは、
一生懸命で
あなたは、
弱い

それから
あなたは、
時々力強い言葉をくれる

私より
おもしろくなくて、
私より
不器用で、
私より
寂しがり屋で
心配性のあなたは、

あなたは、
家族一のネガティブで
あなたは、
アラフィフには思えないほど繊細で
あなたは、
いつも悩んでる

苦しみを
鼻で笑いとばすように
恥ずかしそうに
心を込めて
言葉をプレゼントしてくれる

それは、
デパートの包み紙に包まれるような
きれいな言葉ではないけれど、
私の胸に入り込んできて
ドアをノックする

そして私は
目を覚まし、
一歩踏み出す

あなたは、
気品溢れる綺麗な言葉を使わないし
あなたは、
昨日の残りの納豆ご飯にお味噌汁を混ぜて食べる

あなたは、
文句を言いながら
小さな家をきれいに保ち
あなたは、

一日三食の献立に悩み
あなたは、
時々勇気をくれる

あなたは
美しい。

◆ 鱈 (22) 東京都

最近

遠くに見えた光が、星だったのかへリコプターの明かりだったのか
遮蔽物にさえぎられてよく分からないまま、歩を進めるほかなかった
再び見えたときにはもう、あの光は消えてしまっていた
星だと確信しなかった
もう、あれが何だったのか確かめる術はない
すれ違った人が君かどうか、分からなかった
追いかけて声をかけるには確信が足りなくて、ただ前に進んだ

再び会うことなんかなくて、
君にただ会いたかったのかな
もう、会う術はないのかもしれない

口からこぼれた言葉が
私のもものなのか

誰かのもものなのか

進んだ道が

選んだものなのか

選ぶほかなかったものなのか

今あつぶあつぶしているのか

只、沈んでいるのか

分かる日が来るのか

何も分かっていない

ただ、生きている

◆伊藤一男（76） 埼玉県

秘密

わたしには秘密がある

それを知っているのは両親と一人の親友だけ

父さんはそれを知った日にわたしの遺影を居間の棚に置いた

母さんはそんなわたしを認めて応援してくれている

大学を出てからわたしはすべての友人と連絡を絶った

わたしは隣の町のスーパーで働き始めた

ほとんどが主婦のパートのおばさんだ

開店前に商品の野菜などを店頭に並べる仕事の主だ

わたしは野菜の担当だけどもいままでも買い物をしたこともないし

料理だってやったことがないので野菜の名前を覚えるだけでも

大変だ

慌ただしい時間なので丁寧の教えてもらうことはできない

もたもたしていて何度もしかられる

怒鳴り返したくなる時もあるけど我慢する

仕事が終わって自転車で帰っているときに

駅の改札口を出てきた親友と一か月ぶりくらいに出会った

彼は大きな会社に勤めている

スーツを着てネクタイ締めて颯爽としている

缶ビールを買って近くの公園でふたりで飲んだ

彼はわたしの秘密を知っているただ一人の親友だそのことがわ
たしを落ち着かせる

仕事での荒んでいた気分が静まってくる

秘密を守るのはとてもたいへんでつらい

だけど理解してくれる人がいることで救われる

酔った振りして言ってみる「キスしない？」

彼は驚いたように目を瞪る

次の日野菜を並べているときに

「ピーマンの大きさをちゃんと揃えて」って言われる

わたしはつい言い返してしまう

「うるせえんだよ！」

滅びない道

廃線の鉄路を歩く二時間半

限りなく広がる田園風景

草ぼうぼうと生い茂ったホーム跡

空を覆い隠すほどに伸び切った竹林

薄暗く続くレールに時折り射す木漏れ日

汗ばんだ肌に心地よく通り抜ける風

歩くほどに文明から遠く離れていく予感

あたかもそこは別世界

このまま滅び去ってしまうかに思える道

朽ちた枕木を踏みしめ

迷宮はトンネルにと入り込んで行く

懐中電灯の明かりを頼りに暗闇を行く

トンネルを抜けると出口は行き止まり

足元を流れる川には橋がなく

先へは進めない

全19.81キロ

廃止から40年

とうとう繋げなかつた向こう岸

辿りきた鉄路の跡を眺める

ウオーキングを楽しむ人は絶えない

枕木は朽ち果てたが

繋げなかつた思いを

人の力が絆となって残す

◆小川 流（54） 神奈川県

杏と銀杏

あなたの背中の中の毛の色を

なんと呼んだらしくくりくるのか

胸とお腹は真っ白フワフワで 顔と背中は何、

と 続けようとして

ずっと 言葉は見つからなかった

ゆらゆら揺られ 六月の中

あなたと初めて住んだ鎌倉へ

初夏の緑に点々と 淡くぼやけた灯りが見えた

うん？ あ。

万緑に怖じ気なく抱かれ 枝先でちよこんと熟している杏の実

そうか、この色。この果皮の。ぼんやりした朱そのまんま

サッチャン サチ坊 サチコさん

あなたは あんず色の猫 だったんだね

物干し台の横に立つ 杏の木に登っては

ウォーンウォーンと呼びつけて

すごいね って 人間がほめ讃えれば

ま、楽勝だけど って 爪をといで見せてから

タンツ と外テールに飛び下りた

なぜ 十七年 気づかなかったんだろう

その実が染まったあんず色 あなたの毛色と同じだと

子猫のときは 淡い空色だったあなたの目

長じてからのその色は なんと呼んだら正確なのか

金とも 碧とも 違ってて

ずっと 言葉は見つからなかった

白いお腹に あんず色の背中と尻尾

遺された初めての夏は

記録的な猛暑で 観測史上初の真夏日連続を更新だって。

あなたが 梅雨の前に旅立った理由を知った気がした

ひと心地つく気温になったのは 神無月

あの夜 あなたを悼んだ横浜港へ

山手から山下公園に向かう歩道橋で

鈴なりの銀杏と 目が合った

あ。うん？ そうか銀杏。

硬い殻と薄皮を剥いだ実の 炭火で焼いたときの色

サッチャン サチ坊 サチコさん

あなたは ぎんなん色の目の猫 だったんだね

いつも 楽しいことを探していた

ピカピカ光る あなたの目

ねえ サチ坊

あなたがよく登っていた柿の木は

今年初めて 実をつけたよ 十五個も。

熟しはじめた柿の実も あなたの毛の色に似ているね

ねえ サチ坊

今年 あなたが嫌いだった雪は 降るかな

あなたの胸とお腹は 雪の色

真っ白で ふんわりで

陽射しにも 月光にも 銀色に輝いた

◆早希子（45） 沖縄県

発する言葉だけで

お互いの心が踊る

発しても お互いの心が

踊らない

踊らないどころか

疑問点や違和感しか残らない

これは何なんだろう？

これは何なんだろう？

発するだけで

わからないから

言葉数を増やしてみた

増やして増やして

わかりやすく

またはストレートに

だけど踊らない所か

踊りたい気持ちまで消えてしまう

これは何なんだろう？

これは何なんだろう？

伝えるはずの言葉が

使えない

Androidと

Appleみたいに

違うのだ

◆鈴木みゆう（17）

東京都

我と汝

理想 辛酸 悔恨

スーパーマーケット

横線だらけの参考書

A から E の身分制

大人の冷たい冷たい

野菜と見合いをする女

文字を往来する男

青果のキラキラとした

爛々とレジ袋

住宅から漂う生活の足音は

いつもそこに

◆黒澤悠剛（22）

東京都

面^{つら}

同じカオでいたいのに ずっと

トモダチの前では いいカオしちゃう

同じカオでいたいのに ずっと

知らない人の前ではビミョーなカオしちゃう
同じカオでいたいのに ずっと
えらい人の前ではむりやりニコニコしちゃう
同じカオでいたいのに ずっと

あ あー ああ はあ

あたしって ホントにめんどくさい

そう考えているうちに こんどは

どれが あたしの本当のカオなのか わからなくなった

はあ ああ あー あ

でも 待って

本当のカオなんか無い方が 楽かもしれない

もつと 早く気づけば良かったな

もつと 早く気づけば良かったな

そうコウカイしているうちに こんどは

みんなのカオが 信じられなくなった

あ あー ああ はあ

このカオも そのカオも あのカオも どのカオも

「あたし用」に作られたカオだ
もう わかんない
あたしは どんなカオをしていれればいいの

◆五十嵐安里（19） 東京都

緑色の象

窓の外に

緑色の象がいる

あ、こつちをむいた

なになっているの

夕日を食べにきた

どんな味なの

あまくて

しょっぱくて

ちよつと苦い

たのしい味だね

切ない味だよ

せつないってなに

明日がくるってこと

うれしいってことか
大人になるってこと

わくわくするってことか

きみの夕日は

まだ食べないでおくよ

緑色の象は

そういつていなくなった

窓の外は

もうすっかり夜

◆重ひろし(56) 岐阜県

ある日

ある日 何も無いつて 何も無いつて 気が付きました 薄っぺらで とても小さくて 奥行きも無い そこに 何も無いつて 何にも無いけど 任せておけば 色々出て来る 色々出て来るのだと 次第に 確信して行つたのです 何も無くていい 無くたって 空っぽでも 全然 気にしなくてもいいのだと 思えて来たんです 全く 価値が無くて 何にも無くて ただ 任せておけば いいのだと 理解したのです 意識しな

くても 意図して何かをしなくても 作為で何かをしなくても そんな必要は無いのだと 手を放しておくのだと 思えるようになったんです 突然です それは突然の事でした 深く深く 深く深く 光りも届かない 真っ暗で 深く深く 深くて 深くて 深くて 降りて行つたんです どこまでも どこまでも 一体 どこまで 降りて行くんだろうと もう 力を抜いて どこまでも どこまでも 降りて行こうって 気が付くと 大きな微笑みが 体を包んで 包み込んで 微笑みを透過して 光が 優しく優しく 優しく優しく 届いて来たのです 微笑みに 包まれていると 甘い香りの蜜が 伝い落ち 流れて包み込む 隙間から茎を伝って 垂れ落ちて行つたのです 甘い香りの蜜は 深い深い 静けさの中へ浸透して 染みわたってゆき その時に 全てが巡っている事を 何となく 理解できたのです 何も無くて 何も無くて 空っぽでも 総ては 繋がっていると 確信できたのです そこに何も無くて も 確信できたのです 任せておけば 深い深い 静けさの中から 生まれて来ると 生まれて来ると 確信出来たのです 生まれて来ると 確信出来たのです

◆シラサカタカノリ（59）

埼玉県

静かな海

あまりにも 静かだ

うるさいほどの 勢いで

軍拡の波が 力をためて

グオーグオーと 沖のさき

唸りをあげて 近づいて来る

遠浅の海は 音もなく

小さな子供の 声だけが

近くに遠くに

ひびいてる

あまりにも 静かだ

驚く程に

無気力で

驚く程に

支配され

驚く程に

楽しげに

あまりにも 静かだ

◆ブルックスキラニアリーヤ（14）

沖縄県

約束

いつも僕を笑かしてくる

僕はそんなあいつにうんざりする

泣き顔も笑顔に変わる

本当に

うんざりするほどにあいつが好きだ

そんなあいつが友達でよかった

そんなあいつと約束したから

「泣き顔より笑顔のほうが君に合ってる」

と、言ってくれたから

どんな時でも笑顔でいる

そう決めた

けど、

今日だけ許して

涙がとまらないんだ

あいつを天国へ送る日

今日、僕は

大好きなあいつとの約束を破った

仕方なかったんだ

いろんな感情が混ざり合って

気が抜けて

気づいたら

君を抱きしめ泣いていた

「どんな時でも笑顔でいる」

そんな馬鹿馬鹿しい約束を

あいつと交わしたあの日

今でも覚えてる

新しい感情が芽生えた日

友達のお前を

兄弟のようなお前を

失いたくないと思った日

いつかなくなる、
わかっていただけけど
信じたくなかった
信じれなかった

一度でいいから、
お前の泣いている姿を
挫けそうな姿を、
見たかった。

◆少雨（43） 東京都

雨の来訪者

雨が降っていた。これで三日連続だ。

私は雨が好きだ。

一人で住まうこの広い家には、音がない。雨音はいい。

規則的で、それでいて、突然、不規則になる。

今日の私はご機嫌、なのだけれど、三日前から、庭の一角から

視線を感じるような気がする。

ふむ、キツネカタヌキか……。作ったおはぎを縁側に置いてみた。もしかしたら、お腹が空いているのかもしれない。

しばらくして、縁側のお皿を見てみると、おはぎがない。

やはり、獣が腹を空かせたのか。片付けようとして、あるものに目が留まった。

お皿の下に花びらが一片。

今は初秋。寒桜か。だが、我が家には桜はない。

何とも儂いその匂いは私の心を躍らせた。

わざわざどこから持ってきたのだろうか。随分と律儀な獣だ。

翌日は晴れだった。どうだろうか？

今日も獣は来るだろうか？

いつからか忘れていた期待が湧いているのに驚く。試しに、おはぎを昨日の場所に置いておく。

しかし、その日は来なかった。

翌日も、翌日も。

そろそろやめようか、ただの行きがかりだったか。

人生で一体いくつのものが通り過ぎていっただろう。

そんなことを考えていたとき、雨降り。

最近、雨が多いな。

そんなことを考えながら、お皿を見ると、おはぎはなくなっていた。

お皿の下には、淡い桃色の花びら。秋明菊だ。。これは庭にある白とは違っていた。

ふふっ、と笑ってしまった。

それから、雨が降る日は、おはぎや草餅を置いておいた。そうすると、必ずなくなり、お皿の下には、色とりどりの花び

ら。

律儀な来訪者。

私はそれらを押し花にすることにした。

昔から手先だけは器用だった。

そして、その押し花帳をお菓子の横にそっと置いた。

◆水口怜美（15）

東京都

観る世界

秋が来て

心は軽くなり今を生きる

冬が来て

面持ちが良くなり自信に満ち溢れる

春が来て

不安な気持ち膨らみ続け

夏が来てしまう

誰にも言えない悩みがある。と言えばみんな心配し、こころに

寄り添うだろう

だけど種を話せばどうだろう

皆一斉にそんなことか、と離れていくはずだ。

駅まで精一杯歩き、前に進んだ

でもあの時から何もかも変わってしまった

もしかするとあの時というのはもっと昔だったのかもしれない

いつものように電車に座りあの駅まで目指す

何かおかしいと思った

心臓が激しく動き全身の熱が冷めない

毎日毎日同じだった

明日は思い切って病院に行こうと思って夏が終わった。

九月になっても何も変わらなかった

いや、もっと悩んで気持ちが重くなったんだ

だけど耐えて耐えて十一月が来た

毎日楽しくて全てを忘れた。

春が来て全て元通りになってしまふ

さらに他の悩みが二つ増えた

夜になるとやはり考えてしまう

毎日、楽な方法や決行の仕方考えた

でも結局、最後までできなかった

未練しかないのだろう。

自分だけこんな不安に悩むのは意味が分からないし、皆がこうなり不幸になることを望んだ

もう我慢ができなかった

一部だけ打ち明けた

期待して言葉を待った

「でも、それっていいことじゃん」

その言葉にどれほど落胆したかわからないだろう

毎晩悩んで失望していたのに他人からすればいいことだなんて

素直に受け止められるだろうか。

あれからもう一年経った

来年からはまた同じことになるのだろうか

だけどいつの時も本当にしんどくなったら死んでしまおうとい

う考えは変わらないだろう。

決行した時も実際には死ねなかったのだから

◆瀧口優菜（14）

広島県

時間

今この時、世界中の人々は何をしているのだろうか

早く感じる時間

遅く感じる時間

時間の感じ方は人それぞれ

今この時、笑顔な人

今この時、泣いている人

今この時、誰かを助けた人

今この時、苦しんでいる人

人々は同じ世界で同じ時の中にいる

けれど、みんな違う時間を過ごしている

自分が今していること

自分が今感じていること

それは、今の自分だけにあること

たとえ、誰かと全く違う時間を過ごしていても

誰かとほとんど同じことをしていても

今過ごしているこの時間は

あなただけの時間

昨日嫌なことがあっても

今嫌なことがあっても

これからのことが嫌でも

今この時、人にはその人だけの時間がある

もしかしたら明日死ぬかもしれない

いや、五分後に死ぬかもしれない

そう思って、今のこの時間を自分のものにするのだ

そして今この時を全力で生きろ

今この時があなたの大切な人生だから

◆武重路子（74）

神奈川県

静かな午後

川を片方だけのゴムぞうりが流れていく

昼下がりの坂は静止画のようだ

その中を私だけが歩いていた

振り向くと埴輪がポコポコとついて来る

がらんだ目の中で

咲き残った百日紅の花が揺れている

遅れて出て来た蝉が一匹鳴いている

にぎわいがなくなった海辺に

今年初めて下りていく

私は年をとってしまった

陽盛りに汗が噴き出る

昼下がり

人通りのない別荘地の午後を歩く

影だけが張り付いている

路地の奥に海が見える

潮が引いて岩場がむき出しだ

子供が二人　しゃがんで何かをしている

女の子が男の子を呼んでいる

あれは私だ

やせっぽちの十才の私

男の子は隣の清ちゃんだ

潮だまりに残っている

ヤドカリや小さなタコを採っている

あそこにあるのは

現在いまだけを生きていた本当の時間

ふいにツクツクホウシが鳴き始めた

晩夏に遅れて来たセミ

一匹だけで鳴いている

きょうはもう少し歩こう

◆今村瞳子　神奈川県

穴を掘っている

あたたかい穴の中で今日もひとりうづくまる。

眠る。

春を待つアナグマのように、夢を全身でつかまえて、眠る。

穴はとても暗い。暗くて、土の匂いにする。

しっとり湿った壁が、ゆるく曲線に張り出している。

もぐりこむために、

ちようどいい圧迫感があつて、2人を許さない場所として、

穴はある。

穴は行き止まりだ。

どこへも繋がっていない。だからここが居場所になる。

ここは分岐点ではない。交差点でもない。

ひとり分の夢と身体しか入らない。それだけ抱えて、

みんなは穴にやってくる。日常のすき間を求めてやってくる。

かつて穴には入口があった。

でもそれも遠い昔の話だ。もうふさがつて、光明は見えない。

眠りから覚めて伸びをするまで。

空に腕を伸ばすまで、穴は塞がれたままだ。

そしてずっとふかふかに包まれながら、みんなは眠りこけてい
る。

建物と建物の間のフェンスから夏をみたあの日にも、

同じすぎ間があった。

この眠りは、そういう一瞬の、梯子の段と梯子の段の間みた
いなものだ。

だからみんなは眠り続ける。

いずれ来るめざめを前に、ひたすらに深く、ふかく、深く。

◆岸本佳奈(16) 愛知県

赤と黒の時代

ある戦争がありました

罪なき人の灯が消えて

誰かの糧になりました

ある戦争がありました

数多の兵士突撃し

誰かの肥やしになりました

昔に戦争ありました

数多の人の火が消えて

誰かが嘆き濡れました

昔に戦争ありました

数多の兵士特攻し

誰かの声が消えました

悲劇が叫び咽び泣く

惨状再び繰り返し

新たな灰の歴史生む

灰の歴史を繰り返す

新たな歴史の一頁

盲信狂信繰り返す

新たな歴史の一頁

赤の時代と黒の時

空は汚れ濁りきり

血の雨燦々降りまして
多くの灯火降りました

繰り返された惨状は
繰り返された惨劇は
一体誰の為なのか
どうして皆の為になる

◆仁後林太郎（57） 石川県

ニツカ

道を歩く
右から車が出てくる
道を歩く
左から車が出てくる
道を歩く
左右から前から車がくる
と思つたら背後からも来た
どうなっている？

どうして私が道を歩くと
襲いかかるかのように
車が自転車が人が

あげくの果てには
リヤカーが
私の邪魔をする

リヤカーなんて
滅多なことじゃ
お目にかかれないぜ

被害妄想か？
考え過ぎか？
精神的に病んでいるのか？

私が通り過ぎたあとは
ネコの子一匹通らない
どうして私の前進の邪魔をするのか神よ
神様のいやがらせとしか

思えない

でも

歩いているときの

障害や危険さえ

避けられたなら

他に嫌がらせは受けていないのさ

そう考えたら

仕方ないのかなあ

そう自分に言い聞かせ

今日もまた

歩く歩く

地下鉄の駅まで歩く

駐車場や

店から出てくる

車たちを避けながら

障害物競争なら毎日やるさ

引越

あさつて

引越だ

四年住んだ

シェアハウスから

シェアしない

一人暮らしへと

チェンジする

初めて

シェアハウスに

来たとき

ちよつと

ドキドキした

同じ屋根の下

まったく

しらない

ニンゲンと

セイカツする

なんて合宿みたいなんだ

個室はあるけど

シャワー

トイレ

キッチン

セントッキリ

みな共同だ

仲良くできるかあ

モメゴトはイヤダ

と思っていたら

共同なだけで

全くカンケイないってカンジだった

そのうち

メンバーが入れ替わり

だんだん日本人が

減っていった

中国人

ベトナム人

あと、どこかわからないけど

黒い肌の

人たち

唯一の日本人は

ボクのホカニハ

沖繩のヒトだけ

ココって

ぶっ 飛ぶ轟音
血血血血

死死ヅヅ+

腸が垂れ下がる

鮮血鮮血
血血血血

ドスグロイ血

死死ヅヅ+

ぶっ 飛ぶ轟音
血血血血

死死ヅヅ+

白色の陶器の皿に

真っ赤な鮮血

いや

ドスグロイ血糊

血血血血

ぶっ 飛ぶ轟音
死死ヅヅ+

病院にもミサイル
血血血血

打ち込まないとなあ

下に地下通路があるからサ

悪魔の論理
血血血血

死神の哄笑

ちよつと絵文字使うのやめてよ

悪魔も死神も

謝るか！アホ！

角

角には魔性がある

角を曲がると

それまでと

全く違った風景が

広がっている

普段何気なく通る道

ひとつ角を曲がるだけで

世界が変わる

角からは

何が飛び出すか

わからない

人、ボール、子ども

自転車、バイク、車

柿の木の枝が伸びているかも知れない

闇バイトの盗賊たちが逃げて来ているかも知れない

美しい女性と遭遇するかも知れない

ホームレスが寝ているかも知れない

曲がる角をひとつ間違え

新しい局面に出会うこともある

逆に見たこともない道に

とまどう人もいよう

角の魔性は

私たちを幻惑し

位置情報の目眩を引き起こす

私たちはどこにいるのか

わからなくなり

立ち止まらざるを得ない

だが世界は変化の連続だ

魔性の角が

連続して私たちの目の前に

立ちはだかる

その時立ち止まるのは

自然なこと

立ち止まって

自分の位置を確かめて

どちらへ歩み出せばよいか

考えをまとめてから

前進すればよいではないか

角には魔性がある

しかしその魔性は

私たちに希望を与えてくれる

そんな存在かも知れない

◆佐原龍誌（73） 東京都

年の瀬のウインズ（場外馬券場）にて

息がかかるほど 顔と顔を突き合わせながら

しわくちゃになってしまった競馬新聞に 見入る人たち

そんな中の一人として 年の瀬のウインズに私はいる

出走30分前の雑踏の中で

何を本命にして 穴馬は何番になるのだろうか?!……と

ポケットの小銭をまさぐりながら 自動券売機に向かった

出走5分前のけたたましいアナウンスが流れる

イメージしたレース展開に期待を込めて お金を入れる

何枚かの馬券が 券売機の坂道を勢いよく滑り落ちてくる

さあ!!今年の運命を賭けたレースが始まる

天井に吊るされたテレビ画面を じっと凝視する人たちから

歓声と怒声とが入り混じった 轟音ともいえる脂ぎった叫びが

耳をつんざく

私の手に握られた数枚の馬券は 湿気を帯びて

ねじ曲がっていた……ああ……また駄目だった!!

大いなる期待は 大いなる絶望の淵に追いやられ

やがて 深いため息に変わる

わずかに残ったお金は 帰りの電車賃と少々の酒代となる

居酒屋の片隅で 汗の噴き出したホッピーを飲む

ひとときわかく わびしさの味がする

北風が肋骨の隙間を 通り過ぎて行くような不安を感じながら

……

一攫千金の夢も希望も またも潰えた

歩行もおぼつかない足取りで

私は おけら街道を歩いていた

雨季を告げる雨

春も盛りの頃だった

例年になく早い桜の開花は どんよりとした曇天の空模様を

一気に明るくするようで清々しかった

爽やかな春風が頬を通り過ぎる

草花が芽吹く生命の到来を感じさせる…そんな日だった

私は小さな庭に出て 屋根間に見える空を眺めながら

何思うこともなく 移ろぐ時の流れの中に居た

その時 居間にある電話がけたたましくなった

娘からの電話だった

久しぶりに聞く娘の声は 何時になく弾んでいた

「もしもし あっ!!お父さん 突然なんだけどどうとう妊娠したよ!!」

まだ男の子か 女の子か はわからないけれど——二か月ちょっと過ぎたんだ」

という話だった

娘の声は明るかった 喜びに満ち満ちているように

嬉しかった 私はそっけなく「そうか それは良かった」と言

って

取り合えず妻に電話を替わった

私は腹の底から湧き出るような喜びをかみしめながら

父親としてのつまらない落ち着きを 示していたかったのかも

知れない

振り向けば 娘は結婚して十年の歳月が流れた

三十歳を過ぎた辺りから 中々子どもが授からないと

病院通いを始めていた

そして一念発起をして 不妊治療に踏み切っていたところだった

それから数年が過ぎていた

それがとうとう妊娠したというのである

つわりも始まって 毎日吐き気で大変なのだと言う

その割に娘の声に悲壮感はなく 喜びがそれを上回っているように感じられた

1

私に孫が出来る

ジイジイ おじいちゃんと果たして呼んでくれるだろうか?!

と想像するだけで私は嬉しかった

それよりも何よりも——娘が母親として新しい生命を授かった

ことに

感謝をしたい 次に紡ぐバトンを手渡す喜びを感じる

娘は これまでどれ程の不妊治療を受けたのだろうか?!

詳しいことはわからない 私は妻を通しての情報から

想像と推測をすることでしか…娘の願いを祈るだけだった

それがようやくの事で実を結び 叶えられようとしている喜び

は

どれ程であろうか?!

まるで くだらかな坂道を——雲のじゅうたんに乗って

まどろみながら眺める風景に似ているような気がした

優しい風景だ ふんわりとした回転木馬に揺られているような

たおやかな風景のようだった……

その日から二週間後のこと——

娘からの電話を受けたのは妻だった

この日は 娘の定期健診であったようだ

電話は長い沈黙と暗い言葉のやり取りが続いていた

「妊娠したお腹の赤ちゃんは 心臓はかすかに動いているけれど

ど

少しも成長していないの…」という娘の話だった

妻は泣いた シクシクと泣いた…共に言葉のないままに電話は切れた

しばらくして 赤ちゃんの心臓が止まるのは 時間の問題だという医師の話も

妻から聞かされた

不妊治療では 着床してもこうした事がしばしば起こりうるのだということも

聞かされた

私は行き場を失った野良犬のように 落ち着きなく身体が震えた

た 哀しみと怒りで身もだえながら…一縷の望みを祈るばかりだった

2

この世には 神も仏もない

いるとするならば あの世でようやく巡り合うことが出来るのかも知れない

私は 気持ちの整理のつかぬまま ただただ願うばかりだった

やっと授かった生命の鼓動を止めないでくれ!!と…

それから数日後 娘からのメールが届いた

「この子が私のお腹の中で 一生懸命に生きている限り私も頑張りたい

つわりが余りにもひどければ中絶しても構わないですが——と

担当医の先生に

言われたけれど 私はこの子と共に最後まで頑張りたい」という内容のメールだった

私は その返信に頑張れとも 何とか乗り越えて欲しいなどと

書くつもりはなかった 娘はもう充分に小さな身体で精一杯に頑張っているし

苦しみに耐えていることはわかっていたからだ

私は親として 父として 娘を慰める術を持ち合わせてはいないことに気が付くのだった

勇気づけることもできない 自分の弱さに気が付くのだった 現実の厳しさと苦しさを ただ受け入れることしかできないという納得だった

それから十日後…娘のお腹の赤ちゃんの心音が止まったことを聞かされた

外は雨だった…シトシトといつまでも続く雨だった

その雨は この世で巡り合うことの出来なかった母親としての娘と

この世に生まれてくることの出来なかった子の…哀しみと寂しさの涙のようで

つらかった…娘とそのお腹の世界でしか生きられなかった子を繋いだ心音は

まるで 雨季を告げる雨のようにいつまでも響いていた

◆芦田晋作(49)

東京都

帰路

目指す

去る

巣立つ

羽ばたく

舞い戻る

新宿駅の人ごみに行く

世の中に

あんな女性もいるのかと

ゆるんだ心で

缶ビールの

空き缶を

手にして

花の都の東京の

夜景をまぶたのシャッターで切る

電車ごと離れながらの

寂しさも

県の境のたびに

薄まっていく

帰ることに

慣れていく

この旅の

幕引きもあと

一駅で

何か

事故でもない限り

私は観念し

電車を降りて

見上げれば

いつもの駅に

北斗七星

全部、全部だよ。

少年の遊ぶロボットみたいな、

少女の転がすビー玉みたいな、

溪谷を流れる川みたいな、

木陰の陽だまりみたいな、

母の柔らかい手みたいな、

父の力強い声みたいな、

道端に咲くヒナゲシみたいな、

大空を舞う鳥みたいな、

恋人の接吻みたいな、

友人と組む肩みたいな、

淡い夢みたいな、

眩しい希望みたいな、

◆依田敦実（25）

東京都

影

鳥は見えないのに
影は動いているの
何も見えないのに
私は生きているの

◆梅本 葵（17）

広島県

綺麗になりたい

綺麗になりたい。

顔とか、身体の話じゃないよ。

綺麗で、綺麗で、

涙が出そうなくらいに綺麗なやつだよ。

みんなの中にある綺麗をかき集めてさ、
きらきらで、

あつたかくて、

素敵なやつにさ、
なりたんだよ。

それになつたらさ、

みんなが綺麗だなんて思うたびに、

私は生きられる。

みんながそれを思い出すたびに、

私はもう一度生きられる。

何回でも生きられるんだよ。

綺麗になりたい。

私は、みんなの綺麗になりたい

◆西ヶ開公一（51）

京都府

ひぐらしの声

かなかなかなという

ひぐらしの声を聞くと

胸をキュッと締め付けられ

泣きたいような心細さをおぼえる

大切な約束を忘れてはいないか

なすべきことをし忘れてはいないか

いつもそんな不安に襲われるのだ

けれど夕暮れの部屋は孤独を一層浮き彫りにする

癒しがたい淋しさに目を閉じると

すんでのとところで止めていた涙が

じわりと染み出して目尻を濡らす

深く息を吐くと

壁にもたれた背中がうっすらと汗ばむ

数えきれないほどの指切り

誓い合った目と目

未熟な約束たちは壊れやすく

儂げなオレンジの空に滲んで消えた

記憶の中の日焼けした少年が私を睨む

交差点で背を向けた美しい黒髪

多くのものを置き去りにした

裏切ることが若さだとうそぶいて

私の心象風景はいつも黄昏

背信と後悔の溶け合う水平線で

オレンジの渦に翻弄され続ける卑しき心よ

おまえは何に救いを求めているのか

残照が涙痕を微かに照らす

時が切なく光るさまを見ていると

私を煩わせるすべてを許せる気がする

かなかなかなの声が聞こえる黄昏の小道に

今こそ忘れものを取りに帰らねばなるまい

それがたとえ険しい道のであるとしても

だから

どうかまだそこにあつてくれ

傷つく用意はできている

◆疾風向（20）

兵庫県

受容

このあたりの犬が特殊だと　まず保険をかけておく

このあたりの猫が特殊だと　まず保険をかけておく

犬と猫の順番も　分かり易く五十音順にした

身の安全確保であり　他意はない

少し前まで　猫の軽妙で淡白な哀愁漂う姿に惹かれていた

犬派か猫派かの問いでは　いわゆる猫派側にいたといえるだろ

う

犬の単純さと　尻尾さえ振れば楽に生きられるような感じが許

せないのもあった

ふと　猫の悟ったかのような　一歩引いた受け身姿勢が許せな

くなった

考えてなくても　生きる為だとしても　どうも憎くなってしまう

った

犬の一生懸命さと　眩しい眼差しと素直さに目を向けた

制限しているのも　変わったのも　自分だけ

何も許せないのも　許してあげられないのも　ずっと自分だけ

だ

だからこそ消えないことに やっと気付いた

混迷

悪念殊更に挽げるほどの絶対

翹首ではなく 実質後退的動的平衡

宿怨と傾慕を 蹉跌の諧謔に矯めて幕無

アンジュール

空を歩いた 茄子紺がアスファルトに溶け込んでいる

斜陽は 季節外れのハロウインを始めようとする

水が飲みたくて 昨日の雨の残りを舐める

魚になって 夕まづめをやり過ごす

夏は終わり 息が苦しくなった

傷は汚すぎた 涙は止まらなかつた

叫ぼうにも 声は出なかつた

意味などなかつた 何もなかつた

黒衣を纏った新月は 二度と姿を見せなくなつた

涙

頭では分かっているも 何度でも悔しい

きまつて思い出しては苦しくなり 朝夕悲しくなる

何日も陽の光を浴びていないからだろうか

私の手は カーテンに手をかけようともしない

最小限の光で 重い空気を独り呑み込む

何に苦しんで 何に悲しんで 涙が流れるのか

止め方を知りたくなるほどに ただ干からびていく

怒りも もどかしさも どうしたって消えてはくれない

レール

興味 関心などない

何も持たない者は 手法を知らねば生きていけないのか

話したいことも 聞き出したいこともない

世界線はいつまでたつても平行線のままで 僕は疲れた

起きようとするのに どうもこの時間に寝てしまう

悪循環の底なし沼が頭さえ解放してくれない 息ができない

この選択は 意思とは分立しているが 答えにはたどりつけない

い

◆岩尾宏紀（47） 大分県

巾い浸透圧、廻せ黒棧トート
〜愛犬ロビンに捧ぐ〜

上下左右包囲したSUS底鉾

拝謁091秀逸バブロフの犬

秒で反応バンク魂シユガーレス

甘くない儂い美と奇と血の詩

瞬時注ぐ円周と命はチート級だ

バミューダ三角形にも消せない

theToreModel K 黒棧 PUNK 仕様

シヨートステイ どうしようとして

捨て置く危篤の憶測

Model K

theClutchMr BoxScustom 収納可能

BagInBag&BackToBack 順応溢れる慕情

常時、事象は座礁し済んで燻んで鑑みて

漆は瞳、黒真珠のように潤んで

長さ40 cmの細いハンドルを

二点で留めた底鉾が外れて落ちる
拾って締め直す徴候

刈入れ時は概ね三月 書割にして尾根結び
早稲蜜柑のモチーフ挽ぎ

手狭な離反、器用なリズムで

ラクリエート、ブン廻す

反復の日常非日常 再び久遠の旅へ 当面

ずっと出番だバンバータのトート

鳥除け網の向こうに控えるワイヤーは

並行宇宙の切り取り線

Model Kの回転、仮初に加速

世知辛い四阿より鬼没既視感

銀髪美犬ロストの我々に

出迎え無い午後8時が

容赦無く押し寄せる

↓

① とるに足らぬ、「今」から撤退

② とどまり、専用悲壯の咀嚼

双方続行、弔い浸透庄 やがて

小さな弓状の島国を線状降水帯が覆う

この世界線はロビンの死を悼み、泣いている

号泣、嗚咽 あたりは霧と煙る

「もうそのへんにしときなよ」

否応無く 晴れ間から切れ目なく梅雨明け

ああロビン、死んでも美しいだなんてあんまりだ

認識できるかサイドキック、完璧な犬生を弔う回転去来

慎み深く廻れ黒棧トート おくる側など束の間

いづれ新鮮な林檎、沢山持つてそちらへ

◆伊藤寛納(21) 大阪府

逃げよう 後ろなんか気にしないで 夜明けの空の下

ニイニイ蝉の 掠れた声が 恋しいなんて思いたくない

どうして 神様

この世に 男と女 しかないの

どうして 神様

私たちは 改札前で キスもできない

あの子が 泣くのを 我慢するくらいなら

私 幸せ なんて いらなわ

逃げたい 後ろなんて気にしないで 夕暮れ 映る海の中

海月が死ぬ時のように 透明になって 消えてしまいたい

どうして 神様

私たちは 気味が悪いの

どうして 神様

手を握るだけで 笑われる

あの子の 涙を 止められるのなら

私 永遠 なんて いらなわ

◆世良イオリ(31) 茨城県

「3.1415926……」

大丈夫、

大丈夫だよと、

誰かが囁く。

数学者からの贈り物。

孤独なあなたへの贈り物。

独りであるという、現実。

独りだったという、過去。

独りだと感じるであろう、未来。

独りだと悟る、瞬間。

大丈夫、

大丈夫だよと、

誰かが囁く。

数学者からの贈り物。

たとえ愛が息絶えても、

たとえ全てに失望しても、

永遠に続くものがある。

愛より続く円周率。

今日もどこかで続いている。

数学者からの贈り物。

：

◆辰己尚平（44） 大阪府

散骨

詩人は

最後の詩を書いたあと

何かを悟ったように

微笑んで死んだ

墓標には

こう書いてあった

海辺に並ぶ

白い屋根

青に生える

崖の向こう

言葉遊びが過ぎて

溺れる

そうでもない

伸びしろ

命が尽きるように

凡庸な

凡庸な……???

——文字が擦り減って

——解読不能

………

書くためには

ずれることが

必要だが

生きるためには

そうでもない

ずれが終わると同時に

長い夢も終わる

それが

私のすべてだった

……

いつか

この石碑も

朽ちていくだろう

この詩人が

生きた証も

砂となって

風に乗って

海にばらまかれていく

遅すぎた

散骨のように

自分の選択に

飾りを付けて

戦争

誰のもので

無くして

風に揺られて

涙は乾いていく

運命だと

後で名付けられるような

ぼんぼりが

暗闇で揺れるような

他人事

自由は

不自由の果てに

訪れるくらいが

丁度いい

人間には

手に余る

ずっと

銃をぶっ放すしかない

戦争は不自由を

表しながら

そうでない

選択肢を

常に与える

精神安定剤

自殺も

他殺も

減少傾向

平和はきつと

人間の手に余る

自由は

きつと

人間の手に余る

占いも

神様も

お金を吸収

不安を吸収

自由を呪う

人の手によって

生みだされた
お金を回収

それで

武器を買えよ

次の戦争の準備をするんだ

綿菓子

下の方で

溶けてなくなるように

僕は

何かに溺れながら

必死で

何かを叫んでいる

言葉にもならない

届くような

届かないような

諦めにも似た

煙が遠くに

立ち昇っている

◆魚群探知機（20） 東京都

屋上

ハロー、どうも

調子はどうだい

なんだいびつくりしたフリしてさ

早まるな、って

なんでそうやって決めつけるかな

屋上の縁がなんだったんだ

君たちの綱渡りが下手なだけだろ

いちいちうるさいなあ

それにしてもいい場所を見つけた

どん詰まりって感じだ

にっちもさっちもいかなさそうだから

だけど、君たちだってそうだ

僕が死ぬまで動けない

だからしばらくみんなでどん詰まり

わくわくするね

いいね、スマホを向けてるそこの君だよ

でも残念、思い通りにはさせてあげない

君の自慰に興味なんてない

まったく、僕たちほんとに殺人が上手だよ

わらわら人が出て来た出て来た

見出しの準備の方はどうだ

良さそうかい、そうかい

「阿鼻叫喚！真昼間の飛び降り！」

てなところかな

そうだ、とっておきの情報をあげよう

僕はハタチの上京組だ、どう？

真相の究明が急がれそうだから

でも、死んでなんかやらないから安心しろよ

飛び降りたりなんかしない

飛び上がるんだ

君たちの平べったい物語に付き合うつもりはないからさ

死んでなんかやらないからさ

帰れよ

いつもみたいに無視しろよ

それとも根比べしてみる？

どうせ僕が勝つに決まってる

僕が飛ばない方が幸せなんだよ？

見届けた方の中から抽選で五名様に義務を与えます

ここに立つ義務ね

どうする？飛んでみようか？

いいね、急にざわざわしだした

いいよ、行きなよ

こっちでひっそりやつとくからさ

行ってらっしゃい

なんだ、歩けるんじゃない

全然どん詰まってるじゃないか

いいよ、行きなよ

行ったらいいさ

それでさ、全然無理ならいいんだけどさ

これからここを通る時は

ちよつとだけ見上げてくんないかな

もしかしたらまだいるかもだし

そしたら手でも振ってくんないかな

それでもういなくなったらさ

花とか全然いらなからさ

もうちよつと幸せになつてくんないかな

それだけでいいからさ
それが結構いいからさ
変なやつでごめんね
こういうやつなんだ、もともと
こういうやつにしかねなかつたんだ
だからごめんね
ばいばい
お別れだ

◆空見タイガ（29） 大阪府

輻輳

紙飛行機をアップデートしました

- ▼印字機能を追加しました
- ▼一瞬で届けられるように修正しました
- ▼遠くに飛ばせるように修正しました
- ▼不特定多数に飛ばせるように修正しました
- ▼自動生成機能を追加しました
- ▼自動返信機能を追加しました

でも
そんなに
届けたかったでしょうか

届けるために
折ったのでしょか

どこまで飛ばせるか
わくわくして

折ったのではないでしょうか

今はただ

飛ばしてすぐに

衝突し

ぼとつとその場に落ちるだけ

◆荒井一衣（38） 茨城県

鉄砲百合

鉄砲百合が撃ち合いをはじめた

美しい銃口から優雅な香りが放たれる

誰かが逃げることもなく

誰かが怯えることもない

それは静かな撃ち合いだった

それは平和な撃ち合いだった

◆田崎亜弥（45） 大阪府

東京と大阪でうだうだしていたらあつという間にもうすぐ二十歳

朝にお化粧

腕に入れ墨

せっけんに彫刻刀

夜中に課題

昼に手洗い

六甲に吹き降ろす風

登山客に噴火カレー

花屋にお稽古バッグ

夜に新宿

腕にバンダ

夜行列車に静岡茶

連絡網に黒電話

真夜中に夜食

牛丼にカレー

東京に寛子あり

銀杏に赤門

明け方に食器洗い

弁当におしぼり

大阪に亜弥あり

アマバンドに寮生

ここに水入らずあり

ここに水入らずあり

ここに水入らずあり

ここに水入らずあり

ここに水入らずあり

ここに水入らずあり

ここに水入らずあり

ここに水入らずあり

水もってこい、め組の人

つるはし、つるはし、つるべおとし

水入らずありますよ

おいでなさい

家から出なさい

免許を取って

羽ばたきなさい

え、おれ、パイロット？母さん

車の免許も持ってないのに

飛びなさい

飛びなさい

飛びなさい

◆和泉次郎（47） 新潟県

リフレイン

年を取ると

人は同じ話をしてしまいます

誰に何の話をしたのか

覚え切れなくなってくるのです

また一方で

自分の好きな話を

何度もしたくなります

それは

自分に限ったことではありません

他人の面白い話でも

何度も聞きたくなります

しかも同じところで笑ってしまうのです

古典落語は良い例でしょうか

私は若い頃

古典落語が好きではありませんでした
どうしてオチが分かっている話を

大人たちは初めて聞いたかのように

喜び笑い拍手をしているのか

全く理解できなかったのです

しかも大人たちの喝采する光景は

今に始まったことではなく

二百年も続いていました

この国に生まれて

良かったのでしょうか

しかし

年を取った今

私はこう思うのです

型にはまったものには

身を委ねられる安心感があると

人生は長いものです

長い道のりには

所々にベンチが置かれています

年を取ると

ベンチをみつけるたびに

つい腰を下ろしたくなるものなのです

私はこの話を

前にしたかもしれません

◆ミキコトホ (51) 広島県

惑星アクトレス

惑星から彼女は落っこちてきて

カタコトの話し言葉で

愛を演じていた

手持無沙汰の日々がふたりを滲ませて

一体化した雫のように

宙ぶらりんになった

ああ Yes, fallen in love フワフワと

恋に落ちた

ああ shing-a-ling-a-ling 〇チヤチヤ

寒空の下

どこかぎこちない

惑星から彼女は落っこちてきて

ある日突然どこかへ

消えていなくなった

I miss you なにも手につかない

恋しくて

あぁ shing-a-ling-a-ling 聴こえてくる

星空の下

たぶんまた会える

必要なものを考えてみた

足りないものを考えてみた

◆さと (18) 埼玉県

スピッツ

そよ吹く風の丘の上で

スピッツが鳴いている

地に落ちた木の実は

ゆっくりと芽を出し

枝分かれした先で潤いを待つ

日柄なんて気にもとめない君は

いつにも増して天真爛漫

ナラタージュを愛する僕に

いつでも今を求めてくる

充足した心が辺りに広がって

今日はやけに世界が眩しい

シロツメクサのかんむりは

困憊した僕の心を

そっとなだめる

君が小さな灯火を持って顔をゆるめる

気づけばもう黄昏時

僕はつられて微笑んだ

◆佐藤花美(31) 石川県

それは

それは国々の旗

でもそれはバスマット

それはしなしなの葉巻

または太陽の国の襟巻き三本セット

もしくは床屋さんの目印

でもそれは朝食のペーコン

それはティッシュケース

と見せかけて傷ついたウエハース

でもそれはいつもの映画館

それは水平線の夜明け

座れば飛べる魔法のカーペット

誰かの三つ編み

世界一丈夫な柱

海の足跡

虫たちのねどこ

それは間取り

それは雨ふり

知らない国の屋根

空から見た暮らし

でもそれは朝のカーテン

◆松村玲子(83) 東京都

真の神につかまって

学生時代私は九死に一生を得た

その為その印象が強く、仲々真の神に帰れなかった、一日々がイラタしたり、何処に自分の身を置いたらいいのか、あちらでもない、こちらはでもないと迷った、年のせいもあり、身体はだるく、身の置きどころに悩んだ、そんなある日、本でカリスと言う言葉の意味を知った、カリスとは恵み、自分で得たものでなく、向うから来たもの―

そうだあの主だと分かった、それから一週間、その主に従った、そして今日、私はあなたを捕らえたと、主は語った、証はあった、私は少し安心した、何かするときは祈り、食事は主の体を思い、自分のペースで歩み、ささやかだが自分の務を果たして生きる、それを私は今実感している。

セルフコントロール

今日は何時ものように、午後本を読んで、ポイントを確認し、兄達の遣えいに、伝えた、そして、ゴミ捨てをして、かえって来て、ボールペンの使い方を電話で確認して、ちよつと疲れてしまった、イライラしていた時ふと、静かに首を低めた、すると何か大きな、懐に入ったように、疲れは癒された、しばらく、そのままの中にひたった、私にはその時神に出会ったように、思えた、有り難いことだった、私は元気になり、夕食の支度にとりかかった、今日はこの平安に浸れたことを感謝して一日を閉じようとした時、マタイ受難曲を聞いた、そして、私は四月の聖晚餐でパンを食する時、疲れたり、身体がだるい、と言うと、主が、セルフコントロール出来るようにと言って下さったのを思い出した、そして、今日それが出来たのだと分かって、驚き、深く感謝した、そして、テレビの心の時代を見て、私は

学生時代のセルフコントロールに戻っていった。

◆ 鳥久 密 (19) 福島県

目

めってこわくないですか
大量の眼に全身が包まれている感覚
君も感じたこと あったりして
めってこわい

そのメダマをじょうずに瞼でくるんで
器用に微笑う君
君はわたしのレンズをのこのこ歩いて
私の脳に直接やってくる

本当はどんな顔してるの？

君のその

ブニブニした透明なレンズに
水っぽいその君のナカに

わたしは映っているか

どうかな

どうですかね

め、そらさないで。

◆広瀬求（41） 秋田県

愛を止めないで

レンタルショップで映画を借りて

家に戻ろうとした信号待ちで

初心者マークの青い車の二人がキラキラした瞳で微笑み合う

僕は海が見たいと思う

国道のバーキングエリアにバラソルを見つけ

愛想のいいオバサンからババヘラアイスを買って合流する海岸

線

灼けたフロントガラスの内側に

さつきから張り付く小さな蜘蛛を相棒にして

エメラルドグリーンの水平線の果てに

どこか遠い遠い異国を思い描く

見下ろす工業地帯の景色が

バックミラーから遠ざかれば

窓から吹く潮風が耳元で僕に囁く

「愛を止めないで」と…

◆甘夏これ（27） 埼玉県

晩餐のまえ

午後、ジャスミンライスの底ぬけな香りは

かわいた夏を思いださせるの

ママはインドのルーツを持っていて

スパイスのにおいが

キッチンのかどにのこっている

そのばしょがお気に入りで

いつも思いつめるまえに

やっとなげて来られたと

ここにたっていた

生まれた国になじめなくても

それが良くないことだと知らされても

はなれたかった空にはなかった、

ちいさな星座があつたから

あたしはこの家で

こどもをやり直したわ

料理中にたずねるとママは

つくりかけたサモサとヨーグルトソースを

つまみ食いさせてくれるの

つらくて舌があつくなるわ、という

いとおしく笑ってくれて

もうひとつ食べていいわよ、と

いってくれたわ

その瞬間がどうにもならないくらい

しあわせであると実感できて

奇妙だった今までの人生なんて

もうどうでもいいくらい

◆デイジー（87） 福岡県

百日忌

お父さんが亡くなって 百日目

灯明を灯し お供えをあげて

朝晩の 般若心経を唱え

お父さんの晩年を 思い起こした

床に伏しここは何処かと訪ねられ わが家と教える淋しさ込み

る

要介護5 火口のごとき癬瘡の 手当にあたる我子の 有り難

み

いちにちに 何度も変えるおむつ替え ありがたいの言葉の変

化

ベッドまで 少しずつ遠く抱えられ かなわぬ歩み進める夫よ
末期だと言われ退院 早や5年 過ぎたる月日 有難く思う
腹減った 食べた事すら忘れゆく 今日も過ぎ去る秋のいちに
ち

外は晴れ上がり ぼかぼかとした暖かい日和だ
近くの公園では 子供たちの元気な声が聞こえる
テレビは 各地の桜の開花を報じている

◆深澤 健（61） 埼玉県

定年退職

いつもの朝いつものホームにどれだけ立っただろうか
今日もまた名も知らぬ多くの人と同じホームですれ違
しかし、今日私が定年退職とは誰も知らないだろう
明日私はここにいないと思ひ、ふと回りを見渡してみた
やはり誰も知らない顔をしていた
少し感傷にふけてっていると電車が来た
いつもの時間いつもの車両にどれだけ乗っただろうか

今日もまた名も知らぬ多くの人と同じ車両に集う

明日私はここにいないと思ひ、ふと回りを見渡してみた
やはり誰も知らない顔をしていた

少し感傷にふけてっていると座席が空いた

いつも座れないのに今日座れたのが不思議だ

何だか定年退職のお祝いのようにで少しうれしい

明日私はここにいないと思ひ、ふと両隣を見た

やはり誰も知らない顔をしていた

私はいないが、彼らは明日もここにいるのだろう

名も知らぬ友よ、明日もがんばれ

◆樹（17） 兵庫県

今日は来ないな、昨日も来なかった。そういえば、一昨日も話
さなかった。そんなふうにいるうちに、彼女がいた日常
は、僕の手の中から簡単に消えてしまった。

僕の隣に座らなくなっても、彼女の隣にはいつも、僕以外の人
がいた。

気付いているんだろうか、強気で面倒くさがりな男のフリをして、ずっと二の足を踏んでいる僕に。それとももう、僕には興味がないんだろうか。

だから、あんなに確かに離れていったのに、今でもときどき、思い出したかのように笑顔で話しかけてきたりするんだろうか。

騒がしい教室の中で僕の姿を認めて、途端に花が咲くように笑顔になって、僕の隣に座ったのに。

まるで居場所を求めるように、僕の隣に座っていたのに。

◆屋敷旺甫（51） 京都府

百日紅が咲いている

ああ

百日紅が咲いている

樹のしたで

呪われたお面をかぶり

あなたは揺らめいている

なぜか笑っているのがわかる

すべてが怪しい

そんな気がした

町はいつかの大水で

流されてしまった

魂は天に登ることを知らない

樹のしたに留まるばかり

「実はまだか」

「実はまだか」

透明な老人たちは呟く

さまよう人々は

浄土を知ろうともしない

ただ愛したものを探すだけ

ああ 百日紅が咲いている

樹は百日紅だったのだ

わたしはなぜここにいいのか

それを突きとめなければいけない

夏の風は花を弄ぶだけ

わたしのふくらはぎに

大きな蚊がとまった

赤い血をたつぷりと吸う

いま気づかなければいけない
かすかな痛みを

どこかに忘れてしまう前に
すべては怪しい

あなたはいつまでも

呪われたお面をしたまま

樹のしたで

焰のように揺らめいている

ぼやけた色彩は無でしかなかった

ああ なんてこと

百日紅が咲いている

◆柳生たまみ（48） 神奈川県

雪解けのように

長いこと胸の奥に刺さっていた

棘が今朝すーっと消えていた。

夕べあの娘の喉にブリの小骨が刺さったが

数時間後にはすっかり無くなっていった。

取れたのか溶けたのか

無くなった瞬間までは気付けない。

私の棘は悪意の言葉で形成された骨で

トラウマとして胸に刺さった状態だった。

尖った骨は私の心の平穩を奪い

体の一部となり心に膿を溜めた。

骨は抜こうとして触るほど深部に入り

濃い膿を永遠に作り続けていく。

行為の継続はあまりにも不毛すぎる

もう骨に固執することをやめよう。

解決策は渾身の力で構え挑むことを止め

意識をそこに向けずに力を抜くこと。

手の平のグーをパーに変えるだけでいい

パツと両手を開けば簡単に手放せるものだ…

固執は心を執拗に拘束し苦悩を増幅して

漠然とした苦しみを与えてくる。

開放は雪解け水が大地を清めるかのように

心を濃い膿ごと綺麗に洗浄してくれる。

大量の膿に埋もれ長く居座っていた棘が

やっとなら根っこから存在を消した。

◆南久子 大阪府

床もみじのこと

川端通りの東河岸を通り過ぎるころ

タクシードライバーは語り始める

樹液で磨かれた板の間に映り込む

床もみじのこと

わたしたちが団欒の賑わいを

深く掘られた地層に

押し込んで来たのをまだ知らない

背中が上流へと

けだるい風に押され

実相院近くの目的地に着く

彼は無事に業務を終える

入り口はオリーブの木で隠れ

わずかなすき間から見える

洋風の建物には表札がない

見覚えのない草の花を跨ぎ

五十音と数字の組み合わせで

仕切られた木箱の前

ーただいまー

を聞く

板張りの廊下を進むと

つきあたりにエレベーターがある

何度も乗り継ぎ 曲がりくねって

下降してはまた昇る

迷路だ

踏みつけよ すすめよ

床もみじが燃え尽きる先まで

屋上の上り口で

今日連れて来られたという老人と

一緒にお茶を飲む

頭上で開花する夏のなごり

花火の音に含まれるざわめき

川端通りの西河岸を通り過ぎたころ

床もみじを案内してきたばかりの
タクシードライバーは語り始める
眼の奥に散る逆さづりの
床もみじのこと

わたしたちが落葉舟のゆくえを
網膜に映し取れなかったのを気づいている

屋上で打った指でつぼう

織細に

もつとも織細にして

高野川と賀茂川の合流する上空へ

◆れい（12） 大阪府

父との思い出

二人で

ワクワク ドキドキ

イスに座り

物語の 始まり 始まり

キュッキュツ ダムダム

心に火がつき 温まる

過去のこと 辛いこと

全ての経験

試合に捧げ

この一本で 勝敗が決まる

シュツ

この気持ちいい

音のため

皆が足を運ぶ

皆の心を動かす

物語

これは私と父との物語

ニューヨーク便り

◆阿部静雄 New York

晩秋の愁い

晩秋の^{ひとけ}人気のない夕暮れ

都会の小道を黒人の男が

彷徨いながらステップを踏んでいる

風が渦巻くロック調の黒人聖歌

ひとときわ私に愁いを含ませる

ひとときわ孤独な枯葉が齒切れのよい

リズムの心にななわせようと

彷徨ながらステップを踏んでいる

黒人聖歌に身を捧げせざるを得ない男

この世の一切の苦を忘れさせたいのか

何かを呟きながら

時折奇妙な声を上げては落ちる響き

私はますます愁いを深め

私の心も身も男の愁いによりそって

ステップをふむ私がある

やがてロックのビートの響きが

遠ざかっていくも

私の心には奇妙な男の愁いの残影

秋が終わろうとしている

冬のわめき

春が雲の上で花を咲かせている

その花を炎上させた太陽が

舗道を黒焦げにした夏

焼き付いた

黒くただれた舗道の上

秋が這っていく

やがて疲れ果て

絶望を露わにすると

空虚な断崖の冬がやってきた

私の思考はそこで停止した
後はおまえが
道を造れと冬が絶叫していた

影

人間には虚しい影がある
陽が昇れば影は私にまといつく
雲に遮られれば幻影となる
降る雨は私を消しさる
はかない私の影
影が私を見つめている限り
死ぬまで生きるぞ

三時になるときまつて

三時になるときまつて公立の小中学校から子供たちがキヤアキ
ヤア
喚声をあげながら羽を伸ばして飛び出してくる 日本食を買い
込んで膨らませた重いリュックを背負って家路に急ぐ私

解放され陽気に騒ぐ子供たちよ

ベチャクチャ喋るその雑音だつて

君たちのめちゃくちやなラテンリズム

そして黒人ラッパのたてるテンポに

私の耳は大きく開いたままだ

そして私の目を細めさせ

君たちの破れかぶれのフアッションに

呼吸するんだよ

活気と陽気を胸に吸い込むように

きまつて君たちみんな私と同じ有色人種

きまつて私とおなじアツパライーストサイドの

セカンドアベニューだ

ああ思い出す

なぜか黙りを決め込んだ陰気な子供

それが私だったとは

だが目の前のラテン系の子供たちは

すでに肉体を誇って若い魂さえ

陽気で誇らしげだ

三時になると私立の小中学校からすまし顔の子供たちがゆっく
りと流れ出てくる 散策の途中で出会い見えた私

陽気さを忘れた子供たちよ

なぜ解放され自由になって羽ばたかないのだ

抑えた声でお喋りとは

そして無言のままに高級マンションに帰っていく

きまって大多数は白人だ

きまってアツバーイーストサイドの

パークアベニューで

きまって貧しい顔した有色人種の付き添い女と

ハツとする美しい乙女との目と目の出会い

だが決まって私を見下している

私はついに無縁なる社会に侵入してしまったのだ

私のアパートからたった数メートルなのに

数キロメートルとは

金持ちの国

貧しい国から金持ちの大国に

続々侵入してくる不法移民

貧しい人間の川の流れは

止むことはない

そして思い知る

薄っぺらな精神と偽善に満ち満ちた

大国であることを

今でも孤影の水平線を見つめながら

涙する老いた男の存在を

旅の末に

富士よ

真っ青な空を吸い込むごとく

我を彼方の異邦から

大きく吸い込んで

駿河の海に吐き出してくれ

私が私であるために

情熱

閉じ込められた冬の部屋で

情熱を引き裂いたごとくのピアノリスト

ポゴレリツチの演奏を堪能した

シヨバンの情感が花弁を折り曲げて

私の心の底に赤い百合を咲かせる

冬の部屋のなかは激した急雨も去り

音一つしない

だがピアノの音は静止したようだが

動きを止めず

私に雨だれを浴びせる

窓の外の太陽はなんと弱弱しい光を

投げかけていることか

トランク

私はトランク一つで

摩天楼の街角に降り立った

私の長年の貧しい荷物であれ

私はトランク一つで帰国するだろう

体験と経験が語る堆石のごとくの

精神を詰め込んで・・・

落穂

ふと見つけた落穂

拾っては集めた

存在と時間の思い

古沼の辺で

葉に別れを告げた侘しい梢の群れ

冬の激風のなかで一心不乱になって

隠した実を探す探偵の栗鼠

小さな虫たちは大地に潜って動かず

暖をとっているのである

古沼の鴨たちもじっと春を待ち望んでいる

表情が波間に映る

頭をもった人間だけが何やら

ものに取りつかれて慌たらしい

天に羽を広げた一羽の鳥

ああ私を見つめ 私も見つめ

鳴いている
鳴いている

自画像

集めた老いの忘却の頭と
るつぼで残り火の愛を溶かす
売れなかったギラギラの油絵が
水彩画に変わった途端 売れた
買ったのは私であった

逃れえぬ毒

いつそう人を疑うことが
日暮しの飯のごとく平気になった
コロナウイルスが私を包囲している
となると助けを求める人にさえ
無口になってしまったのだ
マーケットで
歩道で なりふり構わず
エゴイズムの私となる
だがマーケットの前で

座り込んだホームレスの女に
しゃがんでいたわりの声をかけ
買ったばかりのパンやヨーグルトを
差し出している若い女を見るにつけ
私に恥じる気持ちが弾丸となって
脳裏を穿つ

どこへ行っただ
染まった分かち合う個人主義は
まさか吹き飛ばされてはいないだろうね
おや大雨が降ってきたようだ
私を再度穿つように・・・

冬の川の辺で

逆波 ハドソン川の雪を蹴る
私の存在
靴跡の流れに逆らって
いや流れと共に いやいや
流れに逆らいながら
晴れ間を失った空から
雪をかぶる

昏迷のごとくの靴跡に
冬の日が果てる

春声

寒風なれども米寿をすぎた穏やかさ
杖に力を込めたあの老夫婦
座った都会の森のベンチで
猫背になって前方を見つめている
子供のいない揺れるぶらんこ
振り返れば老夫婦の彫刻姿
己を振り返っているのだろう
揺れる揺れる
揺れるぶらんこ
春声が押し寄せてくるようだ

セザンヌ

隣接したセザンヌの部屋を横切った
自然があるがままに存在の歌を
静かに歌っているようであった
激しくも厳しく自己に戒律を課した

修道僧が自然に対峙していた

梢の雪

馴染んだ都会の森の小径に飛び出した
しばらくして坂の上で足音を消すと
無数の裸の樹木が目に入ってくる
ああ美しい幻想
散る雪が梢の花のごとくなり
一瞬 頭上に鳥の明るい声が遮った
春風に触れたようだった

犯罪の協奏曲

頭にこびりついてしまったよ
今に始まったことではないが
私の住むN Y市で恐れと不安が凝縮し
血栓状態なんだ
とどまることを知らぬ殺人 強盗 強姦事件
繁華街で 地下鉄のプラットフォームで
病院で 中産階級のアパート群で

汚れた貧困街で 日常茶飯事になってしまった

信じられるかい

「幸運」が殺されない 略奪されないってことが
クールな言葉になってしまった現実を
そりゃあハーレムと聞けば観光客は恐れて

誰も行きたがらないさ 土地の人間だって

避けたい思いが強いんだよ

顔には出さないが・・・

でも俺は強がりをいうけど大丈夫

用事があつて週二回マルコムX街に通っているんだ

何もかも目にするもの アパートの建物だって

食料品店だって 美容サロンだってすべてが

汚れきつていて貧困街であることが一目瞭然だよ

ゴミが吹きさらしになった歩道の上には

浮浪者がたむろし首を落としては彷徨っている

そんな光景のなかで一人の眼だけが鋭い浮浪者が

俺を待っているかのように見つめる時がある

両手をポケットに突っ込んでじつと

最初はドキツとしたけど もう慣れてしまったよ
慣れてしまえばここは

安全だ だって俺だって有色人種だよ

それにハーレムに来る時はしゃれた格好は禁物

皆と同じさ 何もかも汚れた古着だよ

今では彼らと同化し 彼らの救いようのない虚無が

異化できない私の存在を見つめているよ

でも心は清貧さが・・・

無いんだろうね 彼らには

虚無そのものようだからね

苦悶

描きたい 描きたい

戻ってくる描くことの義務

精神病院の鉄格子窓から見えてくる

真っ白な五弁をひろげた果樹園を

描かねば 描かねば

戻ってくる描くことの義務

目の前の美しさを

己の本性と金を貪ってきた弟レオの
愛に応えるためにも

描く 描く

逃れることのない

悲しみの胸の慟哭

浴びせる春光に寄り添いながら

ゴッホよ ゴッホよ

慟哭の宿命

自然の美を目の当たりにして

あなたのその深い声が

私の心に響き渡るのだよ

大都会ニューヨーク

現実と幻影

ああやって来た やって来た

バックに詰めた夢を背負って 遂に

そして人生の岩のごとくの高層ビルの

階段を上がつたり下がったり

花を咲かせようとするが叶わず

茎の折れた花になる

それを摘まんでは心の花瓶に差すが

萎んでいく花の悲しさに

零れては流れゆく涙

思いは捨てられず

幻影の老者となって

バッグに夢を詰める私がある

雨の伊勢神社

伊勢に入ると雨雲であった

宇宙に光を照らす太陽の神はただただ

雨と神風を私たちに吹き付けてきた

でも高床式の自然の恵みの宮のある

外宮をめぐると 私は岩の上に

二対の触覚を露わにさせた大きな蝸牛を

見つけたんだ　それがゆっくりと
私に向かつて張つて来た時には
何かの縁があつて私に話しかけたい
そんな気がし　私の心を動かした
雨に濡れた外宮での参拝は終わった

内宮に入る宇治橋を渡ると

奥深い緑一色の森が寂寥を湛えていた

第一の大きな鳥居　その前で

突然の強風が私の傘を折った

妻は鳥居の前でなぜか丁寧に頭を下げた

私は無視してしまった

未だ強く湧いてこない神話への信仰心

足裏の砂利の響きが虚しく響くのみ

妻はたびたび現れ出る鳥居の前で

神域に入る心構えの腰を折っている

ひっそりした雨は止まず

老樹の杉が雨雲を突いている

参道の果ての石造りの階段を上がると

雨を突き抜ける強風が正宮の上を通り過ぎた

私の傘が再び折れた

なぜか私は天照大神の鎮座する正宮に向かつて

腰を折っていた

遠くに見えた妻の参拝姿は美しかった

いや　参拝する者　老人も子供も

全ての者が美しく　なぜか一瞬の薄日に

照り輝いているようだった

宇治橋から見る五十鈴川は

人々の煩いや苦を集め洗い流し

参拝者を清めているようでもあった

落下する新宿

思い出が覆された樹木に咲いた黒い心の顔

高層ビルのでっぺんから虚無が落ちてきて

私のところをゆっくりと掻き回した

憂愁の色彩

都会のミッドタウンに夕暮れ時に来てみると

解体されていく教会

その隣で高層のどす黒い鉄筋ビルが

工事なかばであった

カフェを出ると

耳をつぶす地下鉄の轟音

闇にきえていくどす黒いトンネル

黒い肌の歌い手が

ギターを抱きながら陽気な歌をふるまうが

困窮の侘しい声が闇に消えていく

心を閉じたまま地下鉄を出ると

とじたままの心に

割れた鐘が鳴っていた

消えない日記

安ホテルでの野宿

不安が立往生したまま

ポケットに突っ込んだ不明な未来が蠢く

ミッドタウンを終日徘徊しては

職探しに

灰色の時間を追いやる

どの店もドアを閉じている

高層ビルの鏡戸は拒否の顔で睨んでいる

いけど いけど どこまでも

摩天楼の影が執拗に追ってくる

聞こえてくるビートの響き

シンバルの崩れそうで硬い叫び

昼の暗さも 夜の暗さも

おぼろげな月だって隠れてしまっていた

さくらのいし

いつものカフェのいつものテーブルにつくと

ニューヨークタイムスが目の前に

置かれていた

ブラックコーヒーをすする

頁をめくる

コーヒーをすする

また頁をめくる

苦味がしみる

何度も頁をめくる

何度も苦汁をのむ

飲み干した

紙コップの中の人殺しに満ちた情報

コップを握りつぶし捨てた

だが かけめぐった

いたたまれない憂いの導火線には

どうにもできなかつた

夏の色調

小さなレストランが横並びに集中した

アッパーイーストサイドのセカンドアベニュー

黒も白も黄も茶も多彩色が自己本位で動く通り

高血圧的感情の若者の群れのおしゃべり

糖尿病的の中年のだらしない徒歩

貧血的感情の老人たちの佇まい

大量の空き缶を漁って生きる貧困線直下の異邦人

人間と人間の絡みなどどこにもないのさ

一日部屋に閉じ込められた犬だけが

孤立人間に入ろうとするが

飼い主がいきり立って邪魔するだけだ

犬だつてそれで満足した様子

明るい色調なんてどこにもないのさ

これが俺の街なんだ

響いてくるんだよ ああ音色が

夏なのに染まつたブルーが・・・

真夏の下のブルー

真夏の孤独の影を

マイルス・デイヴィスのジャズで満たす

足取りはトランペットのブルーの響きに同調

時たま潮流に抗って終わりのないシンバルが

潮を遡ると 孤独が力を得て

一時の重苦しい脆い悲しみがベースの胸を弾く

真夏の孤独の影よ

満たされるマイルス・デイヴィスのブルーの響き

果てしないブルーは死そのものだ

深い闇のなかでピアノが奏でる死の臭い

私に纏いついた影

分かつているよ

こும்長く生きてきた道なんだから
それが美しい潮騒であったことも

真夏の影よ

恋のただれ

籬かきを外した理性と感情の不可思議な

夏と冬の時代

思春の美に引きつけられて

狂った片恋かたこいの思い

羅針盤は東西南北も分からず

罪深い恋の悪党に われ

なんと深く苦しめられたことか

死か がまんか

やるせない やるせない心

死に重なっていく恋のただれ

老いになればなるほど

夕立の潮騒

薄紅色のあなたに会った

樹木の陰の草むらの輝く眼よ

私に絡みついて欲しかったのに

愛しい顔よ

夕立の潮騒が涼しさを運んできた

あなたを連れ去ろうと来てみれば

絡まった茎もなし

もののけに襲われて白雨とともに

消え去ってしまったのだろうか

もう一度 もう一度

薄紅の妖精の顔を見せておくれ

あなたが誰であるかを知るために

昼顔よ

古い身の思い

秋風に吹かれて

梢が紅葉に色鮮やかに

発色していくのが見える

恋心のごとく

秋はてた古色の俺

おまえを通して

雷光を浴び切っては狂い

尖った乳房を貪っては月夜に酔い

夜道ではおまえの名をきざみ

黒髪をひっぱっては唇を求め

黒い森に真つ赤な薔薇をさかせる

冬に耐えねばならぬ

俺の変色した恋心

許せ 古き身の己を愛することを

梢が冬に果てるまえに

『金澤詩人』を20号まで発刊したのを節目に、次年度から新たに『氷見現代詩大賞』と模様替えすることにした。

隣の氷見に住しながら、金沢に事務所を設けてまで賞を立ち上げたのは、金沢という街の魅力であった。特に浅野川に架かる木の梅ノ橋を、風に吹かれながら渡り、東茶屋街のゴーシユや一笑などのカフェで寛ぐ醍醐味は、毎週のごとく足を運ばせるほどだった。

ところが北陸新幹線が来ることになって様相は一変した。観光客に溢れ、路地の陰影は失せ、雑踏に化してしまったのだ。

あゝ、もう金沢に来ることは止そう、と思うようになった。

そして今年元日の能登半島地震、詩に記憶を留めようと、改めて文化的に能登圏に属する我が街と周辺を見渡すと、アイヌや渤海などの根を持つ風土に目を見張ったのだった。ことに氷見の水平線に浮かぶ霊峰立山を見よ。毎日が我に目覚めを促す御来迎だった。(礼)

金澤詩人第20号

2024年3月27日

金澤詩人倶楽部

代表 近岡礼

〒935・0022

富山県氷見市朝日本町4番13号

090・3298・1682

mimi.7.kei@gmail.com

2023 金澤詩人賞

金澤詩人第20号